

天上の貴女。 吉祥果

五十一

「 人參と里芋、 ー 蓮、 ー ー 」

と、鬼子母神の御厨子の前の御供物を、斯う、靜
に視ると、唯八百屋に似て轉がつて、長屋のかみさ
んが安いお惣菜の計略を、前掛の帷幕にめぐらすや
うな尋常なものではない。名工が丹精した心ある繪
のやうに、黒塗の臺に浮上つて、
人には小袖、襦袢、里芋には長上下、蓮には素袍烏帽
子を着せたらば、此の燈明の影に、其のまゝ歌を詠
みさうな氣勢がある。

昨夜と今朝の、お寺の精進ものゝ御馳走も、おな
じもので、此を思へば分に過ぎた。

「 御馳走様。 」

と胸の裡で。

「 皆生だから可いけれど、 ー お鹽梅がしてある 」

と、こゝへ来たものが、鼠か、猫だ。

ガタリ、ゴトン、トンと、もの静にすればするほど、何處からともなく古色蒼然として金箔の影の映す、香の薫が沁みた御厨子の前の薄暗い板床が、寂寥とした御堂の隅、音の高いまで響くのである。

ふと、御命講の佛壇に、お上人の耳の大きなを思出す、――こゝには見えぬ、――其のお上人は向山の墓所の經讀みに、參られた、今は留守で。

東京では丁どお橋が二階の掃除を済し

た頃、――

「これが、小橋際の附焼團子だと、大川筋の小流へ掛る此方は獺だよ。」

と、秋冷く、謹んで床をやゝ近づきながらも、幼馴染の御本尊。然かも悪鬼羅刹の凄きにてはましますぬ。半輪の月を兩方へ開いた上の壇の御厨子には、御丈七寸と承る、天衣、瓔珞玉簪の

端いづく厳きしき貴ぎ女の御おすがた姿たふととて、尊なかい中なにも可な懐なしく拜をがま
れる、たゞし、映えいざう像うへで、此この上うへに、奥おくに一たい體しんび、神しん祕び
なる金きんざう像ざうを据すゑてあるのである。

憚はよがり多おほくも、したしみある天てんじやう上きふじんの貴きふじん夫人に、嬰みなしこ兒こ
の懐なつくが如ごとく、易やす々と近ちかいて、前ぜん後ご左さい右いうに立たち蔽おほふ吉きちじ
祥やう果くわの枝えだ葉はの影かげより近ちか々と伏ふし拜をがむとして、下したに目めの
前まへなる、其その人にんじん參じんなどの御おく供もつ物を見みれば、三ほう方かみに紙かみ
の札ふたして、

上たてまつる 麻あさ川かは禮れい吉きち

と記しるしてある。

昨日きのふは、お上しやうじんにん人にんに心こゝろばかりの一ぶつ封まを進まらせた。

とばかりの事ことに、映えいざう像みづしの御ひら厨とつみやう子も開あかれ、燈とう明みやうも
捧さくげられたか。

ふと、可な懐なしき女をんなの名なもあらばと、さみしさの餘あま
りに漫そぞろに感かんじた、あゝ、鼠ねずみも、猫ねこも、獺かほぎそも、八はツと
我われを忘わすれて跪ひざまじいた。

と心に銘じて念じたのである。

おなじ黒塗の柱に寄せて、團扇太鼓の一重ね積ま
れた傍に、蠟燭の並べてあるのを取つて、御燈明を
映して、石榴の果形の蠟燭立に點ずると、一挺二挺、
點けると三挺。吉祥果は、果ながら紅の花を赫耀と
して咲せた。

濃い紫の幕の影に、石榴の花の明を辿れば、綾、
錦、金、銀、珊瑚、青磁、黄銅、紅瑠璃器。蒔繪の
御厨子の前後左右、皆其の枝に葉に花に、吉祥果の
林である。

燦爛として輝いて、然も深く濃く、幽に遠い光
が映す。

堂の傍の破壁には、隙間もちら／＼と見えて、
秋の空が白く覗く、外は荒たる墓所なのである。

禮吉は熟とも思つた

向山の父母

の墓はかは？

其處そこに、お上人しやうじんは？

お光くわうは？

前塚まへづかの稱となへもあはれ、塚つかに埋うづもれたるやうな露野つゆのは？

我家わがやのお橘きつは？

花の數さへ三種ばかり、山國の秋の色濃くあはれ
 深く、供物の壇を一段奥に、鑄びたる青銅の對の花
 瓶に活けて供へられた、左右に、齊しく對らしく、
 時代も嘸ぞ、と思はるゝ赤繪ながら古九谷の菊模様
 の鬢油入が据ゑてある。形の雅にして幽婉なるより、
 一層、其の伽羅蘭麝の香油を注いだ。柔かにつや々
 艶かなる黒髪の長さの丈が惟はれて、たとへば、吉
 祥果の爾き林の中に、一朵の緑の雲の靨黷く風情が
 偲ばれた。

傳へて、當時の鬼子母神は、東京雜司ヶ谷の本尊
 の映像と言ふ、其の法明寺の鬼子母神は、此の國三
 代の英主が第三の姫君、藝州の松平に嫁して安藝侯
 の夫人として、淺からぬ信仰隨縁のため、當時、金
 殿、玉架、彫棟の大工事を修したのであると聞く。

或は故郷を可懐んだ、おなじ安藝侯の夫人の、此
 處に營んだ御像であらうも知れぬ。

ものかはり、星うつり、縁起、由緒も臆氣ながら、
國の古老が言傳へて、未だ一たびも焼亡した事を聞
かず、周圍十町の、火ぶせの神とさへ言ふ、寺の古
きにつけても、昔の品位と典麗と榮華の状の何とな
く想はるゝ、此の床しさの鬢油入よ！

禮吉は、ぞつとするまで、母の鏡臺の抽斗を想出
した。

石榴の花咲く、燈の光に、なほ伸上るやうにして
熟と視れば、菊模様の間、雲と水と、水は龍の如
く、雲は鳳の如きを輪廓にして、右の一具に、

南 海 慈航
二 水 楊 枝
皆 見 性
また一具には、
伽 山 淨 土
夜 叉 龍 女
盡 生 天

と一聯の文字が刻むが如く、青く見えて明かに讀まれた。

惟ふに觀世音の慈愍である。として此

の持主なる、遠き昔の女性の姿が其の上にも可懐ま
れた。

水と雲 菊、白菊、白菊谷 貴夫

人、――

南海慈航

二 水 楊

楊枝、楊、お楊さん、

ハツと打つ氣が、蝋燭の灯を驚かして、一挺スツ

と伏つた。

世をかへたりとも許さるまじき、人妻を、我が此
の戀は何事ぞ。

日を塞ぐが如く、壁の隙間の小さな穴の一處、衝
と暗く成つたと思へば、知らぬ蟲が、つる／＼と其

處を這ふのである。

「斑猫。」

と、襲はれて、猫も鼠も獺も、矢に追はるゝ如く衝と慌しく退つた。

それ躓きはせぬか。

知りつゝ、一段、ガタリと踏んで落ちると、然も床の朽ちた古畳のずぶりと沈むのに、諸膝を折つて支いた。

其の音の、我ひとりに、ドシン／＼と、耳に響いた凄まじさ。

人が見ねばこそ、怯えて這ふやうに両手を泳がせ、一もがき藻掻いて、鉦、太鼓、木魚の傍をば、ハタ／＼と交して通ると、呀、撥は光つてぶる／＼と躍り、朱の柄の撞木はスイと立ち、木魚は、モクリ、ムク／＼と動く。

「御免下さい、堪らない。」

鳴るな、鳴るな、響くな、敲くな、饒舌るな、言ふな。

な音^{おと}せそ、と遁^にげて行く^ゆ。

正面しやうめんにまいら戸どの格子かうしを隔へだてた寶錢箱さいせんばこの前まへに、吻ほうと息いきを吐つく、と可怪あやしく、凄すこく、且かつ美うつくしい夢ゆめから覺さめたやうに成なつて、茫乎ぼんやりして、疲つかれた状さまで、渠かれは階きの壇だんに腰こしを掛かけた。

が御厨子のみづしに向むかつても、さて背後うしろにしても、何方どちらにしても、例いつもは餘所よそから、此處こゝへ參詣おまゐりに来くるのが、此この寺てらが隱家かくれがの、昨夜ゆうべからの宿やどと思おもふと、門前もんぜんの方ほうへ向むかつて、恚いかう腰こしを掛かけた處ところが、何どうやら急きふに、出家しゆつげらしく、寺てらの内うちのものに成なつて、參詣さんけいの人ひとを迎むかふる、妙めうな氣きがする。

禮吉れいきちは薄寒うすさむさうに、二度どばかり頭つぶりを我われと撫なでて見みた。

下したの土間どまを劃しきつて、腰障子こししやうじの閉しまつた、外そとが境内けいだい、
で、例れいの手水鉢てうづばちの埋うもれた池いけ、門前もんぜんの町まち、其その町屋まちやの、
屋根越やねこしに見みえるのが向山むかひやまである。

ト峰の松が障子に映るやうな感じがする。同時に、塚もこんもりと其處に、小さな然れば、丁ど繪馬に描いたくらゐな針屋のお光と、お上人の姿が、イみつゝ、屈みつ、影法師に顯れさうな。

尤も、それは氣ばかりで、同じ山ながら、此處で見えるのは峰が違ふのを豫て知つたし、彼これ正午頃かと思ふ門前の人通りはやゝ多し、誰にも見られない方が氣易く好都合な渠は、其の障子を開けて、瑠璃の空を視めようとはしなかつた。

今頃は、墓が、塚が、と其の穿返されつゝある筈の親たちを思ふと、何事のないにつけても、我が胸の骨に、ざら／＼と土が掛るやうである。

尤も喜んで東京へ、ともに連立たうとする両親の心を知れば、心に浴ぶる土は、しかし、松葉がほんのりと香ひ、董が幽に薰るのではあるが。

雖然、矢張り胸が騒ぐ。

渠は更に向直つて御厨子の面影を念じた。

こゝに寶錢箱の兩傍に、おもひ／＼が來ては捧ぐる、色々の花を挿した、が、日數も見えつゝ、葉の枯れたのも、枝が萎えたのも一束なる、大きな一雙の花瓶があつて、添へた臺に、底に、納奉、と一字づゝ記した仰向けにした柄杓の數嵩も又、夥多しい。水を掛けて、と言ふ心で、火伏の祈念をするのださうだが、何となく水を積んで波を重ねたやうに一方の山に對して、海を隔てた心地もして、不思議に旅の、而も一人なのが身に沁みた。折からの境遇もあつたのである。

「些と心細く成つて來た。」
と思はず悵然として冷い天井を打仰いだ。

爾時心付いて、あたりに掛つらねた、金紙、銀紙、千代紙や、また友染細工の、千羽鶴の、恰も簾に掛けたやうな内から、彼方此方に差覗かるゝ、かず／＼の繪馬を視た。願主、巳年の女、願主、午年、戌年の女、數多いなかには、母に似た年も、

名もあるであらう。

いとせめて、其を見ようと、心さみしさの餘り、
渠は腕を拱きつゝ静に疊を巡つた。

心は自から順禮である。

歩も、しとやかに敵であつた。

森に峙するやうに、花瓶の陰を窺つた。辻堂に音
訪ふやうに、鶴の簾を引いて仰いだ。

年も名も、まだ似たのさへ發見さなかつたが、一
面、目に留つたのは胸白く清らかなる乳をふくませ
つゝ、嬰兒を抱きつゝ、伏拜む、圓鬚に結つた、き
ものは藍繪具の婦である。

胡粉で、塗り繪の膚も、何となく浮出でゝ、目も
濡々と艶がある
描手は知らず、捧ぐるも
のゝ心が籠れば、血も動き、情も通ふ、繪馬に描い
たは何の繪も、分けて此の女、活きたやうである。

禮吉は親の慈愛に涙ぐんだ。

花賣。
伏柴。

五十四

「いや、いや。」
禮吉は衝とももの狂はしく身を退いた。

みそなはず靈ある前なれば、渠は敢て嬰兒と成つて、亡き母の乳を含むのを憚つたのではない。

天地も照覽あれ。

繪馬に唇を寄せようとすると、描ける鬘のおくれ毛の揺ぐが如く見えたのは、髣髴としてお光であつた。

いまも今とて、渠は恚うした向山の塚の前のお光を、遙に障子の裏に描いたのである。遠方の距離に、山の端の其の姿も、丈も、恰も此の、小さな繪馬に入るほど。

と卵塔場がすぐ外なる、居丈ばかりの肱掛窓の、

日ひ當あたりながら煤障子の壁腰かべごしに、膝ひざを折をつたやうに坐すわつて、再ふたび吐息といきをしながら尚なほ熟ぢつと視みれば、矢張やっばりお光くわうで。お光くわうはお光くわうだが、其その胸むねに抱だいた嬰兒あかこの耳みみが大きいやうで、一所しよに其處そこに立たつて御おき經讀やうどくじゆ誦じゆのお上人しやうじんの形かたちに似にて居ある薄すくか、萩はぎか、影かげもなくて、墓原はかはらから、さら／＼さら／＼と障子しやうじを撫なでる草くさの葉は、幽かすかに響ひびいて、數珠じゆずを揉もむ音おと。

と心こころゆく下したから、其その嬰兒あかんぼを抱いだいたのが、不思議ふしぎや、東京とうきやうに居あるお橘きつの、酸漿ほくじきを捻ひねる状さまに尚如そつくりに成なる。

「何どうかして居ある。」
禮吉れいきちは獨ひとり苦笑くしやうした。

庫裡くりにガタリと音おともせず、目めのくされた守男てのりおとこは、最もう坐睡あねむりをするのであらう、更さらに寂寞さびしさが身みに迫せまる。

細ほそい聲こゑで、ひそめいて、晝ひるの蟋蟀こほろぎがキリ／＼と、間まを置おいて鳴出なきだした。耳みみを澄すますと堂だうの裡うち。で、賽錢さいせん箱ばこの下したか、花瓶はながめの草くさの中なからしい。

其の草を洩れて、すつと繪馬に立つた娘がある。
萌葱の石持、緋の蹴出しの兩褙を端折つて、背に負
つた草刈籠に、枝ながら石榴の實を装つたが、被つ
たのをはづしたのであらう、ぶらりと提げた手拭の
其の端に、花瓶の露も、花の影も添ふ、結綿島田の、
可憐さ、優しさは、今を昔の露野の風情と、思はず
膝を立て、瞻つた。

「あゝ何うかして居る。」

猛然として、瞳を外すと、障子の破が眉に當つて、
薄の葉も目を刺さず、一面の葎の中に、位牌が土に
成つたやうな小さな墓、石塔の、ごろ／＼したのが
見通された。片隅の、其處には次第壞れに、崩れ倒
れて、殆ど垣のない、裏路の竹藪と、墓所の八重葎、
一むら繁き處に、ほんのりと白く、さつと青い、露
の垂りさうな色に出ながら、朦朧としてゐんだ、繪
馬と違はぬ姿がある。

「あ。」

とばかり、端折つた褙も紅と見た、が、やがて、
其が水色にさむるに連れて、裙を揚げた脛白く、衣

ものゝ柄も判然して、手拭を姉さん被、おくれの端も、猫じやらし犬蓼の繁る穂に遮られず、黄菊白菊、紅の小菊、同じ花籠は背負ひながら、繪馬が抜出た幻影ではなく、確に露野、と見ると齊しく、

「死にやしないか。」

幽霊？」

と口に殺して呟くまで、我を忘れて、障子を一枚。

はツと退るやうにして、律に肩を尚ほかくしながら、密と上げた、姉さん被の眉のかゝり、唯見て、さツと瞼に色を染めたのを見ると、禮吉は窓に伸上つて、聲よりは先に手で招いた。

が、我ながら旅に秋寂びて、薄が招くやうであつた。

招くと、招かれて、花も、露も、菊も、露野の身も揺れた。日はありながら幻の草の中を、袖、棲淡き秋の朝顔の色に出て、なよ／＼と石塔の間を縫ひつゝ、胸をしぼつた籠の緒に、膨らかに美しき乳も揺るゝ、と近づいたのである。

「何うした。」
禮吉は聲を沈めて唯言ふのみ。

窓下に積んだ、生粗朶の束を隔て、互に顔を見
たのである。

唯、睫毛は一つ／＼濃かにものを言ひつゝ、ふと
伏目のまゝ前後をニして、露野は被つた手拭を取る
と、鬢に觸つて、誘はるゝおくれ毛がはら／＼と心
持汗ばんだ、耳許の上氣したのを、指を外して、密
と押へて、
「御免なさいまし、失禮な、こんな奇いなりを
て、」と下しつゝ褌を、帶腰を折つて深く揃へつゝ
言つた。

溢れさうに、たわゝに揺るゝ菊の中に、石榴の口
が紅玉を銜へて輝いた。

此の静寂間に、花や、お花
ー
上人のもの語
を、蟲の聲とも聞く氣がして、禮吉は悚としながら、

「失禮も、何も無いが、一體」

あの夜の落人が、此の花賣。禮吉は又熟々と視めたのである。

「あの、若旦那は、あれから何うなさいましたでせうと　あの。」

「否さ、私の事なんぞ、お前さんがだよ。」

「はい、私は乳母も、あの小父さんも、まことに深切に優しくしてくれますの。　ですけれ

ど、私は何う遊ばしたでせうと、夜も寐ないで、心配しました。ですけど、私が參つて伺つては悪いんでございます。却てお爲に成りませんわ。乳母が昨日、自分で針屋さんへあがりましてね、若旦那は此のお寺においでなさいますつて事を聞いて來ましたもんですから、昨夜すぐにもと存じましたけれど、丁ど小父さんが留守でございましたし、一人では危いからつて、然う言つて、乳母が留めます。氣が氣ぢやありませんでしたけれど、それも然うです

し、無理にも出かねまして、辛抱して、そして乳母に連れられて、久しぶりで、ゆつくりお湯へ参りました。濟みません、おめかしゝたりなんかして。

「道理で、吃驚するほど綺麗に成つたよ。」

「まあ、可厭でございます。」
と粗朶に手について俯向いた處は、枯樹に花が咲いたやうである。

「荷を下さないかい。」
「はい。」
「何うして、そんな風俗をするんだね。」

「あの、今朝うかゞひますのに、彼處から此方までは、随分路がございますでせう。もう大勢、みるめ嗅ぐ鼻とかで、附廻して居る様子が知れて居るつて、乳母が言ひましてね。途中で大郷子の人たちに捉まへられると大變だけれど、何か思ひもつかない

やうに、恰好を代へる譯には行かないだらうか、まさか順禮でもあるまいしつて言ふんですよ。最う尼さんに成つても可いんですけれど
私氣
ばかり揉めて、ではお花を賣る娘の態、

と言ひかけて、露野は、颯と陰の映すまで、睫毛を伏せたが、

「私は、うつかり言ひましたんですけれど、乳母は最う其が可い、それに限る。よく此の邊からも、お花やが町へ出るからつて、急いで支度をしましたの。」

「それは、よく其までにしても。」
と言つて 此の時は、吻としたやうに、粗朶に向うむきに腰を掛けた露野の肩に手を掛けたさうに乗出して、

「よく来ておくれだね、嘸ぞ極りが悪かつたらう。」

「いゝえ、もつと悲しい。お恥しい事

ばかりな私わたしですもの。何なんとも思おもひはしませんけれど、お花はなを賣うります、こんなりでは、途とちう中ちゆうが駈かけ出だせませんののでございますもの。些ちつとでも早はやく、

若旦那わかだんな、貴方あなたの、

「

「おゝ。」

「お顔かほが見みたうございましたのに。」

と肩越かたこしに見みた、瞳ひとみを反そらして、

「ゆつくり／＼歩ある行きますのに、息いきばかり切きれまし

た。」

聞きく禮吉れいきちは息いきせはしく、窓まどについた肱ひぢで鼻はなの下したを

擦こすつて、

「難有ありがたう。」

と額ひたひを伏ふせるやうに、粗朶そだに差置さしおかれた花籠はなかごを視み

た。

「お土産みやげだね、其その石榴ざくろは。あゝ、成程なるほど、鬼子母きしもじ

神様んさまのお供物くもつなんだね。」

「若旦那わかだんな。」

「えゝ。」

「此はね、」

と向直つて、插した手首が花よりも尚ほ白く、

「あの晩、あの乳母の許を教へてくれまして家の垣根にございましたあれなんですよ。乳母に言つて、彼家から貰ひましたの。鬼子母神様へお初穂を上げてまして、それから貴方に。」

と莞爾して、

「内を出ます時は、枝ごとなんですから、此をずつと上へ載せて來ましたんですけれど、途中で背後から影が映りましてね、おやと思ひますと、何ですが、餘り目立ちますやうですから、菊の花にくるみましたの。あの、そしてね、
めし食りますものを。」

禮吉は勢よく、

「御馳走を。」

「御馳走ですよ。」

と力をこめて、そして、然も嬉しさうに、

「御馳走なんのつて、私のだと、そんな事は申せ
ませんけれど、乳母が昨夜から掛つて拵へました
の。」

「澤山？」

「えッえッ、澤山。」

とつい氣に乗つて、活々と、菊の枝葉を分けると、
底に、重詰の風呂敷包。忍ばして色は黄菊も、白菊
の名におへかし、満々と酒の一升罈。

「重かつたらうなあ。」

「いゝえ、些とも。」

「弱つた。何しろ、お上り。」

弱つた。

餘り思ひがけない處から、お前さんが来たもんだか
ら、嬉しいのと驚いたので、うつかりして、何だか、
私は。」

「お化のやうでございませう。」

と急に悄乎と低首れながら、

「御門の處は、私、些と、」

「分つたよ。」

「いゝいえ、人に見られます心配だけだと可いんでございますけれど、私は、以前、まことに申譯のない事がございますの、お聞かせ申しますと、尚ほ此の上に、あいそをおつかしなさいませう、堪忍して下さいまし。何故ですが、此のお寺へ参りますのに、こんな身装も因縁で、御門の處の敷居際で、吃と怪我をいたしませう。怪我也、生命も、それは厭ひはしませんけれど、もしか轉んで這ひでもして、其を貴方に見られましたは、」

と聲までも涙ぐんで、

「こんな身にも、其が悲しうございましたもんですから、餘所様の藪をくゞつて、狐のやうに卵塔から」

「狐、結構。」

と曇聲に景氣をつけつゝ、

「よし、よし、何でも可い、早くお入り。此のお入りをさ、御馳走を見てから言ふやうで、私は其に弱つてるんだよ。」

「あんな事を。」

と雲が切れるやうに、目に微笑の影を見せたが、窓越に、火鉢もない、蒲團もない、禮吉の冷い座を差覗くと、颯と暗く成つた。

「此處がお部屋、
「と言ふ下に、ほ

ろりとする。

「書院がある、殿様のやうな大廣間だ。床の間にね。又姫路の城の繪が掛つて居ようと言ふ立派さんだ。——何、廻る可いよ、直ぐ此の窓から
何、足が汚れて居るかい。」

「いゝえ。それに足袋を脱ぎますから。」

「ぢや、構はんよ。」

「でも、
「

「否、もう一息と言ふ處が大事だ。どんな事で見

つけられないものでもないから。」

「はい。」

「可いぢやあないか、ぢかに乗つて。」

「でも、後にお寵様で焚しますんですから。」

露野は手拭をすらりと粗朶に敷いて、傳つて乗つた。

「ま、お轉婆ですこと。」

と含羞みながら、

「よ、お轉婆しますわ。」 と、それでも、はず

んで膝を上げる處を、

「それ手を持つぞ。」

「あれ。」

ハツと伸びた手を宙に膝を敷居に、つられた踵が、白くちら／＼と泳ぐかとする、抱かるゝやうにトんと、辻つて、ひたと男の膝に落ちた。

「あれ、貴方と言へば、ねえ。」

「なか／＼身軽だね。」

「どうせお轉婆ですから。」

あゝ、

と花籠を手に取る露野が、

「お参りをしますのに、いま足袋を持ちました

わ。

「書院に手水鉢がある。」

「浄めましてから、あ、其の籠は私

が。

と花と引添ふ露野の袖を、小脇に抱くやうに立並

んで、

「御免下さい。」

と本堂の前を、小刻と、浮足に、繪ける繪馬の中
を抜けて通つた。

鬼子母神の話

五十五

「旦那様、

御主人だね。

「それはね、露野さん。

鬼子母神様は、何しろ千人のお子持と言ふのだから、そりや旦那様はあつたんだとさ。閻慢具足夜叉と言つてね、虎の皮の廣袖を着て、鱈の皮の裁着を穿いた、雑と山賊のお頭と言つた、印度の國の魔ものなんです。」

「可恐うございますわね。」
襟に頤して染々聞く

嘗て砂糖は天竺の雨のかたまりかと言つた、此の人に對しては、恐れながら釋尊も方便は用ゐられぬ。況や藍子に於てをや。禮吉は母から聞いた。たうろ覺えのものの語。鬼子母神經も寄婦傳も、陀羅尼集説もありとは知りつゝ、未だ學ばざる懶惰を恥

ぢて、忸怩としながら、

「鰐の袴 如きに驚いてはいけない。指鬘外道とか言つてね、魔法を修するため、魔王に捧ぐる盟の犠牲のために、人間の指千の数を九百九十九本まで、鱧の筋に繫いで、髪がみの飾かざりにしたと言ふ、若い凄すこい、豪傑がうけつなんぞが、さらに居た國だから。

第一鬼子母神様の養親

あゝ御養女らし

い。尤も炙もつと匿しや刀自ことじと言ふ、髪かみが皆蛇みなへびの姉あねが一人、摩爾まにはつ髪かみさんと言つて、此これは又不また思議ふしぎに美うつくしい妹いもうとさんが一人、中なかのお姉あねえさんの呵刹かせつ帝母たいも、鬼子母きしも神かみのお名なだよ。其その養親やしなおやと言ふのが、天てん

竺ぢくの大兜國だいたうこくに猫王山べうわうざんと言つて、蠻煙ばんえん、毒霧どくむ ー

硫黄いわうが湧わいて、水みづは血ちが流ながれて、石いしも巖いはも焼爛やけたれた萬丈まんぢやうの嶮山けんざんの絶頂べつちやうを住家すみかとして、百里岩りがんと名なづける

切立きつたての巖いはを、居あながら肱掛ひぢかけにして、頬杖ほづせついて、天てんに空囁そらささやく、還礙くわんき大王だいたうと稱とへる大魔王だいまわうなんだがね。女をんな

だが、男おとこだが、それが分わからない、孫まごに當あたる鬼子母神きしもじん様の千人さまにんの兒こが、五百人にんは、おぢいさんと呼よぶし、五百人にんは、おばあさんと呼よんだと言いふよ。

「其の筈だね、一寸した魚や蟲でさへ、學問をした學者でない雌雄の區別は分らない。惡魔の王様なんだもの、何うして、淺はかな、私たちに分らう譯はない。しかし演劇でする五十三次の岡崎の化猫ね。」

「緋の袴を穿いた白髮の姥の、あの動く耳の他に、牛のやうな角が生えて居ると思へば可いんだよ。」

「可恐うございますわ。」

「大丈夫、さすがの惡魔も、鬼子母神様が正覺をなさると、すぐに矢張りお釋迦様の正法のために、滅亡されて了つたんだから。」

「あの、そして旦那様は？」

「鬼子母神様の御主人だね。さあ、それには少し話がある。」

と息いき繼つぎの茶碗ちやわんを、澁茶しぶちやかと思おもふと然さにあらず。
既すでに逸いち早はやく重ぢゆう詰めを開ひらいても見みたつけ。三
重ぢゆうの、上うへに比ひ目魚めの鰻ぬた、中なかに旨煮うまに。旨煮うまにに添そへて、
禮吉れいきちがすきなのを知しつて居ゐたとて、摘入つみいれがあつた。

―― 眞白まつしろだなあ、鰯いわしにしては、――
―― 索麵鮎さつめんじり（白魚しろいさに似にた土地とちの産魚さんぎよを言いふ）
でございますよ。

―― 贅澤ぜいたくな――

―― それでも鼠色ねずみいろに成なるとお氣味きみが悪わるからう
つて、乳母ばあやが、あの眼球めだまの處ところを除とりました――

―― 何なに、白魚しろいさの眼めを抜ぬいたつて 罰ばち
の當あたつた、私わたしを何なんだと思おもふだらう、殿様とのさま々々。――

と我がを折をつた。 下したの重ぢゆうに、鯛たひの照燒てりやき、

玉子燒たまごやき。竹たけの皮かはで器用きように劃しきつて片傍かたわきに味噌漬みそづけの細こまかに
はやした香かうのものまで。

雖然、我がために、親たちの骨を納むる、お光を
想へば、其の人の歸るまで、と取つておきの重を丁
と重ねた。たゞし女神ゆゑ鬼子母神様には石榴のみ。
本堂のお祖師様に初穂の御酒を參らせたあとを、こゝ
に八分目ばかり冷酒であつた。

道理こそ、舌もやゝ滑である。

「閻慢具足夜叉と稱ふる其の御主人は、或日一千
里外の別の山へ殺生に出掛けたものです。尤も、夜
叉が領内の猫王山は、毒巖毒石、で、枯れた草一葉
にも、一寸觸ると鳥でも獸でも立處に生命がなくな
る、蟲も毒蟲でないと活きられない山だから、兎一
羽、猿も居ない。

其處で、外の山へ出掛けたんだが、魔法で飛ぶん
です、百里も千里も一時なんだね。

渺々とした大川のふちの、椰子の森の中で、――
鬼のやうに立つた獸を見たんだ。黒狸々と言ふ猛
獸です。日本で言ふ狒々だよ。狒々を最う一嵩經立
たせて、全身に漆を塗つたやうなやつで、昔あの、
美しい女の人身御供を取つたのなんぞ何んでもな

い。
」

「可^こ恐^{おそ}うございますこと。」

と、頤^{おとが}を襟^{えり}に埋^{うづ}めて、弱^{よわ}々と成^なつた半襟^{はんえり}の淺葱^{あさぎ}も褪^あせつゝ、内端^{うちは}に深^{ふか}く引合^{ひきあ}せても、幅^は狭^{せま}さに、密^{まつ}と覗^{のぞ}く、肌着^{はだぎ}のはしの白^{しろ}の清^{きよ}かなのにつけても、犠^{いけ}牲^{にへ}のために潔齋^{けつさい}して、あまたゝび俎^{まないた}に乗^のつた女の、やがて又^{また}如何^{いか}ならむ、覺束^{おぼつか}なさのあはれが、影^{かげ}に、雪^{ゆき}のふる状^{さま}に、ちら／＼と添^そふのを見^みて、禮吉^{れいきち}は、茶碗^{ちやわん}の手^てがぶる／＼とわなゝいた。

「露野^{つゆの}さん。」

「は。」

「些^{ちつ}とは赤^{あか}い模様^{もやう}を身體^{からだ}におつけよ。」

「手^ても、何處^{どこ}も餘^{あま}り白^{しろ}い。」

露野^{つゆの}はハツと袖^{そで}をしめた。

「魔^まが魅^さすから。」

「あの、若旦那^{わかだんな}。」

「むゝ。」

「乳母は御邸に奉公したとか言ひましてね、衣裳持でございますの。古いもので似合つても似合はな
いでも、さつぱりしたゞけでも可からうからつて、
昔のでも何でも、私には勿體ないほど着られます、
縮緬だの、羽二重だの、長襦袢から帯まで添へて、
何でもと言ひましてね、着せてくれましたんですけ
れど、花籠を負つて、草履なのに、そんなゝりでは、
と思ひまして、矢張り此を着ましたの。でも、肌
に附きますものだけは、上も下も昨日のお天氣に洗濯
をしましたの。衣ものがない見すばらしい、其の御
心配下さいますのでございまして、乳母が着せて
くれますけど、今あの、つい浮りして、貴方の前に
見苦しい
」

「飛んでもない、何を、何を。餘り清らかだもん
だから、白装束のやうに見えて氣に成つた。何、慥
う向合つて氣が詰るやうに思はれたものだからね。
否、露野さんだ、矢張り些とも遠慮はしない。もつ
と火鉢の傍へよつておくれ。煙草をおのみよ、すば
／＼と お前さんは、もの恥ばかり、天
下のはにかみやで弱蟲だけれど、煙草に掛けると、

えらいんだつけ。 さあ、樂に／＼に膝を
崩して、と言つた處で女だなあ。 それか
ら今の話だ、まあお聞き。

「 處で鬼子母神様の御亭主です。前
途へ毛だらけの海坊主のやうに立塞がつた、黒狸々
字は狒々如きに恐怖をなすやうな、軟弱い人間ぢや
あないのだからね、驚破と見ると手練の鐵砲を差向
けて胸も胸中も狙澄して、二つ彈丸でドーンと打つ
と、野にも森にも罅を返してい黄色な煙が着が――
命中つたんだ、脇腹と咽喉へ、ばツと立つた。け
れどもだ、黒狸々はゑみ破れた唇を赤く剥いて、二
ヤノ／＼と笑つたよ。
顔を見ては不可い。」

と、話に氣が入つて笑掛けた唇を、捻るやうに我
手で壓へ、
「似てやしないか。」

「まあ」
とばかり書院の疊に手を反して、撫肩の襟を仰ぐ
やうに露野の熟と聞入る風情は、二十を幾つも越し

たとは、何うして思はれぬ。

「釣鐘をぐわんと射た手應して、的は向うだのに、吃驚した手が痺れて、閻慢具足夜叉ともあらうものが、もろく鐵砲を取落とすと、又ニヤ／＼と笑つた、狒々のしやくんだ大きな面が、最う鼻の尖へ來て押覆さるやうに成つて居るんだ。

退くも開くもあらばこそで、二ツに裂かれさうな足で飛んで、いきなり傍にあつた何やら大木の幹へ遁上がると、矢張りニヤ／＼と笑ひながら、狒々は五抱にも餘る其の大木の根を、半分に抱込んで、ゆさ／＼と揺ぶるぢやないか。

樹の空に居る夜叉の身には、金色の雲と血の色した太陽が、筆規のやうに一所に動く
目眩むと云ふのは此の事で。いまにも棗の實の落るやうに揺り落されさうで堪らないから、些とでも確り縫らうと幹を離れて、枝を這つて蛇のやうに絡いたと思ふと、言ふほどの大木です、枝だつて、細いものではあるまいに、揺るのが天下の狒々

で、載つた奴が天竺の魔ものだから、業の重量で一
堪りもなくポキリと折れて、一つ斛斗を打つと、渺々
とした赤い流の大川の眞中へ二と落ちた。」

「樹の上からでございますわね。」

「然う、其の閻慢具足夜叉です。田圃の小川ぢや
あ足の折れた蟲でも泳ぐものを、惡魔ともあらうも
のがと、お思ひだらうけれど、こんな連中の居る所
には又それに順當した可恐しい川がある。水の力と
流の勢鉛の瀧を眞平に掛けたやうで、足掻きも
藻掻きも成るんぢやあない。具足夜叉は、唯一所に
折れて落ちた枝を便りに、象だの豹だのが岸へ出て、
じろり／＼と不思議さうに見て居る流の眞中を、毛
蟲が溺れた形で、ぶく／＼と黄色い泡を立て、流
次第に流れて行く。」

十里と成り二十里と成り、四十里五十里と成るう
ちには、精も力も盡果、最うね、取絶つた枝も離し
て、俯向けに水を飲んで沈まうとすると、耳許に、
朗な清い聲して「翼に絶れ、翼に絶れ。」と言

ふ聲こゑが聞きえたんだ。「翼はねにお縋すがり、」と言いふんだね。

何なにがなしに具足ぐそく夜叉やしやが、遮しや二無む二、薄光うすびかりの映うつす影かげにつかまると、其その影かげは大木たいぼくの幹みきより力ちからがあつて、颯さつと水みづを切きると、縋すがつた身からだ體たは青あをい虹にじを傳つたひながら雲くもへ上のぼるやうに思おもふうちに、靜しづかにすつと下おろしてくれた。其その下おろされた處ところが、印インド度どだから富ふ士じの山やまはないけれど、樹きの青あをい砂すなの白しろい、三保ほの松原まつばらと云いつた景色けしで。吻ほつと具足ぐそく夜叉やしやが人心ひとこころ地ちに成なつて、いま助たすけられた、「翼つばに縋すがれ。」と人間にんげんの言ことばで云いつたのを、神かみか佛ほとけかと跪ひざまずいて見みると、それは大おほきな鳥とりなんだ。」

「まあ、でも可ようございましたわね、お助たすかんなすつて。」
と優やさしく言いふ。

「露野つゆのさん。」

「は。」

「お前まへさんは、氣きが優やさしくつて、可よかつた助たすかつて、

なんのつて言ふけれど、夜叉は世を害する可恐い悪
黨だよ。」

「悪うございますか知ら、お助んなすつたのを喜
びましては。」

「否、然うではないけれども。」

「でも、鬼子母神様の旦那ですし、それだし、矢
張りお可哀相でございますわ。それなりにお成んな
すつては。」

「
禮吉は何となく差俯向いて頷かされた。」

「そして、あの、助けましたのは鳥なんでございます
ますか。」

「青二と言ふ大鳥でね、唐土の鳳風と同じで、天
竺では此が舞へば天下太平、聖人出世の兆。面は美
女のやうで眞白だ。青い翼が八枚あつて脚が一本だ
と言ふんです。」

禮吉は偶と、此の國の國主の愛妾が、忠臣等のために、あるまじき侮辱をうけて、嶮谷の叢に、裸にして白き豕の如く責殺された怨念の、やがて、人を殺し、城を焚いた、翼九枚にして、黒髪を亂した化鳥の、非なるが似つゝある事を、半ば思出しながら話した。時に、織田の御前に擬した、汚い親仁の大郷子の爪の、此の露野に加へられ、且つ己に迫る事を聯想して、黯然として心の暗かつたは言ふまでもない。

しかしながら、雪山遠く流沙川の彼方なる、青二の天は清朗明麗である。

「其の翼に縋つて救はれたんです。さすがの夜叉も、砂に頭を埋めて青二の氣爪に謝恩を陳べると、いや禮には及ばぬ、たゞ此の後、たとひ如何なる事あつても、恚る處に我あり、と忘れても人に言ふなかれ。「確と誓へよ。」と矢張り人間の聲で言ふのを、謹んで聞いて、畏つて、夥しく齒を叩き脚を拊つて誓つたんだね。さらばお歸り、やがて日も

暮れよう、そなたの家路彼處ぞ、と片翼をすらりと
開いた。四つの青い影が、宛然一條の月の光と成る。
白砂の道を辿ると 思つたより近かつた。
あんな處に、あんな鳥が、あんな場所がと、思ふほ
どで、猫王山の半腹の住居へ歸る。
ぐしよ濡のへと／＼だらうね。 勿論、

何うしたんだい、と人間なみに、おつしやつたの
は鬼子母神様。此の時はまだ鬼の女房でおいでなす
つた。

—— 然も此の日、此の夜こそ、お釋迦様のた
め、成道 正覺にお入んなさる日で、丁ど何さ、晩
のお菜に、迦毘羅衛國の七歳の王子を、宮中から。
引搦んでおいでなすつた日に當る。

豫て、城下へ出ては、何百、何千とも數知れず、
人間の兒の餌食をお取んなさるものだから、國主が
ら、辻の出口入口へ番兵番卒を配つて木戸を閉し、
砦を鎖して、金網を張つたやうな、何と嚴重な用心
の中を、事ともしないで、其の用心振が小憎らしい、

と言ふので、故とお城の奥殿へ飛込んで、王子を一寸前垂の下へ、――なんぞは、お手軽なもんぢやないか。可恐しい魔の威力だね。

狒々を狩損つて、遁上つた樹から揺落されて、大川へぼちやんをし、鳥の翼で助けて貰つた御亭主とは、腕に於て、くらべものに成るんぢやあない。

――何うしたつて、お前、何うしたなんその處ぢやあねえ。生命拾ひをしたんだぜ、生命を捨て来たんだぜ。――と夜叉が息急いで言ふほど、此方は薄笑をして、何處にさ、拾つて来た生命つてのを一寸お見せな、どんな形をして居るんだえ。

――なんのつて、鬼子母神様は洒落を言つておいでなさる。

處で、景氣直しに太子を料理つて、晩酌のお取膳と言ふ寸法で、此から妹の摩爾髮さんに手傳はせて大俎板を持出さうとなさると、臺所から見えれば、座敷から見える。硫黄の煙と魑魅魍魎の蔭で、月夜も暗黒の此の猫王山の麓を、城下はづ

れの拔道ぬけみちに成なる絶所ぜつしょに、其處そこから月つきが上のぼるやうに、次第しだいに岨路そぼみちを近ちかう來くる不思議ふしぎな光明ひかりがあるんです。

此これこそ、大聖釋尊だいせいしやくそんが、お弟子でしの迦葉かせふを一人連ひとりつれて、近頃ちかごろ鬼おにの用心ようじんに、此この迦毘羅衛國かびらゑこくで構かまへた新あたしい關せき所しょの人ひとしらべの煩わづらはしさに、此この間道かんだうへかゝつて、昔むかしからいまだ嘗かつて人間にんげんの通かよはないと言いふ惡魔あくまの山やまを、厭いとひもなく、夜道よみちを掛かけて靜々しづくと、隣國りんこく、法宜彌ほふぎやの都みやこへ山越やまこしをなさる處ところだつた。

が、魔界まかいの孤家ひとりやでは、見馴みなれない其その光ひかりを、われ／＼人間にんげんが鬼火狐火ひとたまきつねびを視みるよりは不思議ふしぎがつて、怪あやしや、何なんの影かげだらうと、巖端いはゝなへ翻然ひらりと出でて、鬼子母きしも神様んさまがまくり手てを下したに翳かざして、輝かざく瞳ひとみで御覽ごらんなさると、靉靆たなびき昇のぼる光明くわうみやうの裡うちに、歴然ありと尊たふとい出家しゆつけの姿すがたが映うつる。相好さうがうと言いひ、容子ようすと言いひ、豫かねて全ぜん天竺音てんぢくおとに聞きえた、摩迦陀國まかだこくの悉達太子しつたたいし、釋迦牟尼しやくかむにに相違さうゐない。

人間にんげんの教主けうしゆ、魔界まかいの仇かたき、あの迦毘羅城かびらじやうのハイカラ小僧こそう、機會をりもあらば生首なまくびをと、一同手いっとうてぐすねを引ひいた處ところ、對手さきから生命いのちを馳走ちそうに來きた。が、手て強よい敵てきぞ、油斷ゆだんは成ならぬ。豫かねての手筈てはず、速すみやに魔軍まぐんを

以て、取巻くやうに、夜叉どの疾く、提婆が方へ注進おし、私は彼等を欺いて、深切ごかしに、孤家へ泊めた上、頂の巖窟、お爺さんの許へ一走り行つて助を借りよう。何だねえ、油屋の眞似なんぞ、蝙蝠が笑つて居るよ、と壺に貯へた人間の血のどろ／＼酒を、柄杓で徳利に注いで居る具足夜叉を、せき立て、命拾ひをした俺ぢやあねえか、邪険に扱ふなよ、と無性たらしく、生ぬるく、ぐんなりとして居る旦那を、え、落したり、拾つたり、まるでお手玉だね、ソレ、ちやんぎりよと、黒雲の上へはふり上げて駈出させ、摩爾さんは其の肴を、一度納戸へ藏つたりと、太子を納戸へ隠させる。

鬼子母神様は八天下。はら／＼と兩袖を拂いて、エ、と聲をお掛けなさると、白の蹴出しが、紅羽二重、然も人品な美女と變つて、柄にないねと、優容に、しやな／＼と、旅の出家をお迎へ遊ばす。

話が枝に成りました、露野さん。 切て肝心の、御亭主だが、具足夜叉は、鬼子母神様が其の夜、正覺をおとげなさると、日蔭ものゝ宿なしに成つたのです。

藁あつものに成ならうとした、俘とりこの太子たいしは、お釋しやく迦か様さまが抱だいて下山げざんの上うへ、めでたく國王こくわうの手てへお返かへしに成なる。猫べう王わうざん魔まの住家すみかは其その國王こくわうの討手うつつてのために全ま tuttaく滅ほろびたと言いふ段取だんどりなんだから。

時ときに、飛とんだ事ことが出來た、と言いふのは、一度ひとたび俎ないたの上うへに縛いましめられながら、生命いのちづか恙がなく城しろの奥おくへお歸かへりに成なつた、其その迦毘羅衛國かびらゑこくの太子たいしだがね、問まもなく、其その何なになんだ

あはれ、又またお身みの上うへかと心弱こころよわくて、露野つゆのが憂慮きづかはしさうに、肩かたをくねつて、胸むねを細ほそうして聞入きこつたにも係かゝらず、禮吉れいきちは言淀いひよどんだ。

よどみながら、

「身體からだ一面いちめん

「お身體からだ一面いちめん

「其その身體からだ一面いちめん、目めとも言いはず鼻はなとも言いはず眉まゆも口くちも。

南海慈航なんかいじかう

水楊枝みずやうじ

と心に念じつゝ言つた。

「潰れて、爛れて、お可哀相に、たとへやうのない、御苦惱。

當時、國王は女帝でおいでなすつて、一人子の世子だもの、察しられるぢやあないか。典藥侍醫たち、夜に日に肺肝を碎いて、御療治を申上げるけれども、次第に病惱が重るばかりで聊かも驗がない。第一病體が分らないんだね。

——班猫の毒にかぶれた、當國の貴夫人、お楊でさへ、——

「大方は猫王山の魔界の毒氣にお中毒んなすつたらうとばかりで、人の力に及ばないと、匙を投げて了つたんです。餘りの遣瀨なさに、母帝が御體を、露に投げて、天にお祈りに成ると、夢に、明星を手捧げ、白銀の鎧おなじ甲した神將のお告に、——君が知しめす國の或處に、青ニと言ふ鳥がある。

(先刻の不思議な大鳥です。)

白面の美女にして、八つの翼云々と、其の形を教へて、其の翼を得て褥に敷くよりほか、太子を

救ふべき道はない、と云ふお告なんだ。

母帝はお目が覺めて、尚ほ夢のやうな探しもの國王の威と力で聞いても、見たものは愚然うした鳥は聴いたものすら嘗てない。」

お楊のために、白菊谷の菊の雫を、頭の形に頂くと言ふ、姫鯨と言ふものすら、此の大川に得られぬのである。

「其處で立札が立つたんです。青ニを知るものあらば速に申出でよ、貴賤を選ばず、女帝自ら謁を賜ひ一萬貫の恩賞の上、尚ほ一代を扶持せらるべきものなり。」

と、さあ此處へ、――人間の二郎に化けて、

のそ／＼と顯れたのが、件の閻慢具足夜叉だね。

はッ申上げますッさ。

生命の恩ある神とも言ふべき青ニを賣るんです。

一萬貫に一代のお取立と來ると、人間でも、一寸遣兼ねないんだから、夜叉に取つてはお茶子だつたよ。

母帝は飛立つばかりの心を鎮めて、三日潔齋精進のち、狩装束で自ら鵠の羽の白羽の矢、二筋をお取遊ばし、綺麗な腰元、女中ばかりの一隊を率ゐて、具足夜叉の道しるべについて、お城を出發。日に夜に繼いで、三日目志す場處に着いて、恚う御覽に爲ると、天地晴朗閑麗なる白砂の中に、唯一羽、白面の其の青ニが、八つの翼に八つの光を月影の如く水に映して優長として、遊んで居る。

尊き鳥よ、迦毘羅衛國を統治すべき自らが唯一人の太子のために、御身の生命を給はれと、母帝は弓を挟み、矢を伏せて、樹の根に棲をお敷きに成ると、青ニは砂の玉のやうに、さら／＼と踏んで近づいて、女帝の御姿を熟と視ながら、兒を思ふ親の慈愛に、

はら／＼と涙を流して頷きながら、――出しや
ばつて指さしをしたのがさすがに後へ一步退つた、
具足夜叉の野良猫に似た面構を吃と視て、誓を忘れ
たな、と言ふと齊しく、翼をあげて八々と打つた。
わつと叫んで、其の搏かれた顔を、両手で壓へるの
が、手に餘つて、見る／＼うちに腫上つて、仰向け
に倒れた、胸も脚も、立處に眞赤にた爛れる。

青ニが我が君、早く歸らせ給ひて、恙なき、太子
殿下を御覽ぜよ、さらば、としつとりと翼を伸すと、
輝く柳の靡くやうに、鳥の姿は、虚空、遙に雲に乗
つた。

其の雲の行く城の方へ、女帝の一隊は、色も姿も
美しく虹の動くやうに引かへす。忘恩の惡魔は、獨
苦しみ、獨悶えて、狒々も象も忽ち寄つて来て、見
て居る前で、のたうち／＼悩むうちに、手は手、足
は足、胸は胸と、うみ、つえ、たゞれた處から、ば
ら／＼に解けると、それがね、一個づつ、びく／＼
と皆、血だらけ、かさだらけの、汚い猫に成つたん
だつて。

.

「まあ、可厭でございますこと、氣味の悪い。

それでは其の不思議な鳥の罰で、猫に成りましたのでございますか。」

「さあ、青二は、いづれ、世を救ひ、人を教ふるための、神様の化身の鳥だらうけれど、罰すれば、そんな可厭なものを世間に残して置く法はない。太子の悪病を其のまゝ身體に受けた

のは罰せられたんだらうけれど、猫に成つたのは閻慢具足夜叉の怨念だよ。正法の威徳に依つて亡びこそしたけれど、夜叉だつて、強い魔ものが末期の一念、五體は砕けても一つ／＼の猫に成つて、佛に崇り、世に仇して、草木一本石一つでも、此の世界を魔界にしよう可恐い呪詛なんだ。だからお釋迦様の御涅槃の時も、猫ばかりは、歎きも悲しみもしなかつたと誰でも知つてるのは此の譯だとさ。」

「憎らしうございますわ。」

「具足夜叉ばかりでない。此より先に滅亡した、例の猫王山の大魔王ね、——鬼子母神様が一度正法にお歸しなすつてから、魔界の道が開けたので、迦毘羅衛國から、討手の大將が、えい／＼と、數萬の軍勢を率ゐて、押のぼると、此の軍勢の前へ立つて、それまでは形も見えなかつた猿、雉子は桃太郎の鬼ヶ島のお供だが、象、犬、狸々、虎、豹などと言ふのが、ぞろ／＼と山へ上つた。おまけに、人間にゆかりのない處には、決して生えないと言ふ、柳の樹が、頃日山の此處彼處に丈のびて育つた、緑の影のさすのを視て、大魔王は既に運命の究まる處を知つたんだね。」

百里岩のもの見の座を、數萬の軍兵に取巻かれながら、死しても釋迦に仇をする、記驗を見な、人間儕と、髪を筆り、爪を剥し、我と我が指を折り、手足を斷つては口に含んで、血と、煙と、火と一所に、虚空に向つて赫と吐くのが、一つ／＼眞赤な炎と見るうちに、坩堝を出て、固るやうに、種々の猫にな

つて、其の數、幾千幾萬とも計り知られず、空中を縦横無盡に飛行しながら、軍勢を驚かして、迦毘羅衛國の城を蔽うて消失せる。と、身體を残らず、引裂き喰破つて、猫にした大魔王の、大きな顔ばかりが、一つ、頼光に退治された酒吞童子の首のやうに、ばかりと巖の上につかつて、眼を睜り、牙を噛んで、がつ／＼と齒だゝきをすること暴風雨の如し。

「可恐うございます、若旦那。」

「忽ち其の首が、巖に附着いて、轟と鳴ると、俄然として其のまゝの大どら猫に成つたんだ。」

「ニヤア　ー」

「ニヤア」

「あれえ。」

と取絶つた、露野の肩を、思はず確と抱込みながら、禮吉は呼吸を詰めた。途端にぬつと背を吹立

て、鬚を蠢かしたのは、大なる茶の斑の三毛猫である。

唐突の鳴聲と、不意にむく／＼と動いた影に、天から降つたやうに驚いたが、書院と境の、祖師堂の敷居際に、位牌堂の晝の暗さを後脚の尾に曳いて、目を光らしたのを、恚う見つゝ、振返つて、床の間に掛つた繪の、姫路の城の、名に負ふ白鷺の天守に對して、其の靈怪 幻異の傳説を思ふにつけ、何、こんな猫は何んでもあるまい。

壁、圍の透間を潜つた、野良猫に相違ない。また其の汚い事、どろ／＼に毛が抜けて、首筋に癩の、じく／＼と爛がある。

「露野さん。」

身はわな／＼と震へつゝ、縫寄つた含羞に、颯と顔を染めながら、露野は小さな幽な聲で、

「叱い。」
と追ふ。

「邪じや險けんぢやないか。お前まへさんに逢あひに來きたんだの
に。」

「あれ、若わか旦だん那な。」

「否いや。眞ま個たくは、寺てらに珍めづしい、此この御ご馳ち走そうの香にほを嗅か
いで、堪たまらなく成なつて出でて來きたのに違ちがひないが。」

で、其それに違ちがひない、對あひて手てが化ばものでないのを信しんず
るにつけて、取とり継すがられた露つゆ野ののために、殊こと更さらに綽しゃく々く
たる餘よ裕ゆうを示しめして、

「御ご覽らん、それにしても大だい郷がう子じの爺おや夫ぢに肖そつ然くりです。
面つらを御ご覽らん。」

猫ねこはアグリと口くちを開あいた。

「正ただのものだ。」

と串じ戲ぎが、眞ほん個たうに、
其その首くび筋すぢ許もとの鯨なまづの

汚け穢れを思おもふにつけて、面つらまで其そのまゝ、と苦く笑せうをし
ながら、袖そでで露つゆ野のを庇かばひつゝも戲きたはれたが、

「畜ちく生せいツ」

忽たちち色いろを變かへて叫さけんだ。

「畜生」

「畜生。」

「烈しい矢聲に、背けて居た顔を、恐怖々々、猫に向けた露野が、

「あれえ。」とまた怯えた。

猫が、重箱に向つて襲ひかゝつたのではない。三毛唯一つと思つた、其のあとに、影の如く灰色したのが一匹、續いて雉子猫とか言ふ、黒に褐色の横條の巻いたのが一匹、むざとして顯れて出たのである。

ニグウ

「叱！」

ニヤウ

「畜生！ ー 爺さん。」

と弱い事。禮吉は我を忘れて、庫裡の寺男を呼ぶと齊しく、片膝立てて、身構へながら。

「コン畜生。」 遁げる處かぞろ／＼と三疋、怪しい臭を漾はせて、近間へ寄つて來さうなので、狼

狼氣味に、火鉢にあり合ふ火箸を取つて、伸掛つて、
礎と投げた。

「業畜生。」

フンと嘲笑つた體に、嘯面をツンと外方へ向
けて、三毛猫が飛びもせず、のろり／＼と歩行出す
と、あとの縞の雉子猫がぬつと、出て並んで行く。

トこゝに變なのは、中に居た灰猫で、汚腐つた尻
尾を捲き、後脚をひたと縮め、前脚で引抱へるやう
に、面を古畳に俯伏せに埋めて、ずるり／＼と這出
す、海鼠が藻掻くやうである。

退きかけて、急に去らない、執拗なるものゝ不快
さに、づか／＼と突立つて。

「うぬ！」

と追つて、どた／＼と足踏をすると、三毛と雉子
が一齊に振向いた。

ゾツとして退つた時、雉子猫はちよろり、と庫裡

の障子を潜る 三毛猫はドンと躍つて門に
向いて取着的障子の破目を、一小間破抜いてツバと
出た。

が、變な其の影法師のやうな灰猫は、何處へ消え
たやら、ふつと見えぬ。

何故だが、我袖を拂ひながら、禮吉がきよる／＼
と、本堂、脇堂のあたりをニした目に、漸と、いま
吻と成つた露野が其處に落散つた火箸を拾つたのが、
胸白く衣紋もやゝ亂れながら重詰を傍にして、恰も、
銀の振出しの箸でも持つた様子の、恍惚と臆更た顔
を見た時であつた。

「何だい、失禮な。」
と強く言つた。

門のあたりに響いた聲は、紛ふべくもないお光で
ある。

障子の穴から、最う見える。

松ヶ枝。六つの袖

五十七

「お光さん。」

潜門の際に立淀んだお光が、呀、亂れた銀杏返の前髪かけて、白い布で額を巻いたのに、處々血が染んで、半襟の色の添ふ、蒼白さが、が、凜々しい顔して、出合頭。ウゝゝと唸つて背を立てた三毛猫に、丁と松の枝の折つたのを、片手に振翳した處である。

後に一人、脊も拔群に肩幅の廣い、入道頭に半纏着た、土方體の逞しい。とばかりで、何處かで見掛けたやうな大親仁が、幾重にも白布で巻込んだ四五尺まはりの、箱形なのを、首に掛けて背負つたのは、向山の塚なりし、父母の、墓なりし、草葉の陰を幻に世に顯れし白骨とハツと捧ぐるやうに、禮吉は兩手を開く。

其の親仁は、骨組に似ず、軽く、いま、ひよいと地に屈んだ。

ぎやつ、とけたましく鳴くと、猫は煙の這ふやうに、ちよろりと飛んで、墓所の方へ消えた。パチリと鳴つたは、猫を狙つて當てた礫の、餘波の音である。

禮吉は何にも言はず。

「姉さん。」

本堂の階を下りて、迎へたのである。

露野は上の板敷に、袖を敷いて手を支いた。

「遅くなりました」

兄さん

「貴女、眉間は、眉間は。」

お光は事もなげに、

「え、轉んだの、お轉婆ですから。」と軽く微笑みながら、背後を見向いた。

「此方へ。」

老漢は早や背の包を、腕にかへて、白布の箱を捧げて居る。お光はあれなり潛門の方を來たが、老漢

は、眞直に、正面の門を入つたのであつた。

「おゝ。」

と言つた、禮吉は老漢を見て、

「爺さんは。」

前塚權九郎。

「更めまして、後程に御挨拶。」

「兄さん。」

權九郎の手から、假の柩を、禮吉と二人、手に手を添へて受取つた時。

「御無事に、――お二方。」

お祖父さんも、

母の黒髪長からむ、土のめかたも腕に響いて、二人の袖に、柩の重く据つたのを視て、露野も密と手を添へた。

唯、これを見て、曇つた聲で、「南無、南無、

南無、南無、南無、

と權九郎は、入道頭で、のつしりと腰を屈めながら口の裡で唱へたのである。

「お土産。」

とお光くわうが言いふ、手てには果くだものゝ紅あかきが覗のぞく。風呂ふうろし
敷きは、手向たむけの草くさの花はなを取とり添そへた、が、然さう言いつて、
柩ひつぎに載のせたのは、松まつの一ひと枝えだ。

「お墓はかの上うへに生はえたのですよ。」

六むつつの袖そでは揺ゆれながら、静しづかなる松まつヶ枝えの、葉はには
ら／＼と露つゆがあつた。

「何、旦那、お笑草だ。」

其場へ打着か

つて遣ると成れば、俺等より旦那の方が旨うがせう。
 手練も鍛もあるもんぢやあねえ。冬向き此の小兒が
 寄つて、雪礫の打つけつこを遣りますが、手もなく
 あの呼吸だて
 お笑草だよ、へつへつへ
 つ。

――後で權九郎が言つて、氣もなく笑棄てた
 時は、或は其も然うかと思つた。――事實、雪の
 中で雪に乗つて、町々辻々に小兒たちが群集つて雪
 礫の激しい合戦、其の戲をするのであるが、力まか
 せに堅く結んだ石のやうな雪の塊で血を流す怪我過
 失もあると同時に、避ける事、躲す事も、又飛んで
 来るのを矢を切る如く、宙でパツと棒切で受け状に
 たゞき落す事なども、小兒は自得したものである。
 従つて、遠くから狙撃に雪礫を擲つことも、蓋し巧
 なものである。

權九郎は其の術を用ゐたのだと言つて笑つた。が、

手練のほどは、寺へ来て門を入りしなにお光に齒を剥いた三毛猫を丁と打った礫でも略計り知らるゝ

先んじて、向山の今日の出来事を、お光が話して、天狗に助けられたと思つた、と言ふのを聞いた時は、聞く禮吉も思懸けない天狗の扶助よと思つたのであつた。

委しい事は、前に於て陳べた、東京でお橘が見た夢を、其を正夢と言つても可い。殆ど同じであるから、こゝに繰返すのは見合せよう。お光は、白足袋も泥に成つたと縁側へ脱いで、横坐りに寛いだ状して禮吉に話した。――廣袖を着た中山高帽の壯士に、鬨桶の柄杓でパツシりと額を打れたと同時に、一塊の粘土がぴしりと何處から飛んで来て、廣袖の面をぐしゃりと遣つた。廣袖はわつと反つて、じだんだ踏んで、堪らず唾した、其唾も泥で、赤土の面を被つたやうであつた。

「まさか威嚇でせうけれどもね

兄さん、

それでも峰打ぐらゐは食はせる氣だつたかも知れま
せん、大郷子の爺がね。」

先客の露野は女氣の優しい效に、最う此の寺に馴
れた振で、茶の支度を、寺男に相談かた／＼庫裡
へ立つた。こゝに居合せたらどんなに、肩身を消さ
うとしたらう。

懇に座に請ぜられた權九郎は、強て辭みもしない
が、草鞋穿の泥足を洗ひにとて、井戸へとも言はず、
裏の藪の前の小流へ行つて居た處であつた。

「抜刀を振上げると、其の額から兩方の目の上へ、
目鬘を掛けたやうに、粘土が飛んで来て附着いたで
せう。御先祖代々の刀をバツタリ落して、あつと踞
んだぢやありませんか。吃驚する皆の頭へも咽喉へ
も、あとから／＼、どんと来ては、べたんと附着く
んですもの。あゝあゝと言ふ私もね、兄さん、何處
から飛んで来るのだから知らんと見ますとね、平場を
一面離れました東北の彼處では一番高い、豆腐を重
ねたやうな、四角な形の丘の上にね、出端の處へ股

を割つて腰を掛けてさ、大きな漢が象に乗つたやうな形で大きく高い處から、熟と此方を見ながら、大きな口で、銜煙管で、すば／＼と煙草を吹して居るんですがね、高い／＼土の臺へ大なる入道を据ゑた銅像のやうで、影が一杯に映して、凄いやうでしたわ。

其の大きな掌が、粘土を引搦んで、アレ捏ちたと思ふと、其の時、どしんと投げました。又私のおね、兄さん、襟髪を引搦んだ、巻脚絆に靴を穿いた男の口を塞いで、べつとりと塗つたんです。

大入道は、のそり／＼と向うの丘を大跨に下りてお墓へ來ました。

お墓へ雇つた穴穿が「や、お頭」「や、頭」と二人とも言ひましたよ。

皆がね、何をしゃあがる、何だ、汝は何だ、何をしゃがるんだ、と一齊に、がや／＼立かゝつて言ひますとね。

ニヤリと笑つたの、「此か」と言つてね、掌
を開けて見せると粘土の大きな塊を掴んで居てね、
「へへへ、何と御覽なさる、此の土を掴んで、何
も、掌の斑を消す禁厭にするんぢやありませんや、
旦那方、お見受け申した處、大した偉さうな御仁體
だ、へへへと笑つてさ」

お光も笑つて、

「兄さん 其の入道が、いやに笑つてね、
へへへ、此奴あ天狗の牡丹餅だと、ぬつと掌へ据ゑ
て出した時は、毛が射えて土が光るやうに見えまし
たよ。」と額の疵より、唇紅う莞爾する。

五十九

露つゆは尾花をばなと 寝ねたと云いふ、
 尾花をばなは露つゆと 寝ねぬと云いふ、
 あれ寝ねたと云いふ、寝ねぬと云いふ。

「上流かみの鮎屋ごりやだね。」

「よく聞きこえますこと。」

文句もんくは しかし、唄うたふ音ねは鄙ひなめいて、
 然さまで床ゆかしいものではなかつた。

が、其その露つゆは螢ほたるの如ごとく、尾花をばなは蓑みのの如ごとく、濡ぬれ々と
 冴さえて明あかい、且かつ肅しめ然やかな夜よであつた。

禮吉れいきちは露野つゆのと二人ふたり携たづへて、去いぬる年としは、夏なつの夜よふ
 けに、煙管きせるを欄干らんかんから落おつたと云いふ。――おな
 じ其その天神橋てんじんばしを、いま渡わたつて、橋はしの袂たもとの、こゝに人ひと
 も知しつた年とし古ふるる槐あじゆの陰かげに、一度ひと暗くらく成なつて、隠かくれ、
 やがて、向山むかひやまの麓ふもとなる麻野川あさのがはの其その川縁かはべりの徑こみちに、二ふた

りとも袷ながら、尾花も露も白く膚にうつりさうに
月を浴びてゐんだのである。

「いつも鮎屋は繁昌なのかね。」

其家は格別の川魚料理で、恚うして町を離れた上、
まだ上流の方へ五六町、次手のない石ころ道を隔て、
何とか衆の川手水と云ふ景色を想はせる、下流の、
あの、前塚田圃の坊部落に對する上流の小屋が、ご
つ／＼挟まつて居ようと云ふ、筧は流れても、野菊
は咲いても、酒や色には隔つた場所なのであるから。

「螢の時分でもありませんと」

と露野がまぶしさうに、装束上つて、崩れて、且つ
靡いて輝いて流るゝ、中流の水の瀬に面を背けて云
つた。

此のあたりは螢の名所、然ればこそ玉敷く露に、
其の面影を偲ぶのである。

「ですけど、あの、今夜あたりは、此處いらはお祭でございますから、其の崩れが、もの好に遊びに行つて居りますのでございませうね。」

「あゝ、提灯が見える。」

其も、消残つたのが二つ三つ、橋と撞木形に、一條、月に青く山に暗い、寂とした屋敷町に、心細く白ぼけて點れたのに、脚の黄色な、髯の赤い、甲の眞黒な大きな蜈蚣が、くるりと巻いたり、颯と這つたり。

「然うだ、毘沙門の祭禮だつた。」

氏子の町の軒提灯には、其の神のおつかめとて、皆蜈蚣を然うして描く。土塀の低い、荒廢した場末ゆゑ、繪の蜈蚣が、石垣の崩を、ざわ／＼と動くやうで不氣味である。

唯目の前なる大槐が、蓋しまた昔から尋常ものではない。梢から砂利を撒くの、棺桶をぶら下げるの、

行燈を點すのと言傳へる。

無論今時、誰

もそんな事は信じないし、禮吉とても更に念頭には置かなかつた。が、繪の大蜈蚣の遠く明滅して、動くに連れて、ふと視れば、枝繁き中に宿つた、大きな三俵法師のやうな、あの何とか云ふ、圓形い桂の、深々と露を含んだのに、照々と天心の月の光の映るのが、其の桂を晃々と照して、恰も葉の中の槐の枝に、別に一輪の月があつて、怪しく輝く風情がある。

「露野さん。」

此を見せようとした。

「若旦那。」

と露野の方が、用ありさうに、然も怯えたやうに、肩で犇と寄添つて、

「まあ、私、大きな鼻かと思つて吃驚しましたわ。達磨さんのやう《に屋根の上に乗つかつて居るんですもの。》」

と胡粉のやうな指をさす。

山に壓潰されたやうに、屋根のゝめつた、二階の

折れた、空家の廂に、風が吹くと吠えさうに、ばさりと下つたのは、酒屋のなごりの杉林である。

遊山の客が、水筒や瓢に、此處で満たすのもあれば、山から買足しに下りるもあり、往還に居酒屋もりした酒屋であつたが、山を公園にする道路の改築のため、市へ買取られたなり、取拂ひがまだ済まず、住むものもなく、中は石の枕のある古蹟のやうに荒果てた。

「眞個梟だ、ふツふツ。」

と三つばかり、串戯に杉林に向つて吹く息が、やゝ夜寒に白く、禮吉は笑ひながら、

「それからね、あれを御覽。」

と高く空ざまに指す指を傳つて、露も、聲もありさうに松蟲のやうに動く露野の瞳を、手を返して、古槐の月影に誘つて、

「あの中に、最う一つ、樹にも、空にも、月が二つあるやうに見えやしないかい。」

「あれ。」

「否、威かす氣ぢやあない。貉が棺桶を下げるの、行燈を點すのつて怪しからん、そんなんぢやありません。此處の槐と斜違に川を隔てゝ、向合つて、それね、向うの原場。」

霧に湖のやうである。

「廣い野原だ、お辨當持參で、春は摘草に行く處さ。」

言ひかけて聲が曇つた。――ふと蟲の聲が、流を隔てゝ幽に聞えて、それもりん／＼と轡に擬ふ。白菊谷へ落人の如くうら若かりし母の、馬に騎したは其處であつた。

「彼處にも、大きな槐が一株ある。」

橋の此處なるは、蒨鬱として、籠れる堂の如く、曠野の彼處なるは、亭々として聳えて塔に似る。

「此方の、此の槐から、對岸の槐まで、恁う云ふ

月のいゝ夜は、白い虹が掛ると言ふんだ。霧だらうがね。それを、橋のやうに、月が横傳ひにする／＼と渡るのが見えると云ひます。」

「えゝ、あのお月様が。」

「然う、お月様が、ひとりでに其の虹を傳はつて川越をするんだとさ。光を浴びて、揺れて流れる瀬の加減で、宙に映る影なのだらうけれど、不思議の名所に數へてね。此處を月の棧と言ふんだよ。」

途端であつた。

ほゝゝゝゝ、と高らかに呟えた婦の聲が、夜陰の静寂を、千鳥のやうに破つて縫つて、魔の通るが如く、中空に響いて消えた。

「若旦那。」

と、わなゝいて露野が絶つた。

「何。」

と其の手を取りながら、

「新地で騒いで居るんだよ。」

東の廓と稱する新地は、此の山裾を入江の如く續いた麓に、當夜祭禮なる毘抄門の社に接して居る。何處か、其のあたりの二三階、高樓の笑聲の、風に乗つて來たに相違ない、と思ふにも、袖褻をひら／＼と、怪鳥に乗つた怪しい婦が峰を飛んだやうで凄かつた。

曠野の霧は深けれど、水は流れる、露は光る、そよ／＼と尾花はな靡く。
敢て幽冥の境でない。

白張ながら、ごり屋と描いたを、ぶら／＼と提げて、三つばかり。土手沿の其の掘立小屋から、夢がふはりと出た體に、月夜に提灯の贅を見せて、藝妓まじりの、鮎屋歸りが、草の堤を八九人。

露は尾花と寝たと云ふ。

尾花は露と寝ぬと言ふ。

婦も酔つたか、口三味線。

唐突に、――

「奥州街道で南瓜が、何うした。」

と、客の濁聲

眞前なるが、鯨の通り、鰭を揚げて手を掉つて泳いで来る。

片傍へ寄つて道を避ける、禮吉と露野の前を、熟柿が匂つて、芬と通り状にじろりと視て、

「何だ、こりや。」

と扇平い黒帽子を仰向けに、扇の煽るが如く胸を反して、ぬいと向直ると、抱込まれて居た脊の高い雛妓が紅い帯でこぼれながら、

「川太や。」

と低聲で言つた。方言穢多非人の事である。釣込まれたやうに。

「あ、上流のやな。」

と、藝妓が一人、褌を煽つて云つた。

渠等の目には狸か、蝙蝠の穴のやうな、いま通過
ぎた小屋に生えた嫁菜の、花と、すかんぽに見えた
であらう。

露野は、つと禮吉の手を離れて、破屋の軒に隠れ
ようとした。廂を漏れて、はら／＼と映す月の影さ
へ、肩に痛々しいまで身を恥ぢる。

頸を覗き、額を睨んで、

「いよう！」

「これは。」

で、ぐるりと立留つた客は只一人ではない。

洋服もあれば、紋着袴、インバネスを着たのも交
つて、鯨もともに五人ばかり。

「およしやすや。」

「怪體な。」

と捨臺辭して、藝妓たちは、ずつと橋の袂へ退く。

「廓中にはないぞ。」

「何と此は。」

「素敵なもんぢや。」

禮吉は、露野が袖を分つた時、自分は齊しく身を
躲して、槐の木がくれに、靜に立つた。

そして、洋杖を肱に預けて、中折の廂下りに、澄
して見て居た。

「穢多でも構はん。」

連に、人ありと知りつゝも、酔つたものゝ、分け
て此の國に、位地あり、金子のあるものゝ習慣であ
る。

「いや、堪らんぞ。」

と鯨が尾を振ると思へば、縊らるゝまで雪の頂を
打背けて袖で蔽ふ、露野の袂をぐいとつかんで、

「うゝ、畜類め。」

と眞白き頬へ突つけた口は、髯をすぼめて、唇を
壺に、宛然の田螺である。

と見ながら、禮吉は靜にゐんで、槐の陰に澄して
居た。

單身、横暴なる渠等醉客の人数に對して、力敵せずと斷念めたか、とても路芝の露である。たとへ掬んでも消ゆるものを、と見棄てたか。

恚る時、假令婦が仇なりとても、誰か身を棄て、救はざるべき。

何事ぞ。禮吉は然も莞爾々と笑つて居た。

狂か、癡か、血なき蟲か。

否、否、渠が如き力なきものゝ、一指をだに勞するに及ばずして、暴漢はしたゝかに其の無禮を懲さるべく、露野は鮮明に其の姿を保護さるべき、不思議の約束があつたのである。

「馬鹿め。」

禮吉は心で笑つた。

知らずや、露野の今の身は、鬼も、人も、影身に添つて、星の如く左右を守り、前後に齋眉く姫君である。

其れ見たか、――

傍若無人に、露野を手籠に、口を寄せた鯰は、
忽ち仰向けに反つたと思ふと、

「わつ」と消魂しく叫んだ。

鼻から頬へ、べたりと塗られた、粘土の面被。

「やあ、こりや、」

「えゝ、誰だ。」

「あつ大變。」

洋服も、紋着も、口々に、驚くわ、騒ぐわ。頤と
も言はず、胸とも言はず、ばちやんと響き、べたん
と鳴つて、何處からともなく、矢繼早に粘土の塊が
飛んで附着く。

天窓を抱へる、顔を掴む、袖を被る、紋を抱く。

素敵に大きな嚏をする。右往左往に慌て惑つて、立
足もなく亂れる處を聲を合せて、異變な音で、形は
見せずに多勢、一團の聲を浴びせて、一齊に哄と笑
つた。

「魔が出た。」

「天狗だ。」

「わあッ。」

「ひい。」

と藝妓雛妓の悲鳴が交つて、遁足を入亂れに、橋の袂を、其の寂しい一條の屋敷町へ雪類れて遁げると、怪飛状の肩で叩いて、今は唯一個點れ残つた。祭禮の提灯を拂落すと、バツと落ちて、めら／＼と燃えた火が青い。

黒蜈蚣が、取亂した白脛の緋縮緬に搦んで燃える。

「きやア。」

あとは、扨て忽ち人の影もなく、其方の空は、峰の陰翳に暗かつた。先刻、中空を不意に走つた婦の笑聲には慄然したが、此の悲鳴は凄くはなかつた。

時に銀河ならず、露白く流るゝ草の徑を隔てゝ立つた、男女の星は、相見て軽く微笑した。此の時の

風采は、互に此の大なる城下を領して、君臨した
るものゝ如く、怪しき威と品と兼備はつて見えたの
である。

仔細を聞け、

―― 此より前日、禮吉が菩提寺に、向山の塚の骨を納めた團樂の座に（もう其の時は夜に入つたが）數を重ねた杯を手にして、大入道の權九郎が、藪の小流で洗つた足の、遠慮のない大胡坐の膝を坐り直して、

―― 扨て、若旦那
――
と更めて禮吉に言つた。

―― 此の上臈（露野を言ふ）は、御迷惑でも、若旦那がお歸りなされる時、一所に東京へ連れて行つてつて頂くだ。また其處には、御新造の御料簡もあらうが、江戸の方だ、話は分る。

お内に御一所にお置きが願へて、縫針や飯事のお手傳なら、願つたり叶つたり。また御都合で、御夫婦のお見立てで、餘所へ奉公と言ふやうな都合に成つても、こんな鬱陶しい地方でお暮しなされるより、どんなに嬉しいか知れませんか。媼さんは固より其の氣だし、上臈の心も、よく俺には分つて居ります。

推おしつ附つけがましうがすけれども、其それは其それに極きめるとして、是非せいひと一つ此處こゝに俺わしどものお願ねがひがござりますだ。

と言いふのは、申まをすも如何いかゞだけれど、俺わしどもは、これ、恚かうやつて御同座ごどうざも恐おそれ多い、血統ちすぢ違ちがひの、言いはゞ、なかまはづれの人間にんげんだ。

千石取こくとりのお歴々れきゝの、此この上臈じやうらふの抱乳母だきうばが、むかし何を間違なへたつて、穢多非人ゑたひにんの小屋こやの中から這出はひださう道理だうりはねえで、媼ばあさんは血統ちすぢも正たゞしい、しらきちやうめんの婦をんなでがす、が其その婦をんなを穢多ゑたが女房にようぼうにしたからには、大江山おほえやまの酒吞童子しゆてんどうじが、何なんと、京きやうの女をんなを引ひき攫さらつたやうな、酷むごい、情なさけない、可哀あはれな經緯いきざつがこゝにあるで。

媼ばあさんも、前まへの世よの因縁事いんねんごとと斷念あきらめては居ゐるらしいやうなものゝ、俺わしがために、おつけ晴はれて人間にんげんまじはりの出来できねえやうな身體からだに成なつてから、最もうこれ雜ざつと四十年ねん。此方こちらが氣きの所爲せゐかは知しれねえが、過いっ般かの夜中よなか、若旦那わかだんなと二人ふたりでござつた上臈じやうらふの顔かほを一目ひとめ

見て、莞爾したやうな顔は、いつが日にも見えた事はねえくらゐ。

其と言ふも常日頃、餘り世間が俺どもを人外にするからだ。

また旅他國も、知らぬではねえけれど、凡そ、此の國ほど、人間の差別を附けて、金錢の多寡や家の由緒、其の人の身分に、甲乙を分ける國は他にやあねえ。

其處へ交つた穢多でがさ。

不斷の鬱憤を思召さい。町は天氣の、山は晴れても、俺どもの里は水が濁つて、天井も眞暗だ。

月とも、星とも、御器量人と、美しい上臈が、其の里へ光つてござつて、微塵も別隔てをなさらねえ。前塚田圃はさらりつと秋晴で、鳳凰のかはりに、きら／＼と蜻蛉が飛びます、

上臈なんぞは、うまれてから、こんな嬉しい事は

ないと、媪の膝にお縋んなさる、場所がと言ふと隠亡小屋だ。

が、光り輝く。

あゝ、出来よう事なら、貴方がたを一對に、活きた鎮守に祭込んで、村中、一統が家來眷屬、氏子に成つて、三年打通しに祭禮をしてえものだが、娑婆は然うは成りませぬえー

其の折から、針屋のお光は、元氣らしいが、疲れた状して、投出した襖も打解けつゝ葬禮に使ふ小さな火入の箱を枕にして居た。其のほつれ髪に、布白く額に浸んだ血のあとを見るにつけ、古寺の書院につけ、こゝに開かれた重詰につけ、姫路の城の繪を床にして、禮吉は落人の趣を解した。趣を解して、然も昔の落人の、平和と、愛と、親密を知つた。敗北の歡喜を覺えたのであつた。

(一層二人が、長に其の特殊部落ーー)

但計り知られなかつたのは、兩親の白き柩の前に、左右に點じた蝋燭の燈の瞬く影と、線香の煙の行方

であつた。

權九郎は言を継いだ。――

――處で更まつたお願と言ふのは、

此まで、世間に侮られ、ういめ、つらいめ、虐げられ、恥かしい目を見なさつた事は、俺どもにかはりのねえ、日かげものゝ上臈を、面晴れに、若旦那、新聞までが目くじら立てる、先生、可うがすかい、お前さんが、此の上臈の手を曳いて、二人並んで、見せつけて、此を見やあがれ、どんなもんだ、と此の城下、中を堂々として練歩行いて貰ひてえだ。

――

お光は頷く、露野は俯向いた。

――大郷子が百人、刀が一百、槍が千本あらうとも、矢でも、鐵砲でも持つて来い。隠亡が尻押だ。路傍の草木どころか、石も泥も皆味方だ。指も指させるもんぢやあねえ。

縣廳前の廣場を、

後生だ。えゝと、（お光に）御新造さんの前で

言ふのは拙いけれども、頬邊押附けツこを遣つて一
生の思出に、俺どもを嬉しからせておくねえ。

――

―― 今晚は ー

―― 今晚は ー

何時の間に戸が開いたか、本堂の暗がりには、ずし
り、ばたりと、もの音して、然う言つて聲を掛けた
ものがある。

と眉を擧げたお光の額の血と、禮吉は瞳を合せた。

また本堂で、滑稽けた聲で、

―― お今晚――

と言ふものがあつた。

權九郎が肩で呑込み、

―― はゝあ、來せたか。若旦那、いや、御新姐、
御懸念なものぢやあねえ。皆、それ、晝間向山に、
彼方此方、穴穿り、墓の地ならしなんかして居つて、

俺わしがそれ、天狗てんくの牡丹餅ぼたんもちをお振舞ふるまひ申まをしてから、あの徒てあひ（大郷子だいがうじ一黨たう）が顔色かほいろを變かへて、御新姐ごしんぞさんと俺等わしらに立向たちむかはうとした時ときだ。嘲笑あざわらつて、俺わしが、へへ、鞍馬山くらまやま聲こゑを掛かけると、お墓所はかしよに居合あせた人足にんそく二人ふたりは言いふまでもねえ。――山中やまなか、彼方あつちからも、此方こつちからも、むら／＼と若わかいものが大勢おほぜい出いたので、撲合なぐりあひにも搦合つかみあひにも成ならねえで、雙方さうほうが睨合にらみあつて、もの別わかれだ。――あの若わかい奴等やつらが來きたんだで。

だがね、大郷子だいがうじの一味いみは、若旦那わかだんなと上臈じやうらふが此この寺てらに居ゐなさる事ことは、最もう突留つきとめて居ゐる事ことは疑うたがひはねえんだから、何時いつどんな亂暴らんぼうを働はたらかねえとも限かぎらねえ。で、手配てくばりをしたでがすよ。大船おほぶねに乗のつた氣きで御安心ごあんしんなさいまし、若わかいものどもが大勢おほぜでお夜伽よとぎだ――
禮吉れいきちは座ざを正ただした。

――お重詰ぢゅうづめと酒さけを彼方あつちへ、露野つゆのさん。ねえ、姉あねさん、それから燭あかりを、――

――いや／＼暗中くらがりで腰兵糧こしひやうりやう、皆馴みななれた徒てあひでがす。たとへば、其その本堂ほんだうの方ほうへはお配分すそわけをするとしても、

藪やぶの中なかまで持もち運はこべるものぢやあがあせん。――
扱さては藪やぶの中なかまで人にん數ずを配くばつた。

――釣鐘堂つりがねだうへ上あつてるのは誰だれだの。

――八やちだよ、――

――何なに、蜂はちだ。虻あぶぢやあねえか、――
と、暗くら中がりで、ひそめいた聲こゑが聞きえた。

權ごん九郎らうは、うなづき顔がほで――皆みな、人にん間げんばな
れのした、生せいあつて體たいのねえ、唯たゞ上じやう臆おそや貴あな方たがたの
影かげ身みに附つき添そふと云いつた徒てだ。何なに事ごとも、御ご心しん配ばいは決けつ
てねえ。――

時ときしもあれ、門もんに當あたつて、

――痛いたえ、――と仰山きやうざんに叫さけんだものがある。

別べつの聲こゑで、

――えゝ、乞食こじき、こんな處ところに寝ねて居ゐやがる、ち
よつ氣味きみの悪わるい、癩かため。――

――何なんだと、――

―― 寺の門に寝て居りや、乞食が癩に違ひなからう。――

―― 待つて居た。乞食が癩でも、肋骨を踏まれ
ちやあ料簡出来ねえ、さあ、来やがれ、――

―― 来せをつた、大郷子の奴等。

御

覧なせえ、一寸お茶番。
と大入道は苦笑。

門の騒動がやがて鎮つたと思ふと、裏の藪で、怪しい聲して、

―― そうら、天狗の牡丹餅だ。

――

―― 驚破、其處へも押寄せた。が、しかし其の搦手も、退く敵を追ひながらの、味方の聲が遠く成つて、

―― そうら天狗の牡丹餅だ。

――

忽ち寂然と、音もせず。

白鷺の城巍々として、
隱亡廓の姫の尊さ。

杖の音コトノへと、
提灯一つ、障子の破れ目に見えつゝ、
袈裟衣の老僧、山の回向から、
里まはりの用を濟して歸山の處。

—— ほう —— と言つて、
門から後退をされたは、
其處等に人の影法師を、
魑魅魍魎と驚かれたのであらう。

額で颯と數珠を掉つて、
—— 世尊以是神呪。
擁護法師。

我亦自當。
擁護持是經者

月影の霜。雪のむかし。紫の花

六十一

「露野さん、眞個に、一所に東京へ来るかい。」

「
」

禮吉は同じ空屋の軒へ入つて、倒れかゝつて傾いた戸に、餘した敷居に、腰を掛けた。が、鬼あり、魔のあつて、冥々の裡に、露野を守護するかと思ふにつけても、更めて襟を正さずには居られなかつた。

廂漏る月は、明白に屋根の杉林を、冠せた如く空に照して、二人は巢に籠つたやうである。

「眞個に一所に来るかい。」

「えゝ。」

と片袖を絞つて頷へ、

「夢にでも然うなりますと、どんなに嬉しうございませう。でも、私のやうな田舎ものは、極が悪く

つて、汽車の途中で消えて了ふでせうと存じます。』
とイむ姿は、月に溶け、草に散つて、其のまゝ消えさうな風情である。

其の姿を視め、面影を見ながら、渠は事實、幻の影と成つて消失せはせずや、と危ぶんだ。

ほた／＼と、其處彼處に、草鞋が化けたやうに影を落した、いま、酔漢を懲戒した天狗の牡丹餅のあとを見るにさへ、餘りに奇しき縁である。

むかし／＼釣をして居た、白髪の爺さんを、大きな扶持で手に入れたのさへ、君臣、不思議の奇遇と聞く。
藍子は空拳にして此の月下の美女を、我がものに、親しき友に、妹に、肉親の如くなし得るは、餘りに冥加が思はるゝ。

兩岸の影、月白く、橋には霜や置くらむと、皎々たる天地に對して、渠は、夢かと疑つた。

(ー ー 年久しき記憶である。 ー ー)
夢とも、現とも、現實の境とも辨へず、渠は淺野
川の此の岸に向つて、一種言ふべからざる追懷のあ
るのを忘れぬ。

石は凍て、草は氷つて、一望皚々たる雪の景であ
つた。

恰も、此の上の丘を天神山と稱する、橋の名もよ
つて名づけられたのである。が、山に天神の宮があ
る。其處に梅の林のあるのを、峰も橋も路もたゞ白
い中に、ふと金平糖のやうに考へながら、酒もまだ
知らず、魚の味さへ思はない、父なきあとの精進の
身の少年が、とぼ／＼、(いま見る位置では)
向岸を一人通る。

唯美しい娘が一人、それも唯一人、此方の、此の
岸を辿々と寂しく行く。

間には雪の流を隔 ー ー

両方の岸を、流の上方へ、上方へ何處までも行く。
が、一度も顔を上げても見ないで、姿容はよく分る。
間には雪の流を隔てゝ。

並んで行くやうに思ひながら、路の嶮しく、山の
深きに從つて、次第に左右へ遠ざかる。

何處を志すのであらう。我が行く方を、音に聞く
白菊谷か、とすれば、娘の行く方は、黒百合の峰で
あらう。

山嵐として、濛々としきり降り来る白雪に、や
がて掻消えて、姿が見えない。

見えなく成ると、百里、千里、互に世が終るまで
又めぐり逢ふ時のなく成つた事を知つて、手足は凍
ゆるのに、熱い、甘い涙が、ふりかゝる胸の雪を、
恰も白銀を溶かすやうに流れた。

其の思、其の景色を、骨に刻み、血に描いて、未

だ嘗て忘れない。

あゝ、其の娘が、此の露野にあらずや。

露野とすると、恚う易々と手を携ふるのは、天地の約束に背くのである。

我が運命に逆するのである。

「露野さん。」

「はあい。」

と、姫は愈々臆更ける。

單に其ばかりではない。

尚ほ稚い記憶を辿れば、上の宮に、山坂を刻んだ、高い三段の石壇がある。其の眞中の小松の平地に、しよろ／＼と清水の湧く池があつて、小さな太鼓橋が架つて居る。

其處に、燕子花が咲くのである。

山靜に、宮は神寂びつゝも、路は荒れて、八橋の形も朽崩れ、太鼓橋の欄干も缺けて、清水も時に涸々ながら、藻に交つて、たゞ葉ばかりの伸びた中

に、一輪二輪、忘咲きに、紫の花の開くのが、胸を
抱くばかり可懐しく嬉しかった。

小兒は、よく一人で其處へ上つた。

村里は遠し、野は廣し、館邸の庭の池はもとより、
餘所のもの。町家の兒は、おのづから水に咲く花が、
奇しく、珍しかったのである。

守るものも、垣根もない。

小さな石の金魚鉢一つ、我家の垣に小溝があつた。

其處へ移して植ゑて見たさに、名玉を盗むばかり、
可恐さも可恐し、震へながら一株を根こぎにして、
花を抱くや、蝶の如く飛んで遁げた。次の段まで駈
下りると、高き社に打驚かす太鼓の音もせず、追つ
て来る神官の形も見えぬ。

吻と息して、其處の御手洗に溢るゝ水に、手の泥
や葉の土を洗はうとした時、唯見ると、石を嚙んで

水を噴くのは、赤い口を赫と開けた、金色の青龍であつた。

が、燕子花を取らうとする、是非に迷つて逡巡した間に、白晝早やいつか黄昏れて、日は北海に傾いた。城の森を抜ける鐘が、ゴーンと龍の鱗に響くと、ざわ／＼と裏山の草が風に鳴つて、峰からずる／＼と尾を曳いて、活けるが如くはたと睨む。きやつと叫んだ、燕子花を水に投げて、――此の天神橋まで投げられたやうに遁げたのであつた。

いはれなき燕子花の一本さへ
此の艶なる美女を。

禮吉は我を忘れて熟と視た。

「露野さん。」

「はあい。」

「一層、東京へ歸らないで、お前さんと二人、前塚田圃へ引込まうか。」

と遣瀨なげに身悶して言つた。

露野は一寸身を寄せて、

「まあ。」

「眞個だ。」

「でも。」

「何故。」

「勿體ない、そんな事が。」

「何が、勿體ない。」

勿體ないは私の方

だ。

「

よし、運命に逆せよ、龍も崇れ。

「えゝ、まあ、此處にお掛け、一所に、

「

「あれ。」

しやらんと鳴つて、しやんと響いて、流の面を打つやうな、あれ／＼不思議な響の音。月に白銀の響の音。雲を騎る神馬にや、ひづめは聞えず、しやらんと鳴る。

禮吉は、すつと立つた。

と絶えて、續いて、轡の音。まさしく對岸の曠野の霧を潜ると聞けば、高く中空を抽いた其の大槐の幹を横に、月に湧いたる駒の影。

鞍に一人、婦人の姿。

肩、弱腰のたよ／＼と、空を行くと思ふばかり、黒髪の隠れたのは、鬢籠むる霧でなく、月影の襞あり／＼と、練衣か、小袖か背をかけて、するりと頭から顔を包んで深々と被いたので。世を忍ぶやうな形容を、瞬きもしないで見た。

「あツ、お母さん。」

と呼ぶと、草の岨をずる／＼と、這つて、蛇籠に落とつるや否や、衝と立ち状に早や枝流の川水を、足を柳に巻かれたやうに成つて、ふら／＼と渡つた。

霧の海の響の音。葦間の紅

六十二

時々、水の瀬に、鶴とも龜とも、形は定かならな
いけれど、――過ぎし夏の夜に、此の流に遺失し
た煙管が、心あらば、おもひ草に成つても生えよう
――薄もむら生ひ、草も離々とした中洲の磧が
此處にある。

下駄なんぞ何うしたか、そんな事の覚えはない。

禮吉は、ぶぶ濡の跣足で、ざぶりと水を散して其
の中洲を踏んだ、此を越えて、又水を一直線に、對
岸へ渡らうとするのである。

實は、一戻りして橋を渡る間が待てなかつた。一
生に唯一度、二十年餘り前、同じ處に同じ姿を見た、
今は早や昔、世を隔てた母の面影が、其
處に霧の中に朦朧と顯れて、駒が光るのを歴然と見
た。其を、誰が幻影と思はずに居られよう。

縫着すがりつくには分秒ぶんべうも後おくれては成ならぬ、一呼吸ひといきの間に
も、消去きえさつては、再ふたゝび相見あひまゆる事ことの期ごし難がたい、其その
果敢はなさを知しつたのであるから。

唯と、洲すに乗のつたその脚あしを、いま亂みだした流ながれが、千筋ちすぢ
の絲いとに成なつて、する／＼と擲からんで、すつと引ひく。

我わが頭髪かみのけの伸のびるにあらざ、背後うしろから黒髪くろかみ
が、長ながく冷々ひや／＼と絡まつて、ぐいと引戻ひきせどすやうである。

見返みかへると、青白あをしろく露野つゆのが光ひかりの瀬せに入はつた。

玉たまが散ちるやうである。きら／＼と流ながるゝ水みづは、た
かく掲かげた白脛しろはぎの白しろさを裏透うらすかして、澄すみつゝ走はしつて、
褌つまの友染いづせんの紅くれなゐが涼すずしく蜿うねつて散亂ちりみだるゝ。

片袖かたそでを脇わきへ捲まいて、片手かたてで緊しかと小褌こつまを取とつた、女をん
氣なの水みづに恐おそれて、裳もすそは堅かたく守まもりながら、淺あさい川波かはなみの
寄よる毎たびに、脛はぎも腰こしも、ふら／＼と、搖ゆれつゝ其そのた
びに崩くづれさうな、亂みだれさうな。

解とけた衣紋えもんも、おくれ毛げも、我わが胸むねに引寄ひきよせて、

いま見たまゝの美しさ。

流に乗つた足許より、上の空に、此方を見ながら
渡つて来る、眉が恍惚と、瞳も大きい。

「危いよ。」

水のさつと鳴る中に、鳴く蟲よりは透る聲で、

「いゝえ、淺うございますわ。」

「淺い
淺いたつて危いよ、危いよ、來

ては不可い。」

と強く言つた。

「
」

其處に、ふと堰留められたやうになつて立つたの
を視ると、其の、脛をもぢつて水の中を來る時より、
却て息を切つて駈出すやうに感じられて、露野の動
悸も我が脈も、憂々と鳴るばかり水底の礫に響く。

あゝ、白山の朝ぼらけに、夏草の霧を飛んだ、其

の容子が髣髴と目に宿つて、いづれを影とも幻とも分かず、一條の扱帯の解けかゝる紅色にも、生々と血が通つた。

「尚ほ不可い。」

と禮吉は爪立ちながら、

「其處へ立つちやあ、早くおいで。」

「參りましてても可うございますか。」

と肱を銜へるやうに袖に俯向く。

「可いも不可いもない、早くおいで。」

あれ／＼、あの鈴の音、と胸を捻ぢて聞澄しつゝ、

水の流の、さゝつと近きに、横状に兩手を伸すと、

その探手の覺束なさにも、露野は身を任すやうに手を

を預けた。

露野の胸は、ふはりと軽く、禮吉の腕に掛つて、

濡々とした襖ばかり、磧の露に重みを添へた。

搔据ゑるやうにして、其のまゝ邪険らしく手を離

すと、口を利く間もゝどかしかつた。

婦人のつた駒の影は、ハツと思ふばかり古槐の下、霧の海に隠れた。が、消え失せたのではない。鈴の音は、却て近く成つたらしく、向岸なる、松と柳の水の影が、月に綾を織るやうな裡に響いて聞える。が、聞くうちに上流の方へ遠ざかる。

禮吉は、何を思ふ隙もなく、再び、さつと瀬に入つた。中洲で、岐に成る、此の分流の方は、萍の池に小波の立つやうな、いま渡つた如きものではない。

川の名も浪立つて、水も深し、流も急なのである。

尤も徒渉に危険な事はないのであるが、露野なぞが、何として、

「危いよ。」

「貴方こそ、」

と洲の端へ、うろ／＼と寄る處を、

「あゝ不可ん。」

と繁吹のやうに浴びせて言つた。

「御一所に 何うぞ、私も。」

「危いと言ふに。」

「でも、私は些とは泳げますもの。」

これに、一驚を喫しながら、

「馬鹿な、行先は、冥土だか何だか分りやしな

い。」

と我ながら規を越すまで、女を留めて激しく言ふ時、冷い水の香が芬と打つて頭脳に沁みた。

流は脛を越して、早や、股にまで及んで居る。急に、川が前後に廣く成る氣がした。

橋も、山も、ずっと遠い。

「でも、何うぞ御一所に。」

と、あの柔順な女が、肩を掉り動かすまで、何故か拗ねたるやうに言つて、そして、ひれふしても肯入れて欲しさうに洲に衝と低く居て、手に草を握つたのが見える。

可哀さと優しさに、血の沸え、胸の湧く聲は、一層激しく、

「不可いんだ。」

と屹と留めた。聲は水よりも、其の人なき月の橋に響いた。

踏む歩も蹠跟と、忽ち凄じい流の力が身に應へて、横状に押流されようとした。あとは唯半

ば夢中で、こゝに言傳ふる其の月の棧を空に掴んで渡るやうに、手を空に、月を抱く心地がして、胸も肩も眞蒼に光ると思つた身は、どうと龍の背の蛇籠に抱着き、石垣に倒れかゝつて、短い草を引掴み、其の石垣を岸に攀ぢた。

月も離れて衝と高い。

土手の松を、立ち状に視れば、其の松枝と、柳の梢に背を渡して、やゝ遙には成りながら、駒も、馬上の影も行く。其の未だ消えないのを確めて、幻影でないのを認めて、現實の土に我を据うると同時に、露野は、と見れば、無慙にも、大川の洲

ひとり凍着いたやうに成つて、力なげに弱腰を倒して、草に俯向けに黒髪を伏せた。

「あゝ轉んだが。氣落をしたか。」

いや、我が手に突倒したも同然ではないか。

また、不思議に、然うした此方の堤が高く、水の淀は淵の色を湛へて、足許の暗いのに、差覗く洲の磧には、瀬とゝもに早や霧が掛つて、流るゝともなしに、其の、あはれな、さみしい姿を吞まうとする。

銀の矢。白衣の笄

六十三

淵川のぬしにも紛ふ其の水面を這ふ霧は蜿々と、
大なる白蛇の形して、黒髪をはじめ、露野の白い
頸脚を、さて吞まうとするのに、婦が菱伏した袖裾
の草は、葉を分け、莖を立て、露に明白に、根に
水を巻いたやうな笹の茂りさへ見分けらるゝ。が陰々
として、もの寂しい。

唯、其の中に、薄い影のやうな、露野の袖の振か、
脇明か、踏亂した蹴出しの色か、帯の模様かとも思
はれて、色紙を所重ねた形に、紅い色が一所、冷く
底光して、月に晃々と、不思議に金色の雲母を鏤め
たのが、ぱつと目に映つた。

一目見ると

禮吉は、悚然として四邊を

見た。白羽の矢が、ひやうと一條、颯と来て、其の
紅いのに弗と刺つ、と同時に其の姿が消え失するぞ、
と感じたのである。

たとへば、あはれに、床しく、可懐い月影が、木に水に謎を白銀の光で掛けたやうな鞠唄の一條が、ふつと此の世から失せ去つて、訪ぬるよすがのないやうに

轉瞬の間ながら、禮吉が猛然として憶起した、恰も此の豫言かと驚く事實がある。

七八歳の頃であつた。

町の氏神の社の境内を隔てた、此の麻野川に臨んだ、一つ丘の如き廣大な地廓を占めた邸があつた。

黒門の奥深い式臺の前に――思へば矢張り年經たる槐の根から、二株に分れつゝも、幼い目には、大空を仰ぐばかりの樹があつた。

二つばかり年紀上の、其の邸の兒と、友としてよく遊んだ。

槐の横に、木戸があつて、其處に入ると一面の芝

生で、芝に巖組して、巖に牡丹が咲く、其の中に石の反橋が掛つて居た。但し杜若も植ゑなければ、葉も伸びず、池もない。

石橋の獅子の眞似、やはらの搏戯、太刀打をして遊んだ。組んで落ちても、轉げても、此の芝の雲あるために、身は蝶よりも軽かつたのである。

が、それは措け 此の中庭を、もう一つ
木戸をあけると、其處は廣々とした背戸で、林檎、李、梅、桃など、果ものゝ樹の數林の如く、瓜、茄子の畠もあつた。垣根外との地境に近く、四邊の町家からは何の窓からも皆見えた。こんもりと繁つた大きな椎の樹が一株。

—— あの中に天狗の巢がある ——

友は然う言つて、友自らは敢て恐れないのを誇つた。

瓜の畦には大蛇が棲む、竹藪には狐が鳴く、茗荷

島はたけの下したは、土龍もぐらの御殿ごてんださうである。

―― さあ、背戸せどへ退治たいぢに行ゆかう。豫かねての手練しゅれん

は何なんのためだ。――

秋あきの暮方くれがたの事ことであつた。

石橋しやくけうの上うへで、恚この企くはだを起おこして、友ともは半弓はんきゆうを持もつた。

禮吉れいきちはおもちやながら、小兒こどもに手てごろな薙刀なぎなたを脇挟たばさんだ。

時ときに、芝生しばふの飛石とびいしの數かずを隔へだてた、母屋おもやを離はなれた離はな家の、數寄すきづくりなる下座敷したざしきの縁えんに近ちかく、簾すだれを捲まいて、友ともの、上うへのと、中なかのと、美うつくしい姉あねが二人ふたり、カランカラノ、と賽さいを振ふつて雙六すしろうくをして遊あそんで居ゐたのが、二人ふたりの扮装いでたちを視越みこして、莞爾にっこりすると、

―― 瀧夜叉たきやしやめ――

と友ともが言いつた。

二人ふたり揃そろつて、腕うでを出だして、たゞいて見みせつゝ、ま
つすぐに木戸きどを出でた。

薫かをりのするまで、藤豆ふぢまめの花盛はなざかり。

―― そら／＼、あの大きな冬瓜とうがんが動くうごです。

すばんと射いるかな ー

と半弓はんきうを左手ゆんでに立たてたが、

―― お祖父様ぢいさんに叱しかられた ー

と其その半弓はんきうで、頭あたまを敲たいた

椎しひの樹きが、眞向まむかうに ー 蒨鬱せううつと圓まるく繁しげつて、

小山こやまを伏ふせたやうに見える。 其その根ねから、

薄うすいが、むく／＼と煙けむりが立たつて、土手どてを突ついてずら

りと繞めぐらした生垣いけがきに、二條ふたすぢに分わけれて、夕暮ゆふぐれを罩こめ

つゝ、淡うすく靡なびいた。

―― 天狗てんぐが御茶おちやを沸わかすの？ ー と禮吉れいきち

が低聲こしこゑで訊きくと、

―― うゝむ、魔まが火ひを焚たくのは、樹きの天邊てつべんで

す。 根ねの處ところだから彼奴山賊あいつさんぞくだ。

手練てなみを見みせて遣やれ ー

と弓ゆみにカツキと引番ひきつがへた

―― 唐土の楊雄よ

日本ぢやあ鎮西

八郎爲朝だ

―― えゝ！ 若様――

と椎の樹がくれの煙の下から、高い鼻のかはりに、
長い頤を、ぬつと出して、慌てた聲を掛けたのは、
邸の老僕で、其處に木の葉を焚いて居たので。

―― わツはツはツはツ ー ー と友の若様は、

豪傑だから高笑をしゝて、

―― 今度は竹藪へ行つて妖怪退治だ、 ー ー

途中なる、茗荷島の土龍如きは、ものゝ數でもな
いのだけれど、歩行いて大分間のある、背戸も西北
の隅なる其の大竹藪は、眞晝眞暗なほどの難處であ
つた。然も晩景。

―― 暗いんだね。 ー ー

と面打つ陰氣に、思はず言ふと、

―― 富士の人穴でも、八幡の藪不知でも、僕
が附いてら ー ー

ぐる／＼廻つて、ざわ／＼と分けつゝ、大きな蜘蛛の巣に、時々、玩弄品の面が二面引搦つたやうになりながら、しゃがんだり、ゆがんだり、ふう／＼呼吸を吐いて奥へ入ると、落葉朽葉の溜つて、露草の香の蒸すやうな岨へ出た。覗くと溝の深い底に水があつて、藪越の西日も早や弱々と成つた薄あかりに、小流が雑草をちら／＼と潜る

向うに、低い崩垣の、其處にも生えた此の藪のわかれを隔てゝ、たふ／＼と響く流の音は、麻野川が町中を過ぐる瀬なのである。

唯、此の溝の別れが、大川へ灌がうとする角あたり、暗いより眞黒な草の下に、水に浮いて、ちらりと眞紅な色が見えた。

颯と飛ぶ翡翠の影かと思ふのが、見直しても其のまゝ消えない。そして、晃々と其の紅に金色の雲母を鏤めて、暗い處に、深く光つた。

――ぬしだ。――

池が、沼、淵が、溝でも、ぬしと言ふものゝ、幼
兒の耳に響く驚異を想へ、ばさ／＼と藪を退る處を、

―― 見ろよ、臆病め。――

と友に罵られて、恐々、遁腰を宙に据ゑて、密と
覗いて、ちよつと見て、我を忘れて、何とも知らず、
あゝ、美しい、綺麗だ、と思つた間もない

友の胸に、ブンと鳴つた弓とゝもに、兵と飛んで
白羽の矢が、其の紅に衝と當るのが、却つて我が胸
に響くと齊しく、色はハツと消えた。

が、友が慌しく遁出した。
藪を出ても、目が眞暗であつた。

―― 鯉だよ―― 僕ん許のぬしなんだから
な。知れると叱られら。黙つて居たまへ。

成るです。あいつが暴れると、僕たちより大きく
―― 退治たなあ――

と一矢残して持添へた、半弓なりに腕を敲いて、

――へむ、汝は弱いぜ。何うだ、

見ろ、書寫山の鬼若丸だぞ。――知つてるだら

う。武藏坊辨慶だ――

――それぢやあ僕は牛若だ――

――ちえつ！

其から喧嘩した。口も利かない。

禮吉が、一人黒門を、神社の境内へ出ようとする

と、

――受けて見る――

禮吉は屹と立った。

友は、槐の大樹を小楯に、半ば木がくれながら、
半弓を眉の上に引絞つた。白羽でせめて、きり／＼
其の唇の緊るのが見て取らるゝ。

――あつ――

と飛ぶと、裾を拂つて、薙刀の下に矢が落ちた。

―― 老僕は魂消たが、鏃のないのは、よく知つて居たのであつた。

大川に續く、友の邸の溝は、國の藩主何代の時か、時の幕府と隙があつて、山を閉ぢて戦はうとした時、名譽の參軍が、城の追手から十五六町張出した、要害の掘割で、驚破と言はゞ大川の水を引いて湛へようとしたのであるから、唯一幅に過ぎないが、深さは深い、秘密の堀が、その後、數の増す町家の下、藏の底、恚る藪など人知れぬ處に朽ちて埋れた底を、用水が流れて大川に灌ぐのであると言ふのを―― 後に聞いた 怪しいぬしも棲むであらう

が、友が藪の溝に、紅い色を射た當時は、同じ色の帯が、見隠れに大川を流れた。けれど、其の身投の女は、何處にも死骸が上らなかつたと言ふし、いや、心黒いものが衣だけ剥いだ、死骸を裸で流したとも言ふし、其の藪の裏なる小さな芝居小屋で、過失つて衣裳を流したとも 四五日は沙汰があつて留んだ。

其の矢、其の矢が、其の色を映した露野の姿に、

否、單に露野ばかりではない、白羽の矢は霧を切つて、我を射伏せる心地がして、禮吉は瞬間、堤の其處に立すくんだ。

忽ち思返したのは、隱亡廓の姫を守護する、可怪い野川の神である。山の立樹も人影に見える。

「別條あるまい。」

詫後は後で——

尚ほしかし、前途から射掛くる矢に、立向ふ思で、腕を擧げて、支へて額に當て状に、半ば目を閉ぢて、衝と洲の草の紅の露を見棄てた。

渠は身を以て投出す如く、馬上の婦人を追つたのである。

駒は束の間に遠ざかった。道の蛭に影も見えない。

しやらんと幽かすかに響くつわの音おと、松まつの梢こすゑで鳴なるかと聞きこゆる。

其その松まつ、柳やなぎ、松まつ、柳やなぎ。やがて松まつばかり一處ひとところ、堤つみに枝えだをさしかはす處ところを――片側かたがはに田畠たはたは次々つき／＼に展ひらきながら、見みる目は却かへつて、むかし、あの邸やしきの大竹おほたけ藪やぶを潜くぐつたやうに暗くらかつた。

投なげて、月下げつかに小ちひさな影かげで一人ひとり出でると、川かはもやゝ左ひだりに隔へだる。田圃たんぼは右みぎに愈々いよ／＼廣ひろい。山國やまぐにの此この裂目さけめは、恐おそく雲くもならでは白山はくさんの麓ふもとまで遮さへぎるものはなからうと思おもはれる。

渺々べう／＼たる霧きりの中なかに、堤つみの路みちは、一條ひとすぢ見えがくれに狭せまく成なつて、早はや處々ところ／＼大なる巖角いはかどに切きれて、切きれては續つづく。

切きれ目めを結むすんで、又また一つ、低ひくく架かけた橋はしがある。渡わたる音おとが巖いはに觸ふれ、流ながれに響ひびいてカラ／＼と鳴なると言いつて、鐺緒すずのをの橋はしと稱となへるのである。

橋はしに、名所めいしょの名なのある處ところは、水みづも溪たにに深ふかからう

――此の前途、此の奥には、二股尾にも、白菊
谷、小黒部にも、最早越中の山、飛騨谷まで、橋と
言ふ橋はないと聞く。

其の鐸緒が、白絲を曳いたやうに、すら／＼と靡
いて、流の音に揺るゝかと思ふを前に、駒も姿も、
霧を渡つて浮いて行く。

月も、薄雲も一所に行く。

清らかに、涼しい其の薄雲は、水にも田にも、ち
ら／＼と、散つて、映つて 近づけば其が
堤にも石にも宿る。白蓮の花がぱつと咲き、且つさ
つと散るやうで、禮吉は脚を爪立てた。

駒の尾も、たてがみも白く輝いた。

馬上の姿に、色はなく、すらりと被いだ白衣の頭
に、黒髪の隈は映らぬが、月影は、其處にのみ、鬘
甲の艶を照らすやうである。

ひづめの音の、我が聲音を消すのを知りつゝ、渠

は暫時は口も利けなかつた。

「あッ。」

古風な案山子の、屹と弓を番へた、頬摺の影に喫驚して、思はず聲を漏したのを機会に、渠は喘ぎながら呼んだ。

「馬士さん。」

駒が大きな巖に似て、間に挟る。

「一寸。」

「一寸、馬士どん。」

駒が尚ほ、銅に似て、路の門を塞いだ。
禮吉は爪立つばかり。

「馬士どん。」

と、やゝ高く呼んだ。

「うはツ、はソ、はツ。」

いま呼びつゝ、駒の横腹を傍へ通つて、出ようと
した端を、此の鼻が笑ふやうな、唐突のしやがれ聲
に、びしりと又灰色の羽で拂はれた。

路傍に、野萩の中の、地藏尊。

「うはツ、はツはツ。」

禮吉は知りつゝもぎよつとした。重ねて又馬士を
呼んだのに對して、此の笑聲は、地藏尊が噴飯され
たかと思つたのである。

「はい。」

と故とらしく駒をあやつつて、けろりとして行く。
扨て、留むべき程のものか。

「馬士どん。」

「何、これ。」

引叱られたやうに思ふと、以ての外穩かで、

「へい、人間ぢやあござりましねえ。」

「

大丈夫

はい、はい

人間ぢ

やあござりましねえ。」

「それは、神でも佛でも、
と其の口について禮吉が言つた。」

「え、お前らに饒舌るでねえだ。」 と突慳貪
に撥かして、

「何も、憂慮さつしやりますな。馬士どん、馬士
どんちて、はい、私等を呼ぶものは人間ぢやあござ
りましねえ。」

あ、馬士は、馬上の白い被衣した婦人に言つて、
渠を人間でないと云ふ。

「え、何、これ、人間でないちても、可恐
がらつしやりますな。狐でも狸でもねえで。」

はい、はい。

しやらんと。

「そこに、靈驗な地藏様がござらつしやる。地藏様にも聞かつしやりまし。」

案山子でござ

りまずだよ。はい、馬士どん、馬士どんと呼ぶ奴は

何が、これ、夜さり夜中、ぼつねんと獨

り田圃に立つて居りますで、妖も、人間の形をしと

りますだけに、秋の長夜ぢや、えら寂しがつて、た

ま／＼通りかゝるものを、時々は、あゝしての、も

の、呼ばれるものでござります。山家、山路山奥では

の、それも又呼ばれるものゝ、氣慰みでござります。

はい／＼、はて、舌を出いて化けた處で、たかゞ

案山子ぢや、うはツはツ。」

笑ひ棄てざまに、老いたる咳。

「ごぼり／＼、ごぼん、うゝ 　　はい／＼

はい。」

「案山子です。」

禮吉は駒の横を、胴の半ばまで迫つて居た。聲が

近いので、俄に婦人にもものを言つたやうに聞えた遠慮から、言直して、

「案山子だ。案山子だから、聞いて下

さい、一寸聞きたい事がある、馬士ど

ん。

「馬士どん、馬士どんと 案山子だら、

はい、其のほかに澤山饒舌るもんでねえだ。

え、馬士どんか、はい、はい。

また馬士どんか ー はい、はい。

馬士どん、馬士どん、此方の森から、向うの

森まで、道のり何ぼ。

丁ど道のり、二里半餘。

二里半餘をいくらで参る。

げんこで参る。

げんこと申すはいくらの事ぢや。

五百錢の事ぢや。

五百錢ぢや高い、またぎに負ける。

またぎと申すは、いくらの事ぢや。

二百錢の事ぢや。

二百錢で行くなら、私のお馬に、私が乗つて、
ヒンヒンどうどめかして参る。

此奴、太い奴。其へ直れ、手討にいたす。

おつと承知々々お手討ならば、鯉鈍か、蕎麥か、

大平、卓袱、鴨南蠻。

馬士が、はい、殿様に勝つた處でござりますが、

何これ、案山子が化けた處で、うはッはッはッ。」「

ごほんと咳く。

案山子は 案山子は ー 其の母が、

炬燵で、また日南の縁で、身に煩ひなく、病なく、

機嫌のいゝ時、うたつて聞かせて、いま其の聲が耳

に残るのを、馬士の口から聞くと齊しく、滑稽けた

唄に、胸を絞つて、涙ぐんで、其の馬士よりは、仰

いで、月の沁む白衣の、露に際立つた姿を熟と視た。

餘りの事に、腹立たしいやうに。惜い！

隔つるものが魔にもせよ、鬼にせよ、母に似た姿

は、我が母に似た姿である。馬士が何を知る！

禮吉は、小兒のやうに、大きく睜つた目に一杯の

涙を湛へつゝ、しがみつくやうに、が手は密と薄青
い荷鞍の上ですらりと垂れた衣の端を軽く曳くや、
堪ふまじく、得ならぬ、心ゆくばかりの留南奇の薫
が、はつとすると、氷のやうな羽二重の手觸りに、
我が血が赫と紅に湧く時、月を渚が打つばかり、白
衣の姿がさつと揺れた。

「あ。」

とばかり、さながらに、刻める天人、女神に、聲
あるか、と聞くかとすれば、

「何をするだい！」

と荒く喚いて、つと引向けた馬の面とゝもに、馬
士は離さぬ手綱を其のまゝ、向 顧巻にしさうな見
脈。もうろく頭巾の裡に目を光らして、横状にひよ
こりと来て、

「不可ましねえ、不可ねえだあ、これ。」

と胸を突いて、突退けながら、

「はて分んねえ。山家ものゝ私等がの、これ、お
前様がたに抵抗うて、理窟ぶつではねえけんども、

餘りちば聞分けのねえ事だ。何が、お前様がたの目から見さつしやつたら、古蓑とも破笠とも思はつしやるべし、こんな山家の爺が、何を見損うて、お前様を案山子と言ふべし。

可えかの。

雪邑様の旦那様でも、御親類方の顔でもねえで、お館に、はい、勤めしやつしやる人か、それとも、御縁者分だかも知んねえだが、あんだけに、堅え／＼約束したゞ。の、どんな事が、はあ、あればつても、途中すがら、傍へも寄んめえ、また口を利くめえと。

そりや、はい、お身體を案じさつしやるは無理もねえだが、其の案じ事も、心配事も、城下町中、仕方方法も盡きたから、恚うして山へござらつしやるだ。

途中は措けさ、山へござらつしてからも、はい、鹽梅のよく成らしやりまして、めでたうお館へ歸らつしやるまでは、親子、兄弟、旦那様にも、決して、

お逢あひなさらねえ約束やくそくだ。何も、はい、私わしが言いふで
はねえ。が、何なんとしてぬしたちに、お逢あひなさるべ
い。口くちい利きく處ところでねえ、人ひとらしいものが傍そばへ寄よつて
も、どんねに、其それが御心痛ごしんつうだか知しんねえではねえか
の。

だで、私わしが無ねえ智慧ちゑの才さい覺かくして、ぬしをば案山かざり子し
と立たてごかすだに、鳴子なるこの雀すずめほども肯き分わけのねえ、
何なんの事ことだ。

こゝで、ぬし等に、お顔かほさ見みせての、話はなしい打うたつ
しやるくらゐなら、何なにを道樂だうらくに、山奥やまおくなんぞへ
立派りっぱなお館やかたにござらつしつて、御典藥ごてんやくで、養やうじ
生やうだよ。

此これとて私等わしどもが言いふではねえ、旦那様だんなさまはじめ御親類ごしんるゐ
方がたと、堅かたくなさりました、夫人様おくがたさまの御約束やくそくだ。

もう、御自分ごじぶんでは、娑婆しやばを離はなれた氣きで、白小袖しろこそでで
居あさつしやります。お姿すがたにつけてもよ、ぬし等らが寄よ

りつく法はねえだ。が、何としても、お身体へ觸らうとするならせい。

私等が馬に、私が、ちやんと預つた、誰方様でござらうと、荷鞍の端へも寄着かせねえが、何うするだ。」

爾時、――

「お爺さん／＼。」
と、靜に言つた、しかし禮吉は聲も胸も震へて居た。

世に誰か、生れると知つて生れて出よう。不思議に逢ふのに不思議はない。
渠は今、明かに馬上の婦人を、月の中なる雪邑のお楊と知つた。

生命をかけた戀なれば、見ても立處に消えもすべき其の身の、尚ほ消えないのを怪むほかには、馬士の甚兵衛である事さへ、些少も怪しむ氣はなかつたのである。

渠は覺悟したやうに、また靜に言つた。

「白菊谷のお爺さん。」

「や。」と目で銜へて、鼻で舐めた、馬士の甚兵衛は、手綱とゝもに呼吸を引いて、「立木の坊様、坊、立か。」

「お爺さん。」

「此は何うぢや。」

と頭巾を剥ぐなり、地を嗅ぐ馬の鼻とゝもに、芋苗葉のやうな腰を落いた。

「何うしてなう、こねえな處へ。」

「案山子に成つて、」

思はず言つた。言つたのは、親仁に怨みを言つたのではない。渠は心に信じたのである。

「隠蓑、隠笠、金の弓、お寶の案山子！」

と皺も顔も刻んだが、縦に其の弓弦を張つたやうに、馬上の夫人と、禮吉の顔をまつすぐに目で見張つて、しばらくして、

「えゝ、不思議の、因縁ぢやの。」

と眉を伏せると、落葉したやうな、手の甲に、ほろりと泣いて、

「待たつしやりまし、えゝ、待たつし

やりまし。」

と、むず／＼と向を替へ、踞直つて、

「えゝ、夫人様。一寸、馬を留めます

るで。地藏様も御覽じまし、些とも、へ

いお憂慮な事ではござりませぬ。これはもし、私どもが、親子も、孫も一方成りませぬ。」

禮吉は、ツキ／＼と胸が疼んだ。

「一寸もの、話をしますで、御免されませ。えゝ、くどうも申しますなれど、決して、へい、お心遣ひなさりますな。
立樹町の麻川ちて

「あゝ、お爺さん、」

と身悶して留めた、流を渡つた裾の雫の見すばらしいのを、いまはじめて心付くとゝもに、禮吉は冷たい汗を流して言つた。

「 貴女は何にも御存じない 」

「 はあ、なれど、御安心をさせませいで。 」
と、獨で頷いた皺面を上げて、又熟と禮吉を瞻つ

て、

「 坊様、どねえして、なう、こげいな處へ。 」

馬の頭をこき撫で状に手を掉りながら、

「 へい、案山子ぢやなんて、言はねえでよ。 」

「 月を見て居て、 」

「 ほう。 」

「 天神橋で。 」

「 ほう。 」

「 然うすると お爺さん。 」

「 おゝ／＼。 」

「 然うするとだね、お爺さん ー、いつか、い

つかの、あの時、 」

と禮吉半ば目で言つて、

「 あの時に宛如 ー 月は二つはないけれど、

水に映る影よりも、あり／＼と其のまゝの姿を見た

んぢやあないか。 」

「母上様様だね。」

「覚えて居るかい。」

「はあ、忘れましねえ。」

と、大なものゝ摺寄せる、馬の横面を、すぼりと、
敲くやうに平手で撫でて、

「此馬が先々代の馬の頃ぢや、久しいあとだが忘
れましねえ。私等もの、恚うやつて、夫

人様のお供のしてお館を出た時は、我が身で、我身
も、はて世の中には不思議な事も出来るだ、御大
家の夫人様を私が馬で、私が山さへお供するのはと
思つたがの、はい、坊様が言はつしやる其までは氣
は付かずに居つたですよ。何が、町端の野

原で、あのお前様、大木の下を通つた時、薄暗い葉
の中で、月明をふかりとの、此のお姿に映さしつた
のを拜んだには、私等あつと打魂消て、あれまあ、
此の世界が二十何年後戻りをして、何の事はない極
樂の道を二度歩行く氣がしたゞ。因縁だ、道理だ。」

と唐突のやうに、がツくりと頷いて見せながら、

「其處で以て、坊様は。」

「僕はもう。」

とだらしなく小兒のやうに、

「突如、川へ飛込んだです。」

「ほう、何でや。」

「見たのが、川向うの土手からだつたからね、橋を廻るのがまだるツこかつたし、それだし、昔からよく恂ういふ場合には、中に大川が隔つて、それがために傍へ寄られなかつたと言ふ話を、いくらも聞いて居るものだから。」

「おほ、緋の袴めしたのや、美しい襦袢引張らつせたのかの、富士の人穴の繪にもあるだよ。何でもはい、不思議な人に逢はうとすると、前に大きな水があるとの、えゝー 夫人様。」

と甚兵衛は、話の中に眉を仰向けに、鞍の上へ笑顔造りに聲掛けて、

「何にも氣に掛けさつしやりますな。十萬億土の

噂でもするやうでござりますが、はい、此の坊様が、大に亡く成つた母上様を戀しがらつしやる話でがすでの、此處はもし確に鐸の緒橋の處でがすで、はい。」

と調子高に、又聲を密めつゝ、

「ほれで、坊様は、どねえさつしやる。こんな處へ來さつせえて、」

「お爺さん、私は餘りに可懐しい、可慕しい。」

「

「おゝ。」

「人間でも、狸でも、犬でもない、案山子だから。」

ら。」

「や、又其を言はつしやるかい。」

「否、決して拗ねるんぢやあない、案山子だと思つて連れて行つてくれないか。」

「はて、まあ何處へ行くだ。」

「あの時と同じに 白菊谷まで。」

「えゝ、當事もねえことを。其處まで娑婆は逆戻りは出來ねえだよ。馬にめしたも、お姿も似てござ

らつしやるちて、坊様の母上様が此の世へ歸らしつた次第ではねえ。――此はお館の夫人様だよ。」

「失禮ながら。」

と禮吉は、やゝ向直つたが、

「存じて居ます。」

だから人間と思はな

いで、案山子も、それも跟いて歩行くのがお可厭だつたら、澤山の案山子が馬の行く路傍に幾つも幾つも一列に成つて立つて居るのが、一つに見えて歩行くのだと、其の分にして許して下さい。許しておくれ、お爺様。」

「夫人様。」

甚兵衛は捻らうとした煙草をやめて、其の掌を揉みながら――こゝで禮吉の母が、渠を伴つて、ともに白菊谷に赴いたいはれを語つた。
要は、禮吉の意を體して、馬上の夫人に、同行の許を求めたのである。

少時して甚兵衛は、夫人に揉みつゝあつた手を、ぶらりと力なく禮吉に下げて言つた。

「不可ましねえ、はい、坊様、こりや私等が間違
えだ。料簡違えしました。初つから、
貴女にお願のうするだけの事はなかつた。見さつせ
えまし、うんにやさの。見さつしやる通
り返事一つ打たつしやらねえ。人にものを饒舌らせ
て、一言も言はつしやらねえ、そでねえ、御方ぢや
との、怪我にも坊様に思はせたら、そりやはい私等
の遣損えだ。もの、勿體ないと思ふほど、馬士よ、
爺よ、と貴女がたのやうでもねえ、優しく言葉をお
掛けなさつて、女中はしたの手も多いに、端近にご
ざる時は、お茶一杯も、お手づから、こんな泥土の
手に下されるお方ぢやで、可いかの。

母上様を慕はつしやる、坊様の心を汲んで、口も
利けねえ、お返事も成んねえ、斷るすべを御存じね
えだで。や、貴女に願立てするがものはなかつたと、
私等が言ふは此處の事だ。深い様子があらつしやつ
て、白菊谷へ清水浴びに行かつしやる、
間さの、親兄弟、旦那様にも、一目だつて逢はつし
やるどころか、誓文ものも言ふまいとの。

禮吉は沈んだ聲して言った。

「知つて居るよ。」

「其がの、一通りや二通りの次第ぢやあねえだ、何が、お生命にも係らうほどの事だよ。」

「かさね／＼失禮ですが、醫師にも、お見せな
さらない。心ゆかしの薬だと言つて、此
の川の姫鮎とかを、底を浚へて、捜すんだけれど、
それさへ、なか／＼お手にはひらないと伺つたんで
す。」

「それぢや／＼。」

と頤の下で手を拍つて、

「何が其の姫鮎と言ふものが、白菊谷の菊の雫で
頭に花を咲かすと言ふだ。雫を飲んだ鮎

でさへ利くものぢや。ぢかぢけに其の清水、其の流
れに、お身體を浸しなさらうならの、拭く處を洗ふ
のぢや、洗ふ處を流すのぢや。目の前に御本復は知
れた事よ。私等もの、何一つ知つたでね

えが、其の姫鮎の噂から思付いて、豫てのお出入、

不斷したゝかの御恩報じに、斷つておすゝめ申した次第だで、くどいやうながお館にござらつしやると同じやうに、誰にもお逢ひなさらねえ約束だよ。

大概様子は分つたんべい。だに

よつて、此處は坊様、あきらめなさろ、あきらめてくだつせえ。よ、私等も頼むだ。」

頼む爺は、禮吉の母のために ー 甚次郎

其の子を一人、半ば殺したほどの山の中なる神である。

「
」

「此處さ道は狭うても、何が天下の往來だ。俺が足で俺が行くと言はつしやるまいもんでねえだが。」

「いや、そんな事は誓つて言はない。一人立つて歩行くどころか、いま唯かうして、ものを言ふのも、お爺さんの孫の霜ちゃんに、生命を助けられたお庇だもの。」

と其それにつけても涙なみだぐんで、しめやかに聲こゑが曇くもつたが、

「あッ」と云いつて、胸むねを反そらして、路傍みちばたの草くさに片かた手てづきに胸むねを開ひらいた。

駒こまがツト頭かしらを月つきに擧あげたのである、其その鬣たてがみは霧きりを拂はらつた。

「どう 此奴こいつめが。」

手綱たづなを取とつて立状たちざまに、

「山戀やまこひしう成なつたんべい。はあ、坊様ぼんさまよ。何事なにことも、貴女あなたの心こころを察さつしての、あれ、見みさつせえお袖そでが震ふるへる。可憐いとしいげな、はあ、お寒さむさうな。夜風よかぜがお身みに沁しみるだつべい。」

「濟すみません ー 濟すまないけれど、私わたしは何どうも。」

「何なに、何なにが、何なにがの、夜風よかぜがお身みに沁しみる分ぶんだら、むさうても馬士半纏まごはんてん、此この綿襖ぬのこなど被かぶせても進しんじよ。はて、はてな、こりや、鐸すゞの緒をを橋はしの鳴な

る、風が誘つて、りん／＼と

地藏の萩が下伏せに、駒の背おろしに野分して、
月も痩するか、白衣の姿。颯と振るたてがみに漾ふ
ばかり、鏘然として轡の音。

「橋が鳴るか、お爺さん、馬の轡が響くんだ。」
と仔細は知らず、急に顰んで眉をしかめた甚兵衛
の、面色の懸念さに、打消すやうに且つ言つた。

「うんにや／＼、其の橋の鳴りやうで、――
あれ上が暴風雨ると言ふだ。おゝ、鳴るわ、巖に異
様に流が響く。や、東の空を見さつせえ、
月の影が暗う成つた。――道理で馬が歸途を急
ぐぞ。七十九歳で此はぬかつた。――坊様よ、
氣いつけて。」

「畜生、いきばれ、そりや稼げい。」
と、手綱の端を衝と當てる。

むく／＼とひづめが上つた。

「あゝ、お大事に。」

と絞つた聲も、手綱のたけが早や隔たる。明星

聲あり。

「禮吉さん。」

清しく、優しくしめやかに、

「――御堪忍――」

と、被衣の裡を透明る

其の黒髪。瞳。眉。

月は輝き、駒が光つた。野分白く、水青く、小草
の露の飛ぶひづめに、人もなき橋の鳴る時、空に練
衣の袖はら／＼と、濡れたやうに、其の玉の如き聲
を包んで靡いたが、あしずりして見送るものゝ頬を
撫づるは、横に流るゝ霧であつた。

六十四

大雨。朝晴の雁來紅。グレーの詩。

六十四

「豪い雨ぢやつた。」
「可恐い降雨よの。」
「鐸の緒が夜さり鳴つたもの。」
「流に泡沫も浮いて見えたよ。」
「月夜には珍しい。」
「あの降出したは何時頃ぢや。」
「然れば、彼これ三時であつた。」

と口々に言交はす。――昨夜お楊を乗せた駒の、
別れ際に月光を浴びて、其の棟を躍越えたやうに、
いま想はるゝ。――霧の裡に深く眠つた鐸の緒橋
の土手際なる一軒家の建場茶屋に、――恚うし
た雨を語合ふ村里の人たちの目に、禮吉の此の早朝
の、容貌と、風采は、怪しき狂人の如く見えたであ
らう。

着ものは霧に朽ちて、露も雫も乾しあへず、何時
何うしたやら帽子もなしに、一本引着けた洋杖も、
縫つて辿る杖に似て、父母の白骨を守つて以來、夜
もよく寝ない目は血走り、頤も頬も薄汚れて、顔色
が蒼白い。

(ー ー 昨夜の宿りは凄かつた。 ー ー)

一里塚に籠つたのでもなし、辻堂に寐たのでもな
く、渠の引返したのは、例の檀那寺だつたのである。
が其處には最う親たちの骨はなかつた ー ー 假の
柩は、あの夜一夜、あけて後、お光の針屋の方へ、
露野とゝもに引取つたのである。

で、其の露野とは あんな氣の婦ゆゑ、
お光も勧めて、權九郎の意を體して、隱亡廓の姫君
と手を取つて ー ー 分けて、それらの特殊部落を、
侮辱し嫌厭し人外視する ー ー 大々名の大城下を
歩行くのに、然まではと白晝を遠慮して、昨夜は夜
深きまで思出多き麻野川のへりを逍遙つた次第であ
つたが

とすると、何が故に、両親の柩も、お光も、ともに露野もあるべき、針屋へは歸らなかつたらう。

「決心した

白菊谷の天暗く、霧に隠るゝ駒を送つて、石の如くに立つた時。

「私は覺悟した。」

早や目を掠め、我に迫つて、上流に黒く擴がる一抺の雲に追はるゝ如く土手を町へ引返す時

渠はあまたゝび心に叫んだ。

決心とは、覺悟とは、世の規、人の矩も避けよ、鬼も魔も道を開け。斷じて翌朝は出直して、白菊谷に分入つて、いま一度人妻を見る事である。

「禮吉さん

御堪忍

――

」

玉、白銀にも黄金にも、譬へんものなき其の聲を
聞く事である。

此の決心、此の覺悟を、裂くばかりに胸に籠めて、
お光に、露野に――もう其の人は磧のおなじ處
には影もなかつた。たゞ流の音が一際凄じく成つて、
水は早や白濁りに濁つて居た、大方は隠亡廓の姫の
守護神が扶けて橋を渡つたであらうと思ふ――
露野に、のめ／＼と逢はれようか。親たちの靈も許
すまい。

夜は更けた。

禮吉は、宿つて、夜の白むまでの雨露を凌ぐの
に、其の古寺を選んだのである。

が、其處とても、表向きおのれを名のつて、あの
老僧を驚かすべき數ではない。

如法の便宜は、彼處の寺は、夜もすがら鎖さぬ門、
戸に隔てない御堂であつた。

途中は、大川の音のみ高く、町々を出つ入りつ、
路に川を見る處は、下流に近づくに、従つて、次第
に其の濁を増した。

古寺の小路に曲る時、立別れた岸の柳は蓬に暗く、
月の色も、流も、どんよりと薄赤かつた。

はじめは、御堂の内までもない、柘榴の枝を頼む
木蔭で、額の掛つた観音格子の外に、唯廂ばかりを
借りて、踞まつて夜を明さうと思つた。――門を
鎖さぬと言ふ老僧にも、事からは渠をして、然まで
に遠慮させたのである。

が、最う、古寺の小路を、心咎め、氣怯れに、何
となく、夜更の聲音もひとり忍ばれつゝ、半ば入つ
た頃から、二粒、三粒、ぽつりと落ちた。

空は月明も、星もなく、濃い朧と成つて、川ある
方は早や眞暗であつた。が、門を入る頃は、ざつと
掛つて、肩をすくめても、背を縮めても、なか／＼
堂の軒では凌げなく成つたのである。

渠は階をにじり上つて、竇錢箱を探當てゝ、吻と
した時に 不思議に、其のあたりに、ものゝ
氣勢がして、ひそ／＼人聲が聞えるやうな氣がした
ので、

「御免なさい。」

と世にも憚る聲して言つたつが、素より應ずるも
のは蟲の音もなかつた。

偶と、

「あゝ、繪馬の繪がこんな時。」

「

眞夜中には、話合ふ。

悪い妨害をした

濟まない心地で、片隅に小さく成つた。

雨はどしや降りにとつと寺を包んだ。

藪よ、竹藪にかゝる音、卵塔よ、卵塔に流るゝ音、
屋の棟よ、屋の棟をたゞく音と、聞静めたのも束の
間で、忽ち轟々と降埋める。大川に人の形に立つて、
寺を抱へたやうであつた。

お楊を乗せた駒の、波を泳ぐやうな幻影が、目に
映ると、漸と花瓶の花と、葉の繁つた彼方に、金網
の目を組んだ燈籠形の小やかな常燈明のあるのが
目に着いた。

眞暗よりも、彌が上に不安である。人の呼吸十ば
かり數ふるうちに、大きく脈を打つては、轟くばか
り尚ほ降り響く激しい雨に、疊の目がびた／＼と瞬
をして震へると、臺に積んだ堆い柄杓が、ぱく／＼
ぱく／＼と口を開けて、やがて来る浪を呑む氣構へ
の、四邊は一面の沼、池、湖にもなりさうである。

不氣味さと、胸騒ぎに、靜坐に堪へず、居堪らな
く成つた渠は、蹠踉と立つた。

近々と御厨子の下の板敷に、本尊の袖に縋らうと
したのである。

古疊を密と通ると、明滅、陰々として、秋の螢よ
りは、やゝ弱い、蛾の血の燃えるやうな、常燈明
の幽な明に、銅鑼、鑊鉢、木魚を見よ。

かくまでの大降大雨の眞夜中には、不可思議な事を
をする。もの凄^{すこ}い形^{かたち}をする。が、それは、言^いふまい。
佛前^{ぶつぜん}、神前^{しんぜん}の樂器^{がくき}の妖^{えう}をなすいはれはな
いのに。――

(二 水楊枝)

字^じを視^みて人^{ひと}を可懷^{なつかし}んだのでさへ、前日^{ぜんじつ}は、白晝^{はくちゅう}亂^{らん}
倫^{りん}のものおもひする渠^{かれ}を驚^{おど}かした古物^{こぶつ}であるから、
將^{まさ}に其^その人妻^{ひとつま}に逢^あはんとして、こゝに雨宿^{あまやど}りをした
ものゝ、本尊^{ほんぞん}の扶助^{たすけ}を得^えようとする身勝手^{みがって}を、怯^{おど}し
て取挫^{とりひし}がうとしたに相違^{さうみ}ない。たとへば、
撞木^{しゆもく}はぬいと手^てを突張^{つゝば}り、木魚^{もくぎよ}はかし／＼と齒嚙^{はがみ}を
した。が、渠^{かれ}は、しやにむに御厨子^{みづし}を便^{たよ}つた。

ドーン、――

思^{おも}ひも掛^かけず、唐突^{だしゆけ}に、屋根^{やね}が抜^ぬけて、其處^{そこ}へ瀧^{たき}
が落^おちたやうに太鼓^{たいこ}が鳴^なつた。

「はつ。――」

と引呼^{ひきい}吸^きについた手^てを、其^そのまゝ板敷^{いたじき}に這^はふ如^{ごと}く、

辛からくも石ざくろ榴はやしの林はひに入はいつた。

渠かれは禮らい拜はいして居ゐすくまつた。

雨あめはどう／＼と降ふりに降ふる。

然さばかりの雨あめなれば、音おとに響ひびきは亂みだれたが、雷らい鳴めいも交まじりはしないが、隙すき間ま漏もる、暗やみ夜みに電でん光くわうさへ閃ひらめくやうで、しばらくは、唯たゞ大おほ瀧たきの底そこに閉とぢられた。石ざくろ榴はやしの葉はの金こん色じきと銀ぎん色しよくを、世よを離はなれた巖いはの角かどに飛し沫ぶきの激げきするが如ごとく見みたのである。

一いっ秒べうを三さん十分ぶん、半はん時ときを三さん時ときの思おもひ。

渠かれは針はり屋やの納なん戸どを思おもつた。其そこ處こに、お光くわうと露つゆ野のを思おもつた。――父ちちと母ははを思おもつた。

遙はるかに、又また遙はるかに、かゝる時とき、おなじ衾ふすまに籠こもるべき東とう京きやうの家いえのお橋きつの、張はりと意い氣き地ぢのある瞳ひとみを思おもつた。

が、此この心こころ、此この思おもひ、お楊やうを慕したふ此この心こころ、此この思おも念ねんが留やまらずんば、其そのいづれにも、一いっ人にんにも、誰たれ

にも、救はるべく、助けらるべく、慰めらるべき身
ではない。

渠は石に成つて、墓に成つて、身に青苔の生ゆる
心持を、尚も忍んで、凄じくおどろに烈しく成りつゝ
増る雨を聞いた。

――ニヤアゴ――

「あ。」

――ニヤア――

「あゝ。」

――ニヤアロ――

「あゝゝ。」

何う成る事ぞ、此の上に、濁水が一塊。どろ／＼
と襲つて来たやうに、破畳の横廊下を、朦朧として、
手も足もなく這寄るのは、いつかの海鼠に似た灰猫
である。ばかりかと思ふと、

――ニヤア――

と恰も我が居る板敷の下で鳴く。

頭あたまの上うへで又また鳴なく聲こゑを、得え堪たへず密そつと仰あふぐと、あれ、いつか怪あやしき蟲むしの這はつた壁かべの破やれ目に、ピカ／＼ピカ／＼と覗のぞいて光ひかる。電光いなびかりかと思おもつたのは、其その猫ねこの目めの青黄色あせぎいろに射いるのであつた。

聲こゑも、面つらも、最もつとも慄へうかん慄かんだつた、三毛猫けねこが其それらしい。

海鼠猫なまこねこの不氣味ぶきみなのは、やがて疊たぐみから、此この板敷いたじきに襲おそひかゝつて乗のらうとする。

聲こゑをあげて、追おふ事ことは勿論もちろん、足踏あしづみして、驚おどろかす事ことも出で来きない。

老僧らうそうの、目めざとく、耳みみざとく聞ききつけて、眠藏みんざうから顯あらはれたらば何なんと成ならう。我わが此處こゝに在ある可怪あやしさは、何なにものゝ怪あやしさよりも怪あやしさに、いきなり數珠じゆずを擧あげて、得意とくいの九字じを切きつて頭あたまから打挫うちひしがう。でなければ、いたはしくも氣絶きぜつをされよう。

途方に暮れて、禮吉は聲を上げて泣かうとした。

坐つては居られぬ。下から床板は突上がる、壁からは睨めつゝ狙ふ、畳からは襲ひかゝる。

思はず渠は、横と後と下と、三方にくる／＼と舞つて狼狽へた。

が、たゞし、お楊に遇はうとする、此の心さへ斷たば、三つの悪魔も、立處に失せて退くであらうと信じたのである。

「いや、思ひ返すまい。覺悟した。」

吉祥果とて、香爐とて、みな鬼子母神のものである。其のいづれの一つを取つて、可恐き魔を防がうとしても、人妻を戀ふるものゝために、何とて靈驗あらせ給ふべき。

禮吉は、猛然として吉祥果の林の中に、生きて棲める龍と鳳にも較べつべき、二個の其の鬢油入を兩手に取つた。

手に、確と取つて熟と視た。

いかでか／＼、敵に擲つて打碎くべきではない。

（迦山淨土

夜叉龍女。）

其の一つを、進んで八々と床の端に置いて、猫の出端を遮つて、衝と退いて膽つた。

あの、目口も分らぬ、魔海鼠の化猫めが、艶かに照る藍の色を、推參な、鮑貝と紛へたさうで、ペロリと舌を吐いてタン／＼、嗅いだが、何に咽たか、クシツとはなひると、續け状にタン／＼と鳴きながら後退りに退つて行く。

壁を吃と睨め返し、床をば膝に確と踏んで、

南海慈航

水楊枝

其の一具を取つて、犇と胸、兩の手に抱いて眞俯
向けに搔伏した。

あとは雨の音も、猫の聲も、昏々冥々として、單
に、胸なる鬢油 入の一顆碧玉の如く、且つ輝き、
且つ人肌の暖を帯びて、且つ可懐しき人の黒髮の薰
を身に占めて、**＝**然としたのである。

「禮吉さん。――」

昔の此の持主なる、大諸侯の貴婦人か、お楊が、
はた世に權化影向したまへる鬼子母神の御像か、面
白皙に端麗なる、氣高き女性の、袖に鳳凰の翼を縫
へるが、丈高く立つて呼覺すよ、と覺えて、はつと
我に返ると、霧は其の像ありのまゝに、隙間を潜つ
て、身のまはりにイみつゝ、風少し出で、雨は留ん
で、猫の目の睨むと思ふ壁の穴に、空が白かつた。

いまだ東雲の雲低く、町も、軒も、雨上りの靄深
くして、人目のなければこそよけれき古寺の地内を
出するのに、脛の上まで衣をかゝげねば成らなかつた。

門の内は、唯一面の廣い池だったのである。

途中は誰にも逢はなかつた。

たゞ低い土手には、處々溢るゝばかり水嵩の増した大川べりを、四手を被ぎ網を提げて、行つたり來たり、中には腰を撓めて、流を見つめて、倒に銀河を覗く仙人の如き、頤髯の白い翁あつて交るを見て、橋の數を過ぎた。

—— お楊の駒が、其の軒を飛んだと思ふ、棟の低い藁屋の建場に着いたのである。

「鐸の緒が鳴つたから、」
「鐸の緒が鳴つたもの。」
「—— 鐸の緒が鳴るもの。」

恰も、其方なる橋の鳴る音を聞いて、再び大雨の中を潜る思ひしながら、雁來紅の赤さに、朝の日の紅の滴る露を見つゝ、禮吉は建場に憩つた。

馬もつないである。

背戸田、裏畑、前畦には、ちらほらと人の影、手を拱んで、銜煙管して、雨のあとにすく／＼と、健かなる芋の葉、首だれたる、粟の状を伺ふ農民の姿も視た。

店に居合せた老も、少きも、薪を積み柴を負つて、いづれも城下へ出る輩の、これは、白菊谷、黒部なんど、谷山の深きあたりのものではない。

向うに、鐸の緒橋を渡つた山際に、豆腐に松葉植ゑたる状に、横隈の霧の朝ぼらけに樹立の見ゆる鐸見村とて、軒をつらねた一村から出て来るのである。――平時は歸途でない、休まずに行過ぎよう、近間なる此の建場ながら、凄じかつた雨を訪ひつ、訪はれつ、互に無事だつた嬉しさを可恐さもまぜて語り合ふ。

橋を渡らない、礮ニたる石の徑は、問道の趣して、遠く白菊谷に通ずるのである。

「御飯ごはんが欲しいほい 飯めしはあるかね。」
禮吉れいきちが土間縁臺どまのえんたいに腰こしを掛かけて、先まづ何なによりも訊きいた。

「はい、炊たけました。」
と嬰兒あかこを裸はだかおんぶした女房にようばうが、うさんらしく、じろ／＼と視みながら、目めを村人むらびとに反そらして、
「昨夜ゆんべは夜中よなかから、よう寐ねられんで、雨あめもざあ／＼漏もるしな、炊立たきたての御飯ごはんや。」
と言いつた。

「御飯ごはんをおくれ、お菜さいは」
「烏賊いかと焼豆腐やきとうふの煮合にあはせたがござります、鰯いわしのぬたにな。」
「ぬたは不可いけない、其その烏賊いかと何なにか煮にたものと
お待まち／＼。」

尻しりも草履ざうりも擡もつ立てた女房にようばうを留とめて、

「酒さけはあるね。」
「へい、ござりますよ。」

「一本頼む、爛をよくして。」

「や、朝酒は媽々衆賣つてもぢや。きうと遣つたら堪らんぞ。」

「お爺、鐸の緒より咽喉が鳴るべいな。」
と若いのが言ふと、

「そしたら、身代大雨漏ぢや。」と、煙草をすば／＼。

能代の膳の、硫黄が島ほど兀げたのに、それでも奇特や、銚子と猪口を伏せてつけ、大根と其の葉を刻んだ大阪漬を添へて出した。

皿の烏賊は、焼豆腐とゝもに皆黒い。膝を寄せ状、とつてつぐと、酒の中にきもぢや／＼と足を縮めて、蒼蠅が、然も三疋。

禮吉はゾツとした。

「御飯を早く。」と言ふ。

「旦那様、御酒はどないで。」

「飲みながら飯を食べるよ、あゝ腹が空いた。」

と一口も飲まない酒を怪しまれまいとして、故と聞えよがしに言つた癖に、装つて出した一膳飯は、又箸を着ける事が出来なく成つた。

いま、茶碗に箸を取添へながら、ふと一裏田うらた越に、淺葱の空に藍を淡く、朝霧に包まれた、芙蓉の髓の如き遠山の姿を、それが白菊谷と眺めた目を、やがて箸に移すと、一點、瞳を射て、黒く衝と飛去つた蟲がある。光つて胴が細かつた。

思はず八々と茶碗を置いた。

「女房さん。」

「へい。」

「此處等には斑猫が居るかね。」

「何でござりますとね。」

あゝ、其の兀げた鐵漿も。

「毒蟲、斑猫だよ。」

「何うでございますかねえ、親仁さん。」

言掛けられた村親仁は、木の皮の胴亂を煙管でコ

ツ／＼。

「道をしへは、いかいこと居るだがね、さあ、本當の斑猫は　いや、それも時々は居りますだよ。」

「もう一膳おかはりを。」

「旦那あがりもしなさらねえで。」

「私は大食だ、――一所にして、茶漬で食べる。」

「雖然、それにも氣の所爲か、蒼く光る蟲の鬚が目
にちらついて、粒さへ唇に乗せ得なかつた。――」

「了つた　――　忘れものをした。」

「我ながら、きよとノノと立上り状に、勘定して、
慌しく冷汗を掻いて廂を出た。」

「が、手綱も結ばぬ軒の馬にも、昨夜の霧のうつり
香して、流の空の白い雲は、菊の花の面影立つ。」

「白菊谷まで何里あります。」

「はあ、五里^りてえだが、もそつと道^{みち}がのびますべ
い。之^これ、旦那^{だんな}。」

禮吉^{れいきち}が橋^{はし}を渡^{わた}らず、石高^{いしだか}な土手^{どて}に向^{むか}ふのを見^みて、
中腰^{ちゅうこし}に親仁^{おやぢ}が立^たつた。

「行^ゆかつしやるなら、はあ、些^ちと何^どうもむづかし
かんべい。」

「何^な故^げね。」
「途^{とちう}中の二股^{ふたまた}尾^{たを}と言^いふが難^{なん}所^{じよ}だかの。此^この大降^{おほぶり}で
は、崖^{がけ}がくんで危^{あぶな}かんべい。」

豫^{かね}て其^そのくらゐな覺悟^{かくご}はした。

「とに角^{かく}。――」

「之^これ、旦那^{だんな}、此^この酒^{さけ}は、御飯^{ごはん}はの。」

ニヤリとして、

「頂^{いたゞ}くべいか。」

「さあ何^いうぞ。」

「御馳走^{ごちそう}様^{さま}ぢや。」

と額^{ひたひ}を敲^たいて、次手^{ついで}に馬^{うま}をドウと叱^{しか}つて、

「難^{ありがた}有^いい　　ー　　ハイカラなお地^ち藏^{ざう}様^{さま}ぢや。」

「其^その地^ち藏^{ざう}に、狐^{きつね}が憑^ついた。」

と若い^{わか}ものが低^{こし}聲^{こゑ}で言^いつた。

水^{みづ}の音^{おと}は爪^{つまさき}先に響^{ひび}く、白^{しろ}菊^{ぎく}谷^{たに}の道^{みち}、第^{だい}一^{いち}折^{せつ}。　　ー

Let not ambition mock
their usefulness,
Their homely joys
and destinies obscure;
Not Grandeur hear
with a disdainful smile,
The short and simple
annals of the poor,

ー　　世^よに知^しられたと聞^きくグレーの此^この詩^しは、詩^し
としてこゝに記^{しる}す前^{まへ}に、要^{えう}あつて、千七^{せんしち}百九^{ひやくきゅう}十五^{じゅうご}年^{ねん}
カナダに於^おける、クエベックの激^げ流^{きりゅう}を渡^{わた}つた時^{とき}の、
名^{めい}将^{しやう}ウルフが血^ち湧^わき肉^{にく}躍^{をど}つて心^{こゝろ}も空^{そら}なる、舟^{しゅうちゆう}中^{ちゆう}の兵^{へい}

員みんをしてを冷靜れいせいを得えせしむべく、肅然しゆくぜんとしてを低唱ていしやうした
其その趣おそむきを顯あらはすために、こゝに引用いんようしたのである。

The boast of heraldry
the pomp of power,
And all that beauty
all that wealth
ere gath-
er
Await alike th'inevi-
table hour:
The paths of glory
lead but to the grave.

國くにに秘境ひきやうと稱となへらるゝ、白菊谷しらぎくだに、小黒部こくろべの嶮けん、二
股尾またをの斷崖がけにして、まさに生死しやうじの危難きなんに面めんした時とき、
色いろは紫むすひなせに似にて、(句くは)電いなづまの如ごとく、禮吉れいきちの腦裡なうりに閃ひらめ
いたのは此この一章しやうであつた。

評ひやうすべき智慧ちゑもなく、味あじふべき餘裕よゆうもなく、たゞ、
いつか學校がくかうに於おいて教をしへられたまゝに、垢あかつかず、汚よご

れず、古びず、新しく純なるまゝに、太陽に輝き、雲に映じて、たとへば A と言ふ字さへ、偉大なるピラミッドの如く睫毛に聳えたのである。

渠が足は、實際もの凄き溪流の一所、碧潭恰も藍瓶の如き淵に臨んで、何百丈とも知れない絶壁の峻急なる大傾斜に、さながら宙に釣られたやうに、手を開き、胸を反して、蛙か何ぞたゞきつけられた状に仰向けに倒れて居た。

あらず、倒れたのではない。大崩れに崩れた絶壁の、手がゝり、足の踏場のなさに、身體を横に一歩づゝ、一歩づゝ、辛うじて運んだのが、其のまゝ動かなかく成つたのである。

鐸の緒橋から上流三里。

日は正に午後である。

此處を、難所とは豫て聞かないではない。剩へ可恐いほどの豪雨のあとである。

鐸の緒の

古老が注意するまでもなく、容易く越えられようと

は思はなかつた。雖然とに角、鞍に婦人を安んじて馬の通る路である。――實は慙くまでとは思はなかつた。

それに、鐸の緒の建場から、川について、流に隔りつ、また近づきつゝして、さかのぼるに従うて、赤濁りの水は次第に灰汁に、灰汁は、やう／＼白く、白きに藍を交へて、やがて、石に激する他は、眞青に澄んだのを見るにつけても、山の奥には早や眞夜中より暁かけた雨の餘波さへなさうで、澄明なる秋空ともに、一點の懸念の雲もなかつたのであるが。

水が二條に分るゝのではない。斷崖と

絶壁と對向に流を挟んで兩岸が最も近く、従つて、山の尾根が峻しく迫つて、谷は激しく暗いほどに深い處、――

と、過り來た道程を計つて、こゝぞ二股尾と思ふあたりから、巖の根が、雨にゆるんで、槍の如き頂からなだれた土が、落重なり、埋塞いで、土蜘蛛の如く徑をば噛み、蝦蟆の如く蟠り、斑なる大牛の如

く前途に蔓る。

「何だ、此式、――」

吹降の風のあたりやうであらう。
の棧道は、日影に蒼白く静まり返つて、萩、女郎花
を咲かせて居る。

二つ飛び、三つ越え、巖も土も、しやにむに踏んで、も、うー息、もう一息、――絶えたる道も、
やがて續くだらうと思つたのに。――

踏迷ふ山路の草の丈は、分入るほど愈々高く、東
西を失してさまよふ森は、潜るほど益々深く、船を
覆す荒浪は一つは一つより次第に大きく、人を捉る
山、人を捉る谷は、行くに従うて愈々高く、愈々深
しと聞く。

崩落ちた土は、次第に大きく、次第に廣がつて、
やがて千丈の峰から切立ての豁河の水面まで、唯一
なだれの赤土の瀧と成つた。

岩を掴めば岩が抜ける。縋るべき木の根もない。
徒に土を抱いて崖に抱つき、しがみついて、行くの
でも進むのでもない 唯身體を摺らすので
あつたが、掌のあとは飛々に次第高に、荒海の渚を
傳ふ鳥の脚跡の如く、此の土雪類の断面に印した。

其の跡一つさへあれば、魔は其の手の主を捉へ、
鬼は啖ふと言ふものを、――不氣味に、薄汚く淺
ましいのを見るにつけても、越方の身の行業が、皆
淺ましく思はれて、其の一つ／＼に、生命が縮まる
やうであつた。

石よ、隠せ、草よ、包めと思ふのに、然はなく、
唯兀に兀た土に映した掌の形は、眩き日光の露骨に、
宛然皮を剥がれて、血のまゝ曝さるゝばかりに見え
る。

―― 人妻を戀ふる罪なれば。

また、しかし、其も命のあるしるしだつたであら
う。

くに見えて、崩れたる土の下に、二三輪、常夏の花
が咲残る

あの花を嚙んで死なう。

雪邑の令室の、優しき唇に擬へて。――此の

時であつた。

A wait a like th' inevi
t a l e h o u r : -
T h e p a t h s o f g l o r y l e
a d b u t t o t h e g r a v e .

渠の脳裡に閃いた。

一聯の歌を想ふ時、續いて起るのは、

恸くて溪流を漕抜けた絶壁の頂に於ける戦の銃聲で

ある。――

名將ウルフは敵弾に倒れた。

其の瞬間、部下が、

「ゼイラン。」と叫んだ。

「フウ、ラン？」

將軍は倒れながら、聞いた。

「エネミイ。」

走るは敵の軍である。

「退路を扼せば。」

言ひ終つて將軍は瞑した。

此歌の一節を知得た渠の幸は、戀に死ぬのに、恰も世の名將と同じ光榮を有する特權を獲得したのである。

あの花を含んで死なう。

雪邑の令室の美しき唇に擬へて

銃丸に胸を射られた、それに較べては、寧ろ罰の當るばかり幸福である。

The boast of heraldry
And all that beauty
v e .
all that wealth e'er ga

渠は唇邊に微笑した。途端に不思議なものを見た。

小原女頭にあるやうな柴の束が、二つ、碧潭の其處に、靜に、幽なる渦のある上を、スツ／＼と舞ふのである。

眞白な蝶が、ひら／＼と其の上に戯れた。

其が、遙なる我が足の下の谷底とはなしに、仰向けに倒れた遮るものゝない遠き地平線上の雲端に描かれた。

「枕は

彼處に。」

思ひ切つて、崖へ落ちようとすると、杭に結へられたやうに身體が動かぬ。――確と土に突立てた杖に、手を縋つて居たのであるが、離さうとすると、我が手ながら離れない。いままでの生命の執着が、拳に籠つて、凝つて、粘つて、指が杖を離れようとしないのである。

「浅ましい。」
が、離れない。

秋は深けれども、正午の太陽は赫々と赤く面を焙る。
皮は煎りつきさうである。

頭腦はキリノと疼む。
舌は鉛のやうに乾いて粘る。

小砂利が、土まじりに、ざら／＼、ざら／＼、ざら／＼、ばら／＼ばら／＼と、緩く、静に、殆ど同じ間を置いては、絶頂から崖をこぼれて、目、口、鼻、耳に掛るのが、拂うても、振つても、留まない。昔、水責の水を一滴づつ、やがて腹の膨むまで唇に滴らすかと言ふ、それは水、此は砂利と土である。ざら／＼、ざら／＼、ばら／＼ばら／＼と緩く静にこぼれて、鼻、口、目、耳に入る。

何時間、幾月、幾年　　――　　續くやら。
渠は死ぬにも死なれない最後の業苦に戦慄した。

「口惜しい。」

齒嚙をした齒が、口を埋めた砂利だらう、バリと噛むと、毒矢で抉らるゝやうにギリ／＼と疼んだ。

「むゝ、無念だ。」

自棄に満身の力を籠めて、両手で、杖をひし折つて、淵へ飛ばうとした、頭から胸へ、空から眞黒な影が覆被さつたと思ふと、目も口もあかない眞暗な身體は、ふはりと宙へ浮いて、足が離れた。

鷲に攫はれたか、天狗に掴まれたのであらう。
身も心も空に揚つた。

耳を掠めて、ぶん／＼と、ものゝ響くを、風の音よと聞くうちに、いつか、絲車の聲、綿を引く音に聞做された。

綿をひく、あの白い綿を、一つまみ、ぶんと引いて、白い絲を、ぶん／＼ぶんと繰る。

其の絲車は、煤びに煤びて、綿をつむ指が黒い。

其の指は、婆々の手で、婆々は白菊谷の甚兵衛爺さんの老母らしい。

と白い綿は、一つまみづゝ、禮吉、渠自身の頭髮から抜けて、婆々の手にかゝつて、ぶんと伸びて、一筋ぶん／＼ぶんと車に搦んで、する／＼と輪に廻る。

又一條、また一條、

それが、耳からも出れば、鼻からも、口からも、絲車の引くにつれて、する／＼する／＼と寸切ない。

見る／＼苧環が雪が積むやうに白く成る。

我は蠶に成つたか。

否、煮られては居ない。

蓮に成つたらう。

然らば極樂に生れた。

手を舉げても、朦朧として、白蓮、紅蓮は、素より、黄なる苔にも見えない。

須臾しほちゆうにして、渠かれは猛然まうぜんとして叫さけぼうとした。
が、聲こゑは出でない。

「あゝ、白髪しらがに成なつた。

あまりの心痛しんじう

に、一瞬しゆんじ時にして、「
と思おもふ／＼、昏々こん／＼として前後ぜんごをわすれた。

深山の謠。菊枕。戀の訝。

六十六

白菊、黄菊、なあ、小菊。

こんな晩には、なあ、小菊、

兎と猿とが、なあ、小菊、

餅と酒とで、なあ、小菊、

遊ぶぢやねえか、なあ、小菊。

お前と俺も、なあ、小菊、

遊ぶぢやねえか、なあ、小菊、

白菊、黄菊、なあ、小菊。

鄙びた、里びた、稚兒の聲々、三四人、手を拍い

て、唄連るゝやうに現に聞いて、夢、夢、夢と思ひ

つゝ、禮吉は又我を忘れた。

白菊、黄菊、なあ小菊。

こんな晩には、なあ小菊、

唄を意識しつゝ偶と我に返つて、生命を心付いた

と同時に、ちら／＼と瞳に映つたのは、果して眞白な耳許の髪の毛であつた。

枕して、横に寝て居る
其の鬢が、いま
苧環の白絲を、其處に積んだやうに堆いまで、皆白
い。

果せるかな、白髪に成つた。

と思ひつゝ、信じつゝ、甘い、温い、香しい、綺麗な涙が、はら／＼と溢出た、
枕も浮くばかりである。

渠は、嘗て心に誓つた、罪ほろび、業滅して、髪盡く白きに到らば、美しき人妻にまのあたり、其の戀を語る事を、世も人も許すであらう。

生死は知らず、心も容も、將に其の時が來たのである。

お楊さんに逢ひ得る期が至つたのである。

浮くばかりの嬉涙に、磐石の如き頭も経く、ふと寝返りした時、枕頭に煤けた行燈が目に着いた。

「あ。」

燈を辿ると、霜を積む頭髪と思つたのは、白菊の花を枕に敷いたのである。――花の明は、端嚴なる、清麗なる人の面影の如く、漆のやうな天井に映つた。

「あゝ、菊の花。」

「はれ、お氣が付かしたゞかあ。」

と、聞きも及ばぬ聲して、衾の裙の方に、ごそ／＼と音がすると、ごそりと起きて、膝で摺つて這ふやうに顔を出したは、古手拭を頭に巻いた、老の顔。

「見も知らぬ姥であつた。絲を繰つた婆々とは違ふ、皺びたが、色の白い、」

「坊様、ものを言はしつたかいの。」

「菊、」

「菊、」

「とばかり息、」

の下で渠は言つた。

「はあ菊でござるぞ、菊でござるぞ。」

と優しく笑傾けて、

「――白菊谷でござるぞ。」

「――」

「安心さつしやりませ、お氣は付いたぞ。はあ、御免され、年を取ると、夜さは太う頭が寒うござ

つての。」

と手拭をくる／＼と解いた。祖母子齧に結つた、

殊勝げな。

「媪さん。」

と思はず言つた。

「おほ、坊様。」

略推するに便宜あり、
白菊谷と聞いた

れば。――

「僕は、私は何うして此處へ來ました。」

「最惜げに、二股尾の崖で倒れて居さつしやつたさうなげな。猪とも穴熊とも、山坂を駈ずり廻る、

私許の忤がの、甚次郎でござるがの、負うて、此處へ連れ来ましたぞいの。」

驚かと思ひ、天狗かと迷つたのは、――再び生命を救はれた、身代りの少女觀世音、霜ちゃんの其の父であつたか！？

――禮吉は身を擲つ如く、どたりと膝に縋つた手を、白菊の花の上にして、姥を頂くが如く熟と視た。

「此のお家は、媪さん、私に取つては神様です、佛様です。」
と聲も弱々と言つた。

「やれ、も、勿體ない事をや。」
「お禮の申上げやうもありません、
間は、いま何時頃です。」
時

「油の加減を御覽じやれ。」
と行燈を少し引寄せて、
「子の刻でござるよ、の、
油皿がちう

／＼と鳴くぞいの。」

と小兒をあやすやうに莞爾して言った。

「あゝ、子の刻、」

「それも下刻での、やがて一時でござるよ。」

「眞夜中だ――私は息子さんに、然うやつて助けられて、何時頃此處へ來ました。」

「然ればの。」

「先刻　いま一時だとすると、それでは

宵かも知れない。小兒たちが唄を謡つて遊んで居ましたね　白菊、黄菊、小菊と言つて

「

「おほ、喧しうて、お耳づらい事ぢやつた、内に小兒はなけれど。」

姥は何も思はない顔して言つたが、聞くものゝ頼には熱い涙が傳はつた。生きてあり、三

十路を五つ六つでも、霜ちゃんは、――家に、唯一人の小兒であつた。

「否、唄を聞いて、菊が咲いたやうでした。」

と禮吉は且つ其の少女の靈を想ひながら、

「然うすると、寢て居て、あの唄を聞いたんですから、あの前に、此處へ連れて來られたんだと見えます。」

姥は頷きながら、もつけな顔して、

「はれも坊様、お前様は病氣悪うて、夢中で何も知らつしやらない、小兒が唄を謠うたはの、あれは昨日の晩方ぞいの。」

「昨夜ですつて、」

「なう、坊様、こんな奥山の兒どもたちはの、町方のやうにはござらぬ。不精で皆氣が重いで、三人も四人も連れて、手を拍いて唄ふやうな事はの、月に幾日もござらぬよ。」

木菟の飛びやうや鳴きやうと同じでの、お天氣の模様にござる。晴れる時とか降る時とかの。昨夜の唄は、月夜ぢやつたが、霧の裡で、あれは雨に成るのでござる。今日はまだ降らねど

も曇つたその、明日は降雨でござらうよ。坊様が来
さしつてから、小児の唄うて遊んだのは、昨日の晩
景だけぢやでの。」

扱は、見る／＼うちに白く成り行くと、疑つた髪
も、絲に繰らるゝ一條に、少くも二十四時を経て
たのであつたが。

「而して、眞個に、私は何日来ました。」
「坊様がござつてからの、今夜で五つ寝ました

よ。」

「五つ寝た、――六日間、
渠は愕然として目を二つた。」

「まあ、其の間、あゝ、重ねて御禮の申しやうも
ありません、どんなにか厄介に、嘸ぞ手厚い御介抱
を頂いたらう。全然お庇です。――しかし、よ
く生命があつた。――起きます、否、起直るぐ
らゐ何でもない。不思議に気分も判然し
て居る。媪さん、親身も及ばない御看病
はもとよりの事、薬も頂戴した事だらうね。何にも
知らない、些とも覺えない。」

「一時はの、えらいお熱でござつたよ。」
「然うですか、何しろ定めし、大變なお手数を掛けたらう。」

「いんね、さして苦しみはなさりませんで、私等が方では、何うして上げう事もないほど、手は些とも掛りはせねどの、唯、うと／＼うと／＼と、正體もなう寐てござつて、其が太い心配なで、爺様と額突合せて、溜息を吐いたぞいの、」
と言ひかけて、姥は深い呼吸した。

「こんな山家でお醫師はなしの、町へ出ようにも、二股尾が塞がつたれば、瓶に蓋をされたも同じ事で、あの崖へ道がつくまでは、お城下へは手足どころかいの、息も通ひませぬ。坊様は小さい時ござつて知つてゝある、内の婆様が拵へて置かつしやつた、何やら、草を乾集めた煎薬が、お佛壇の抽斗に藏つてあつたで、其をば煎じて進ぜましたよ。」
い口をして、坊様は夢中で飲つた。――あゝ、最惜げな、二昔前に、こゝへござつて、お母様と寐さしつた時を知つて居る。最う乳はまる

らねど、貴方の懐に、おいしさうに、唇をつけて、
寐ん寐してござつたものを、
薬が苦からうと、最惜うての。」
「無、はい、

禮吉は濕んだ聲して、

「いや、苦くても澁くても、其の薬で助りました。」

「坊様や。」

と坐つたのを片手つきに、前へ出て、

「薬もの、薬ぢやけれど、其の、菊の花が、
お病氣によつ効いたと思ひますぞの。」

「え、枕にして居ますね。―― さあ、屹と

此も利いたんです。此處の清水は神業のやうに萬病
に効くと言ふから。」

「其が、私等は、鈍な事で、清水は病に効きま
すだで、飲みも、つかりもしますけれど、菊を折つ
て

と言ふ

唯、折つてと聞く、折る時の、其の香が芬と、いま薫つた。

「それを枕にさせます事は、根つから氣が付きませなんだぞ。處にの坊様、あなたの枕に敷かせてと、幾度も取替へて、其の菊を下さつたは、毒蟲の療治にござつた、爺様がおともをした、えらい、美しい奥様でござるその。」

今こそ生命が惜かりき。――

渠は堅く胸を抱いて、

「其の方は？」

「はい？」

姥が、いまの聲の低かつたのを訊返すと、

「其の、私をおぶつて来てくれた、其の息子さん

は。

と問返した。

「あれかいの、那はの、谷の若衆たちと、皆で、二股尾に小屋掛して、崖崩れの路を切開きに行つて

居りますわの。」

「お爺さん。」

お爺さんは？」

「はあ、爺様は、日のうちは内に居てぢやが、夜さりはの、奥様がお寂しいで、庄屋様の納戸へお伽に行てぢやよ。」

「庄屋様。」

と言ふうちに、其がいづれにせよ去ぬる年の、おなじ菊月夜の、我母の浴を思つて、豪健にして老實なる甚兵衛の伽の用意を、ひとり密に頷いた。

さり氣もなき姥は、

「庄屋様言つても」

町方で、何か、利益

づくの間違から、家中、北海道へ行かしたつての、村に一つあつた白壁の藏も潰れて、がらん洞の立腐ぢや。それは、たゞ廣い處になう、奥様お一人切で、何うにもはい、お寂しいで、爺様がまるつて居りますよ。その爺に、菊の花をこつづけて持たして寄越さつしやるだよ。」

「遠いんですが、其の家は？」

「村では、私とかが何處より近うての、背戸つきで、些少の鄰家でござるよ。森、樹立はあれども、雨戸開けて透いたら、日影も見えようず。えらく、坊様の鹽梅を心配さつしやつて、爺様の言はつしやるには、夜さり水を浴びに行かつしやる時、毎晩のやうに、立つて視めてござつたげなよ。尤もの、御病氣ゆる、誰にもお逢ひなさりませぬ。私もまだお顔は見ぬぢやよ。爺様がお供して来て、内へ置きますにも、男どもや、女衆にも、斷つて覗いても成らぬと、堅う言ひつけさつての、それぢやで、此處にござつた時もの。」

「此處とは、媪さん。」

「はれ、坊様を寝かしますにつけて、奥様をあちらへ据ゑたで、一夜は此の佛間にぞいの。」

「媪さん、嗽をさして下さい。」

「起てます、いや、大丈夫、起てる。」

「其の勢でなう、坊様や、此を一口まゐらつしやれ。墓から蘇返つて、ものを言はつしやるやうな氣がするでの、先刻にから、心では思つても、進ぜる間がなかつたぞいの。」

と眞黒に燻つた、が、鼎にも紛ふ鐵の火鉢は枕許に置いてあつた、小鍋を掛けた五徳の下へ、十能から火を移しながら、姥が乗掛るやうにして元氣附かして言つた。

此の燻は――いま、犀吉が我慢にも褥を起つて、出居から土間へ下りて、下男らしいのが二人、ごろんと寝たのを見ながら、何處ともなく通ひくる、菊の薫、水と霧の香。香に連るれば、廐の臭さへ可懐んで、筧に嗽いで、蹠踏しながら、佛間なる間に歸るまで、附添つた姥が、立次手に大圍爐裏から、櫓の埋火を一しやくひ、赤さも鮮かに搔起して來たのである。

「塗盆の茶碗に、湯氣を立て、装りながら、

重湯ぢや。まゐれ。はれ、おいしさ

うな、なう、いゝ鹽梅と言つたら、坊様は夢中で、ちゆう／＼吸はしつたが、何ほども食らぬで、残りをは頂いたがの、とんと甘露でござるその、私なぞが拵へたものではござらぬ。皆の、奥様がお手づからぢや。」

禮吉は恍惚するまで、膝の上にと取つた白菊の花の一輪と、一碗の薄い粥を較べて見た。

「媪さん、眞個に？」

「眞個とは、何がぞい。」

「其の方はね、大層な御大家の方ぢやあないか

――自分で、粥の煮炊なんぞ。」

「何がいの、大根刻むから、米磨ぐまで、何でも貴女がお手づからぢや。――まだそんな事かいの、彼方への、住居を替へさつしやるにつけては、疊もほんの三疊か、四疊、お膝容れさつしやるだけを、私等が許から運んでの、鍋も吸子も間に合せぢや。おほ、ほんとに、此の土鍋も一つも

の、あなたが、炊いてめしたあとで、別に煮さつしたものを、例のやうに、坊様にと申うての、晩ほど

爺様に託けて寄越さしたものでござるよ。

さ、まゐれ。」

禮吉は一禮した。

「おゝ、おいしさうに、よう、まゐるぞ。

それまゐつたら、木登りも戦も出来る。

まだノ、そのくらゐな事かいの、鈍な私等に
は、分別も、智慧もなけれど、白菊の清水を汲んで
来て、それで手拭を絞つての、お頭や胸を冷す事か
ら、隙間の風を塞ぐ事まで、の、雨戸小窓の破めを
の、新しう貼つた紙を御覽ぢやい。」

皆白菊の影ならずや。

「塵紙でない、反故でない、こゝらに、そんな紙
はござらぬ。皆の、貴女様のお心遣ひぢや、頂いた
お目録を包んだのも張交ぜたぞの。」

禮吉は俯向いて、黙つて聞いた。

再び一禮して腕をかへつゝ、暖まる掌に、裕の上

から胸を撫で、

「媪さん　ー　私に、そんな御心配より、肝心、御自分の、其の方の御容子はどんなです。」

第一、清水を浴びると言つて、風呂でも沸して入るんですか。」

「ぢかに、の」

「直接に？」

「尤も、其の方がの、何よりもよう效くので、風呂は可厭とおつしやるで、おつしやるまゝにしてあるがの、晝の中は、何として、夜も、此の少ない家數も、何處も寢鎮まつてから、お一人で浴すさうなよ。」

「勿論、一人、それは一人に違ひないんだけど、水でせう、此の寒空に、どんなだらう。」

「其が奇特ぢや、此の谷の白菊清水に限つてはの、思ひ切つて身體を浸れば寒の冬でも凍えませぬよ。」

「おほ、然うですか

其のくらみな事は

あらうし、そのくらみな事はなさるだらう。

そして、毒蟲のかぶれは、どんな御様子だが、

知つて居ますか。」

「薄紙を剥ぐやうに、」

「あゝ、薄紙を剥ぐやうに。」

「一日まし、其こそ、ほんにノ、玉

を包んだ薄紙を剥ぐやうに御本復ぢやげな、私にさ

へ、爺さまは委しい事は言はぬけれど、斑猫の毒も、

やがて、なう、蚤、蚊のあとぐらゐ消えたであらう

ぞい。

「嬉しいな、

難有い。」

「渠は、寂然

として、深夜、風の聲もなき山靈に感謝した。

揺るゝは、其處に、――手をおいた、菊花に

さし添ふ露である。

「媪さん

砧かい。」

「あの音は。」

「聞えないかい、

静に、いま、トン、

トン と。」

甚兵衛の老女房は、ト小さな祖母子鬘を傾けたが、
頷き／＼聲を潜めて、

「透見をするさへお厭ひなさる。お噂するもお可
厭ぢやろ。高い聲では言はれませぬがの、

御道理にござる。まだお寐らぬと見えるぞ。

あの音はの、奥様が、時々、お煙草をめすので、
トン／＼と。爺様も吹かしますがの、直

ぐに知れるで、ガチガチ／＼ぢや、音がせねば、掌
へころ／＼でござるよ。」

と皺の中で打笑つた。

それでない、言憎かつたに、串戯ら

しい笑ひにつけて、

「内に煙草はあうりませんか。煙管もない、私も
喫みたい、媪さん、巻蓑も何も持ちませ

ん。」

「おゝ、煙草はあるがの、煙管は胴亂ごと爺様が、

悴は喫まず、

と案じたが、袖なしを着た背筋で、ほく／＼、

「はれ、あるぞ／＼、

と立しなに、

「坊様、暗かる、燈心を増さつしやりませ、行燈

の抽斗に。」

「分つた。」

と、心安だてを、嬉しくうけて、其の抽斗をぬき
掛けながら、手を留めて、耳を澄した。煙管の音は、
フト今留んだが、胸の動悸はトントと高く響いた。

ぢいと、油が煮えつゝ暗く成る。

「お口には合ふまいぞ。辛い處へ、此の荒きざみ
は、爺様が痰持ゆゑ、用心に、菊の葉も小枝も乾し
て切込みますで、
煙管は先の婆さまのぢ

や。」

と言つた。

禮吉は吐むねを衝いた。

此の煙管で飲む煙草の煙は、數萬の蟲に成つて耳から出よう、むかしから、あの可恐い婆の煙管の、長い羅宇は眞黒で、魔の持つ杖に髣髴である。

「難有う、緩り頂きます。

媪さん、何

うぞおやすみ下さい。

お年よりを、こん

な夜更に、

「

「何のいの、まあ。」

「いや、實際、お氣の毒で胸が疼みます。尤も、便るものは、媪さんたちのほかに、石も木の葉もありません。何處か不快ければ遠慮なく起しますから。」

山家の人は、すぐもろく、

「そんなら、御免蒙るその、鼠が出ても起さつし

やいよ。一寸行燈を、

と油を増して、燈心を添へる手の影法師。あの婆ならば凄からう、が、此の姥の其の伸びたる爪も、蓮の實に見えるのであつた。

「御免され。」

と、ごそりと寢床へ、此方の裾を枕にして、敷居越の次の襖際、ちゃん／＼も脱がない看護の眞心。

我に何等の徳ありや。藍子は悵然として端坐した。

弱つたのは煙管である。

偶と、抜きかけた行燈の抽斗を覗くと、鋏、針、絲屑など亂れた中に、玩弄品の簫の笛。ばらりと壊れたのが目に付いた。

「あ、霜ちゃんの、
嬰兒の時の、」

持つたまゝ、袖ぐるみ、ひたと雙の臉を蔽うた。

「霜ちゃん。」

鼻をつまらせ、

「御免よ。」

其の小枝さへ、乾かして刻んで交ぜたと言ふ。

我に一服を給へ。と念じて、菊の葉を巻いて、笛の尖へ喇叭を挿して、煙草をうめつゝ、口許

を夥度吸つた。

煙は水の如く涼しく通る。

トン、トン。

同じ音がする。先刻と同じ音がする。
渠は、拂かうとして、逡巡した。

トン。

此の時、此の夜、山國中に唯一つ、お楊の雪の手
が動くのである。

また猶豫つた。暫時して――

トン、トン。

鐵の火鉢に密と當てた。

トン、

訝がするか。

彼方より

毬いがの嘲あざけり。關手券せきてがた

六十七（一）

小雨こさめながら、しと／＼と、宵よひよりして小留をみのない夜よであつた。

夜更よふけて姥うばの寐静ねしづまつたのを伺うかがつて、禮吉れいきちは寢床ねどこを離はなれた。――尤もつともそれまでとても、枕まくらについて居ゐなかつたのである。例れいの大きな鐵火鉢てつひばちを前まへに踞うづくまつて、恐おそる／＼あの煙管きせるの音おとを立てたが、其その最初さいしよの時とき、次の夜よる。――二夜ふたよがほどは、幽かすかながらお楊やなぎの方ほうからも、それとなく應答おしらひがあつたのに、
やがては、何なんの響ひびきも通かよはなく成なつた。惟おもふに、
心こころあつてする事ことを、彼方かなたで悟さとつたものであらう。

恚かくと知しつては憚はげらねば成ならぬ。が、せめても煙管きせるの音おとの、それさへ通かよはないのは、脈みやくが留とまつたよりも心細こころこぼい。

甚兵衛も、姥も、容體を憂慮つて、日の中と雖も、
まだ外出を許さない。昨日今日。我意に
此を強ひる事は、其の姥より、爺より、あれまでに
人目を厭ふお楊に對して、廣い背戸、深い樹立を隔
てゝ居るとは聞くものゝ、其の枝から烏に成つても
覗いては濟まないまで、自ら謹まれたのであつた。

が、然うした身に、夜半は天の慈悲である。――
人知れず、忍んで様子が伺へよう。

姥が寝た暗い納戸の、襖際へ行燈を密と摺らすと、
持つて立つまでもなく、其の向うが廣い出居で、爐
が仄な明に映る。と其の爐端に、煙のやうに坐つた、
悄乎した婦の姿があつた。ふと露野に似たと思つた、
が、其のまゝ消えた。家のかゝりが過ぎ
にし夜、前塚田圃を彷徨つた時の權九郎の住居に似
て居たゝめの氣の迷に相違ない。

萱の軒の、雨垂の寂しさ

矢張り爐縁の其處に、人あるが如く、悚然と、身

をすくめながら土間へ下りると、勝手は覺えた。

嗽、手水は此處である、水槽の傍は、もう戸も何もない一方の其處が出口で、此の山家の脇腹のやうな處から、顔を出すと、霧雨が早や面を包む。

薄鼠、――いや、鼠とは言ふまい、馬のために）灰色に見えるのは厩で、手許に暗いのは納屋である。

唯、ごん／＼、二つばかり羽目板に當る、ひづめの音、

「あゝ彼に乗るのか。」

母に抱かれて、ともに鞍に縋つたより他に、乗馬に何の經驗もないのに、思はず、そんな心が起きた。また不思議に、母と言ひ、お楊と言ひ、此の奥山の谷に来るものは、二度が二度とも駒の上だつたからである。處で、手綱を解いて跨りさへすれば、鐙の緒橋で馴染の駒はあの鼻頭をむくと擡げ

霧を蹈んでひらりと出る
自然に、約束
事で、其の行く處は白菊の清水であらう。

此の山奥の眞夜中に、ひとり莞爾と微笑んだ渠は、
忽ち仙骨と神通を得たるが如く、身も心もふは／＼
と空に浮いて、疾く既に意氣は森々たる樹立を呑
だが、忽ち取つて投げられたやうにドサリと納戸の
前に落ちた。

「否、然うでない。蹴殺されるのかも知れない。

あの馬に――

さつと白髪しらがの葉はを分わけて、面つらも脚あしも一所しよに荒馬あれうま
の飛出とびだす棕櫚しゆろの樹きはなかつたが、彼かれは胸むねを張はつて、
八はたと居あて、少時しばらく、其處そこに踞うづくまつた。

で、血ちは、燃もえつゝも體みうちは冷ひえる。病後びやうごの皮ひ膚ふは
雨あま濕しめりに久ひさしくは耐たへ難がたい。勇氣ゆうきをば奮ふるひ起おこしたが、
時ときと言いひ、場ばしよ所じよと言いひ、其その所業ふるまひの目め的あてと言いひ、心こころ
の惑亂わくらんする事ことは、――納屋なやの古壁ふるかべに掛かけた蓑みのを
取とるのが、怪あやしく大おほきな翁おきなの面めん、長ながく土つちに垂たれた白しろ

い髯を抜くやうであつた。

固より黒白も分らぬほどの暗夜ではない。

幾日の月か、其の大空の影を、雨雲が立蔽うて、
唯一面に粉のやうに降つて居るのである。

菅笠はまだ冠らず、横に抱いて小脇に取つた、づ
ぶ／＼と濡透つて霧に厚ぼつたのは、月夜茸とか
稱へて、大きな笠で一莖立つて、恚うした夜は、人
の前後を照すのが、蓬しき山谷の中に生ふると聞
たに髣髴である。

衝と入つて見れば、笠を被つて支へるほど狭くは
なかつた。

渠の迷へる想は、天馬に乗じて空を架す
る其ではなくて、何うしても蹴殺される方へ落ちさ
うだつたゝめに、廐の前を通つて、其處が一條の山
道らしい、戸の表へ出る事を憚つて其の廐と、此の
納屋の間の、柴、薪、藁などを堆く積んだ、たとへ

ば廂合のやうな中を抜けて、背戸の方へ出たのであつた。

言ふまでもなく、お楊が住ふと聞く、庄屋の屋敷あとへは、また此の方が近いのである。

裏は、すぐに崖だらうと思つた。けれども、背戸は割合に廣い。目立つほどの樹立もなく、切展かれて、一方に、其の庄屋のであらう、黒々と森が見える。

星とも言はじ、螢ほどの燈の影もなく唯寂然としたのに、立迷ふ霧がむく／＼と、幹に枝に高く深く重なり積んで、恰も城の石垣を築いたやうである。

渠は茫然とした。

煙管をたゞく音と音とは、砧同士、壁一重に近いやうに思つた、お楊との間は、市街に於ける其の館よりも尚ほ遠い。

凡てが夢に成つたやうに、茸立ちに、とぼんとして一人立つて明す目に、フト怪しき巖の如く映つたのは、低い藁屋根の出先にぶら下つた、――あの天神橋の山裾なる立腐の酒屋の軒の杉林を思はせる、が、非ず、大きな蜂の巢に似た風呂桶であつた。

渠はきり／＼と五體が緊つた。

亡き母の浴の姿。

しかし、其の同じ風呂ではあるまい。二昔あまり前の事。

其でも近づいて見ると、板は裂け、たがは外れて、殆ど使用に堪へなさうなのは、後に別なのを整へて、此は其の時のまゝなのを、まだ斧に當てゝ焚かないで置くのかも知れない。

此の兎ほどの小僧が、白菊の胸に抱かれて、

場所は、清き流に沿つた白菊の叢の中であつた。

こんな納屋の裏ではない。

とすると、然うした景色の處まで、風呂を持運んだものであらう。

何となく、心覺えの路が見える。 甚次

郎が提燈つけて、落葉を分けつゝ送つた時の、――
扱は其處が、音に聞いた白菊の清水に違ひない。

行け。

笠を取つて、被らうとして、しと／＼と桶に点滴る雫を聞いた。

桶の裡には、我がための甘き露、清らかなる乳が
湛へられたやうに思つて、小雨と／＼もに涙が流るゝ。

その、ものゝ可懐さ。 こぼれ積つた松

の枯葉を分けてい風呂桶の蓋に手を掛けると、べた
／＼と貼つて指に擲んだものがある。

布を貼つたやうな夥しい、蜘蛛の巣で、納屋の其
の屋根裏から、崩れた壁を斜に、蓋を閉ぢて、いや、
したゝかに貼つた。

「畜生。」

口惜しさうに呷くと、齊しく、圓い笠に角を立て、颯と横状に搔切ると、縛るゝ蜘蛛の圍が笠に絡はる、絲の切めを、パリリと散つたのは、色の黒いまで眞紅なる一枚の木の葉である。

先刻から、散るにも、揺るゝにも、目に立つて動いたものは此ばかりであつたらう。

掌に据ゑて熟と視た。

――母が與ふる關所の手券、――

「可し！」

此さへあれば、魑魅も、魍魎も、木精も地鬼も、神秘なる白菊谷とて遮るものは、よもあるまい。

緋葉を霧に灯す如く、掌に取つて、心覚えの、夢のやうな、路を辿る。然るにても便なさに、成りたけ森に寄つて、樹の根を傳ふと、霜にあとつけるやうな、縦横に、ぴた／＼と足痕に残つて不氣味である。

それに交つて、栗のいがの落ちたのが、笑ふか、
嘲るか、憤るか、口に霧を含んで、ぶつ／＼と泡を
噴く。

「手券を視ないか。」

餘裕を示して、片手を懐にしたのに、觸つたのは
煙管に使ふ簫の笛。

笠には蜘蛛の圍、 さゝ蟹の絲、

こぼれ松。

手に緋葉。

いで歌枕見るための、大宮人の意氣がある。

「鼈笛吹き

猿唄ふ

稻子丸は拍子打つ。」

思はず口のうちに打吟んだ。

廐の裏を、斜に廣く切つて、森について、外へ一

廻りして、路らしい、雨に艶ある土を踏みつゝ、門のあとを左右に樹を分けて、奥深い庄屋の邸の表構を望んで、やゝ反抗ふ如く蓑の肩を聳した。

が、何の！
角ある芋蟲の類に過ぎない。

城の天守を遙に下つて、中間小ものが、酒とも言はず、豆腐を買ひに行く形に似て居た。

頃刻すると、踏む足、這ると知りつゝ、虚氣と故と、這つて、蹠踏めくばかり、酔つたやうに、ほんのりと、爽かな、清い、深い薫に包まれた。

雨も匂つて、蓑に颯と香が立つ。

一際狭くなつたが、左右の崖は一面の菊である。包んだ霧も、白菊の花が空に咲いた風情である。

渠は恍惚として立つて、我が両方の袖をばさすつた。

蓑の毛は、一條づゝ、皆菊の花弁である。

静しづかなる流ながれの音おとに、吃きつと我われに返かへつた渠かれは、前途ゆくての眞ま
向かうに、白しろい山やまの裾すそに面めんして、地ちのやゝ展ひらけた處ところを
視みて、ふと其そこ處こが、あむかしの昔むかし、母ははが沐ゆ浴あみした溪たに河がのへ
りぞと思おもふと、胸むね、肩かたの雪ゆきなす姿すがたに、憚はげり、恐おそれ、
恥はぢ且かつつ謹つしんで、――一度ひと目めを閉とぢた。

が、忽たちまち其それも、隔へだたつて、幻まぼろしの其その面影おもかけを秘かくす如ごと
く、其そこ處こに人ひとの姿すがたを視みた。

愕然がくぜんとして、一歩ぼ退しさつて、霧きりに映うつる我わが影かげかと疑うたが
つたが、其そのまゝ消きえないのに、瞳ひとみを凝こらすと、同おなじ
衰みのを被きた姿すがたの人ひとなのである。

白菊しらぎくの蓑みの。清水しみづの調しらべ

六十八

庄屋しやうやの方かたには、別べつなる道みちがあつて、崖がけの裂さけめを
前途ゆくてへ横合よこあひから出でたらしい。

其その人ひとは、白菊しらぎくの露つゆ増ますほどの雨あめにも、堪たへやら
ぬ状さまに、なよ／＼として前さきを行ゆく。

我わが影かげでない證しるしに、其その裾すそを見みた。蓑みのを漏もる夜よるの
色いろは、臃氣おぼろげながら、土つちを踏ふむ踵かかとの雪ゆきを欺あそむく白しろさよ。

清水しみづに赴おもむくお楊やうでなくて、霧きりを逍遙さまよふ仙女せんによとは誰たが
思おもはう。

ー ー お楊やうさん ー ー
たとへ、其その聲こゑが、我わが生命いのちの最後さいごともなれ、思おも
ひ切きつて呼よばうとした。

「待まて
其その姿すがたである。」

我は茨に依る稻束にして、彼は柳に掛けた桂にも
せよ。同じさも同じ、蓑蟲にも鶉にも似て、二股尾
の淵に浮いた、二束の柴にさへ紛ふものを、――

あはれ、我が知る限り類へんものなき、恠くまで
美しく、恠く人品に、氣高く、たをやかなる麗人を、
鶉、蓑蟲、柴、なんどの、此の姿にて相見えんは、
餘りといへば心なく、且つ可憐しい、

「誓つて

また逢ふまで決して死な

い。

渠は猛然として踵を返した。

早や霧雨が立籠めて、我が容さへ覺束ない。唯、
残惜さに、菊の葉ずれに身を潜めながら、振向いて
見る時――お楊は山の根に巖其のまゝに刻まれ
た女神の像の如く、すらりと黒髪が見ゆると思へば、
肩を、こつて、ずるりと蓑が落ちたのである。

禮吉は戦いた。

「えゝ！」

幾萬年を経たる後には流星と相觸れて、世は碎散
つて滅ぶとさへ聞く。人が人と接するに、

何程の事があらう。

禮吉は、星の飛ぶが如く引返して衝と寄つた。
霧を衝く衰は蒼く燃えた。

背後状に聲を絞つて、

「お母さん。」

と言つた。

「奥さん。」

と言つた。

「姉さん。」

と言つた。

「お楊さん。」

と言つた。

片褻、清水におりしなのお楊が、とき掛けた帯を
すつと手操留めて、背後向きのまゝ、すらりと菊の

中に立直る。

「案山子です。」

と言つた時、土とも、草とも、も心得ず、渠は蓑の袖を折つて、笠のまゝ膝を支いたのである。

世にも優しき聲して、

「禮吉さん。」

「御病氣は？」

「お加減は？」

と、肩に幽に息をしながら、熟として、靜に背を向けたまゝで言つた。

「えゝ、貴方にお目にかゝられさへすれば、生命なんぞ何うだつて構やしません。」

「お顔を、お楊さん。」

巻けりや、束ねたりや、結べりや、知らず、ほのかに白き横顔の清らかな耳許に揺れつゝこぼるゝ黒髪ばかり、白菊の裡に揺れつゝ薫つた。

「お楊さん。」

膝で伸上つて、犇と取つた其の片袖は、一面の菊の叢に、却つて薄青く映つた。羽二重の白い練衣、神聖なる清水に浸るための用意と見える。が氷のやうに冷たかつた。

そして、胸高に細腰をしめた、朱鷺色の伊達巻の解けかゝつたのが緩く、雪の柳の枝のやうな肱に、袖に、する／＼と掛つて居る。

其の黒髪は かゝる時、島田髷、圓髷ではよもあるまい。が、一輪の白菊、然も銀の高彫の平打の簪を、近るやうに插したのが見えた。

目の幻覺に相違ない。

世に生れて、はじめてお楊の姿を視た時、其の黒

髪に簪されたのは、菊の平打の簪で、父が細工したものであつた。

――藍子は母をなくしてから、さみしさの餘り、町の家の大屋根へ出て山を望んだ。墓のある向山が見え、川が見え、天神橋も見えて、遠方に白菊谷が望まる。屋根のこけらの間には美麗な金龜蟲が這ひ、瓦には、簀して、梅干、紫蘇が擴げられる。

乾いた紫蘇を噛んで、其の昆蟲を取つて遊んだ。

屋根に馴れて、棟瓦を飛ぶと、天に上るやうな氣がする。廂を走ると、町内の柳も楓も、目の下に流れつゝ、空に舞ふやうな心地である。

氣紛れの蝙蝠や、からかひ面の蜻蛉が一寸来ては遊んで行く。小半日も屋根に居るのが知れると、父と祖母に危いと言つて叱られたあとで、階子を引かれた。

其には弱つた。

然うすると、裏二階の小部屋の、肱掛窓の外に、

前町の大きな菓子屋の土蔵のうしろ壁が見えて、其の空地に、一本すつくりと棕櫚の樹があつて、幹も、あの葉の天狗の羽團扇のやうなものも窓を覗いた。

馬に追はれつゝ、死なうとしてから、稚心に、此の棕櫚が可恐しかつたが、屋根へ出る便りのなさから、ふと此に足掛を思ひ附いた。

脇掛窓の小縁から、棕櫚の樹に足を掛けて攀上るのである。

はじめは危かしくて、上よりも下へ、這つたが、馴れると仔細ない。

ひよいと飛つくと、する／＼と幹を攀ぢる、駒の鬣を撫づるが如、ドウと敲いて、やと言ふ掛聲と、もに、雲から抜けるやうに、眞黄色な花を分けつゝ、粉だらけに成つて、屋の棟へ飛移る。所作は貂だ、が形は猿で、悠々と棟瓦の上にちよこなんと坐つて、眞青な向山を眺め、雲白き白菊谷に小手を翳す。

「鶯笛吹き」

猿奏づ。
」

キ、キ、キ、キ、キ。

どつちも古家である。―― 棕櫚の根の石垣からは、眞晝間も幾足となく鼯が出て、裾繼肩車をして、ちよろ／＼と褐色の火を然して戯れた。

キ、キ、キ、キツ！

鼯の然うした悪戯は、火に崇ると言つて、鳴聲のする時は、祖母が臺所へ出て、禁厭に水を流したものである。

耳を澄すと、ざツと聞える。

屋根の上で、其の響を聞くと、長閑な春の日も、夏の日盛も、忽ち空が暗くなつて、急に日が暮れるやうに寂しかった。

禁厭は其の場ぎりですぐに留む。空が明るくなつて、蜻蛉が透通り、天道蟲が輝くのであつたが、いつか知らず、日を経るに従つて、ざツ／＼と溢れ、

さら／＼と走る水の音が絶えず聞ゆるやうに成つて、
目の暗さ、心の寂しさ。

家の中に居ても同一であつた。

屋根に居て聞く時は、――

「山道は路險し。」

「海道は波高し、

ましてや北陸道は、

雪深かななるものをや。」

甚兵衛の山家の納戸に、玉暖かなる母の衿に、此
の頬を埋めつゝ聞いた。

（――今も聞く、――）

白菊谷の眞夜中の水の音が惚ばれた、悲しいやう
な、嬉しいやうな、寂しいやうな、情ないやうな、
生れかはるやうな、消失せるやうな、涙ぐましい思
ひに堪へぬ。

いつも響く水の音は、前通の表町から、廣く深く
奥を通して、我が立樹町まで續く、其の大きな菓子

屋が、菓子だねを洗ひ、米を研ぐ、絶えず使ふ井戸の水で。井戸は壁一重隔てた我が家の隣に近い。而して、池ほどの大きさであると、父にも祖母にも聞いたが。

秋の或日、其の水が湧上り、軒下に溢るゝばかりの音して、人聲の立騒ぐのを、壁隣の大きな空洞と思ふ裡に聞いた。

菓子屋が井戸替をするのだといふ。

戸外へ出ると、小溝は滾々として瀬をつくつて流れて、水は小路に溢れた。

我家とゝもに、此の小溝を前にした鄰家のしもた屋は、當時、菓子屋の一番々頭が住むのであつたが、もとは隠居所で、別棟に裏町へ建てた、菓子屋の地續きであつた。

井戸替の綱は、此の口へ曳いて出はしなかつたけれども、自然の出入に磨格子がカラリとあいて、

見透すと、框にも、すぐの部屋にも人影なく、疊
横長に六疊ばかり、箆笥も道具も置いてはない。突
當りの板戸が開いて居て、其の中が穴のやうに暗か
つた。水氣が立つて、其の奥に、ほう、やツと言ふ
鳥を追ふやうな人の聲が籠つて、ざあ／＼どツと鳴
る水の音。

後に知れた、が、此の長六疊は、殆ど通廊下の
やうなもので、菓子屋の奥なる、女房娘など、人目
に立たぬやう、裏町へ出るにはいつでも此處を使つ
たのだと言ふ。お楊も禮吉と知つてから、
母が祕藏した草雙紙、錦繪など見に来るのに、一度
なんぞ、同町内の憩意づくで、此の六疊を抜けて來
た事さへある。

— 幼い藍子は、扨て、幾度か猶豫つたが、何
故か白菊谷の水の音に似たと思ふもの珍しさと、不
思議さに堪へ難くなつて、下駄を搦んで、ちよろ／
＼と疊を過つて、向うの土間へトンと下りた。

土間の廣さ、思つたより井戸の大きさ。ぐるりと

廻つて、環に成つて、三四十人の人ばかり。水は一面に溢れて、浅い流のやうである。

小兒なんぞは、大川に塵が浮いたも同然、誰も見咎めるものはなかつた。

人数は多いが、薄暗い裡に、皆影のやうに動く。足許の波と見て、空高い破風の明に動くのは、土間の凸凹に流るゝこぼれ水である。

遙に、トンネルから透すやうな表町が見えて、其處を人が行き、馬が通る、

別天地の感がある。
幼兒は奇蹟を見た。

藍子は、其處に立つ人の、物語の裡なる怪しき姫、白袿に緋の袴して、丈なす下髪に、黒々と黛しないのを怪しんだくらゐである。

「そうれ。」

と地の底から四五人一齊に呼ぶ聲に、

「おほ来た。」
と同音に應ずると齊しく、二十人ばかり、素裸な
のが一系列に釣瓶の綱を曳いて、どどどどどと駈出
した勢に、不意に引込まれて、吃驚すると、足許に
打まけられた鯉鮒と、ともに狼狽へて、一所に哄とば
かり雪頹れ状に、廣い表町へ突抜けた。

七人ばかり、揃つて煎餅を焼いて居るのに、同じ
世にある事を知りながら、井底から、打上げられた
やうな思ひで、ころびもしないが、ころんとして、
大きな菓子屋の軒前に、金米糠の核に成る芥子粒の
如く立つた目に、ちらりと映つた。同じ世には又あ
るまじき、母親に似た面影を、一目見たのは、眞向
ひの、何やら、金銀に輝く店前に立つて、此の井戸
替の騒ぎを羞覗いた、すらりと丈たかき美女であつ
た。

髪に、白菊の平打の簪した、
お楊であつた。

餘所の娘と知つては、似た母とばかり思ふよりは、
取散した其の記念の草雙紙の美女の繪に、幾人も、
目、眉、口許、其の似たのを發見して、一冊づゝ、

選えらんで懷ふていにしては、時とき々見較みくらべながら、見較みくらべよう
とてあこがれ出でた。

其その行ゆくのに、いつも折をりを待得まちえては、鄰家となりやの疊たゝみ
廊下らうかから、菓子屋くわしやの廣土間ひろどまを、野越のこえ山越やまこえ、谷越たにこ
ゆる思おもひで辿たどつた。

誰たれにも見咎みとがめられなかつたのである。

「坊ぼつちゃん。」 お楊やうの機き械かい屋やの店みせから、
小僧こぞうが駈かけ出して稚兒をさなごに言いつた。

「内うちのお楊やうさんが、繪本えほんを見みせて下くださいつて、御ご
馳走ちそうをしますから。」

「あゝ、美うつくしい。」
と抱だきしめて胸むねのはずみに、カラリと鳴なつて、極ごく
彩色さいしきの。口繪くちえに落おちた、平打ひらうちの簪かんざし、其その白菊しらぎくの、高たか
彫ぼりの、父ちちの細工さいくであつたのも、菊きくに香かを添そへ、露つゆを
添そへた、床ゆかしい縁えんと成なつたのであつた。田舎源氏いなかげんじの

國貞くにさだの繪ゑの藤ふぢの方かたが、よく其その人ひとに似にて居ゐるのである。

ふぢのかたは、すぎこしかた、ゆくすゑのことおもひやり、ねふりもやらぬ、ねやのうち、ときのだいこのきこ

ゆるは、はや、うしみつのところやらん、あまどもくらず、しやうじをあけ、つぼせんざいをみるやうに、うちまぎ

らしつ、そらだきの、かをりをしるべにしのびよる、みつうぢはおづ／＼と、びやうぶかいやり、こゑほそめ、

屏風びやうぶは櫻さくら、町まちは雪ゆき　――　お楊やうと二人ふたり炬燵こたつにして。

「母ははうへさま、けさほどあげしわたくしの、ふみをごらんあそばしてか、」
「ヲゝよんだときのそのおどろき、

二人ふたりは一寸ちよつと顔かほを見みた。

「これほどまでにしんせつなど、心こころでないでそ

のふみは、はだみにそへてもつてゐる、

「さやうならわたくしの、こひをかなへてくださいますか、」かなへる心こころで、をなごどもは、とほくへねさせて、

わたしひとり、ねやしつらはせてまつてゐた。

みちにそむくもそなたのため、いのちすすつるはかねてのかくご、

さアこちよつてね、しやと、――

藍子らんしは、ら／＼と涙なみだを流ながした。

「おつかさんが戀こひしいの、おかはいさうに
とほろりとして、

手てをとりましたまへば、みつうぢは、こゑうちくもり、めをしはたゝき、「みづよりきよい、おんみをば、わたくしゆ

ゑにゝごらせませす、此このよばかりか、ぜんせから、むすびおいたるあくえんと、おもへばいとゞかなしきを、とよし

のまへのべつでんには、おもしろさうにつゞみ

のおと、それにひきかへあなたにも、

「
「
」
」

そなたもともに、うきくらうと、いだきよせつゝ
なきたまふ。

「姉さん、」

と見上げた目の露を、伏せた白菊の花にうけて、
黒髪おもく引寄せた。花に颯と影さすばかり、お楊
は瞼ほんのりと、

「禮ちゃん、一生離れまいね、
―― 私は見棄

てはしませんよ。――

「母さん」

其の練衣の袖に絶つて言った。

「姉さん。」

と言った。

「奥さん。」

と言つた。

「お楊さん。一目お顔を――逢つて下さい。」

白菊は揺れ、清水は流るゝ。

「禮吉さん。」

「私はまだ鏡を見ません。」

と言ふ聲は、香に震へて、薫を運び、

「私は忘れはいたしません。貴方の思つて在らつしやる萬分が一ほどありませんでも、變つた顔を、お目にかけてたくありません。たゞ人のう

はさにも、お楊はひどい容に成つたと、お聞かせ申したくないばかりに、蟲の毒にかぶれましてからは、親にも兄弟にも影を見せしないで苦勞しますは、間違つてゞも美しいと思つて下さる、貴方ばかりのためなんですすよ！

しかし、
馬士の爺さんも然う言ひます。
もう大概なほりました。

一度鏡を見ましてから、更めてお目にかゝります。
「

「否、おだましなさるんです。今夜はこんな不意でしたから、お遁げなさる間がなかつたのです。一度、これ切お別れ申せば、貴女は決してお逢にはありません。否
お逢にはなりません。」

「まあ、そんな
氷のやうに冷い水も、こん夜ばかりは、あなたのそばで、熱いやうに存じますもの。何で嘘をつきませう。今にも、一度鏡をみて、もとの顔に成りましたら、屹とお目にかゝります
おあんばいの悪いのに、濡れては悪うございます。おとなにお歸りなさいまし。」

「
身體なんか構ひませんのに――
ですが、しかし、何時お逢ひ下さいます。」

「月夜に、

其のお月様を姿見に、

――

さうして恥しくありません其の夜に。」
と清しく言つた。

トン。

トン

トン ー

眞ま夜よ中なである。
 月つきも水みづも山やまも、人ひとも、人ひとの呼い吸きも、白しら菊ぎく谷だにはいま

身み支じ度たくして禮れい吉きちが、臥ふ床しどの枕まくら頭あたまに、油あぶら暗くろく、灯ひの
 薄うすき行あん燈とうを、恰あたも廂ひさし漏しもる月つき影かげの如ごとく、身みに添そへて、
 膝ひざ寒さむく、袖そで冷つめたく、埋うもれ火れびの火ひ鉢ばちに寄よつた。其その状さまは、
 蓑みの蟲むしの蓑みのを脱ぬいだ風ふぜい情じやうに似にて、胸むねに指ゆび先さきを觸ふれて見み
 よ、心しん臟ばうは果は敢かなくチちと鳴なくであらう、あは
 れに戀こひに瘦やせて居ゐた。

トン。

其その煙き管せんを當あてると、

トン

森を隔てゝ、あれ聞けーー 庄屋の住居から、
お楊が靜に、或る微妙なる間を置いて、應ずるらしい音がした。

此の音は、さながら消えて飛ぶ魂が、膚白うして
光ある天上の美しき、星に相觸れた響のやうな心地
がする。

山一所、一面の月下の白菊は、たゞ其の星の影に
似て

禮吉の血は、其の響に赤く薫り、全身には月影の
刺青した。

「月の明なる夜ーー」
と、お楊が約束した夜よりして、今夜は數へて五日
めである。

其の間、或は曇り、或は降り、或は靄が深かつた。
其の時を過すのは、凡そ晒井の大いなる井戸の釣

瓶へに掬すくはれた小魚こうをの、はじめに龍宮りうぐうに謁えつしたる如ごとく、
菊きくの花はなを簪かざした島田しまだの姿すがたを見てから、二十年餘ねんよを過すこ
すよりも尚なほ久ひさしかつた。

ひとへに、天晴てんはるゝを待まつのみ。人ひとと、ものいふ
も、ものうくて、唯引被たひひきかついて、晝ひるも眞暗まつくらに引籠ひきこもつて
居ゐたのであるが。

「白菊しひくきく黄菊きく、なあ小菊こきく、
こんな晩ばんには、なあ、小菊こきく、
兎うさぎと猿さるとが、なあ小菊こきく、
餅もちと酒さけとで、なあ小菊こきく

日ひの黄昏たそがるゝより宵よひかけて、此この奥山家おくやまがの稚兒をさなこた
ちが、手拍子てびやうしに聲こゑを揃そろへて、一人々々ひとり／＼、飄々ひょう／＼として、
舞まひ散ちり、舞まひ上あがる、風かぜの木この葉はに乗のつて遊あそぶらし
く唄うたふのを聞きいた。

其それが月明げつめいの賦ふに成なつたのである。

思おもひ掛がけず、爐端ろばたに大男おほをとこが居ゐて、仰向あをむけに寝ねて居ゐ

る。

禮吉は山に遮られたやうに思つた。

此の日は、甚兵衛の家に、午過ぐる頃から何とな
く人の出入があつて、男どもの高聲など聞えたので
あるが、如法引籠つて誰の沙汰も人の話も聞かなか
つた。

男どもの寝るのは、此處ではない。

或は甚次郎が歸つたか。

我を救つた魔ものである。

禮吉は、昔もの語に、たとへば願懸の祠、社の廣
前に、信仰を試みんとして顯るゝと聞く
眞黒な牛の背を踏む心地して、辛うじて、しかし、
躓かず、轉ばず、倒れずに土間へ飛んだ。

最う跣足で。

つゝ、明るい中に、馬頭観音のおはします如く、小
時に既にと見れば、棟の草もうら枯れ

屋は塚に似て、駒をば葬つたやうに寂寞として居た。
が、却つて、嘶く聲、ひづめの音するより、もの凄
い。――渠は、此の時も、前夜と同じ、もの置

と、其の廐の間の廂合を潜つた。

芝暖く、薪も香ふ、破筵も簾を捲いて、忍ぶ細

道玉を敷く。

森の光は流るゝ如し。

庄屋の棟は、月宮殿。

蜘蛛の呪詛

七十

「可し、此の位な事はあるだらうと思つた――
覺悟をしたんだ。 何の！――」

渠は背戸山から納屋の出口の、其處を、引返して、
更に納屋の中にものを搜つて居た。

「蓑か、何にする？ 恚る月夜に、
否、渠は刃器を求めた。」

何故と言ふに、あの風呂桶を片寄せた破壁から掛
けて、小鳥に霞網を引く如く、前途を覆うて、一面
に蜘蛛の巣が懸つて居たから
それが、キラ／＼と光つた。

惟ふに、月の中空に充滿した露の玉が、刻まれて
い尖つて、臍を織くして霜に成る時の、深山の現象
を、怪しき幻に視たのであらう。

が、拂へば搦むし、引けば粘る、
りでない。前夜のあの小雨の時は、引くに從つてさ
ら／＼と鳴つたのは、色染めた木の葉であつた――
可懐さに、其の關の手形はまだ袂を棄てない――
が、茲に搔拂ふ絲と／＼もに手繰られて、壁の面に
黒くぼと／＼と蠢出づるものは何ぞ、醜き蟲の影で
ある。大きな蜘蛛に相違あるまい。然も、其の影の
動くと／＼もに、虻とも蠅とも分かず、忌はしい音を
立てた。

ぶうん、ぶうん、ぶうん
と鳴る。

媪が、瘦せさらばうたる指で絲を引いて、絲車を
廻す音。

慄然と血の冷ゆると齊しく、水のやうに澄む瞳を
屹と凝して視ると、指の環ばかりの蟲に、媪の目が
見え、鼻が見え、窪んだ目が見え、くひしばつた唇
が見える。白髪が生えて、かき開けた黒い肋骨が見
え、耳にスクと立つて、ばさ／＼と肩に亂れた白髪
の、其の一條づゝの數ほど、總身の皺が歴々と顯れ

て、恰も火の山の焼石に刻んだ、三途河の奪衣婆に
髣髴として居たのである。

蜘蛛の絲は、限なく其の車から湧いて出る。

破れば絡ひ、断てば繋ぐ。其の煩さは、尚ほ忍
ぶべきも、堪難いのは、あの車に取る絲の原料は、
盡く、こゝに、ひとり苛立ち狂ふ禮吉の身よりして、
皮も、肉も、血も、魂も、ずる／＼と引出さるゝや
うな思ひがした事である。

非ず、それよりも寧ろ、堪難かつたのは、月の前
に、目が曇つて、山が暗く成らうとした瞬間であつ
た。

暗ければお楊は逢はない。

蜘蛛の面はニヤリと笑つた。

腥い臭氣がして、耳がぐわんと鳴つた。――今
度は、目口から葱の核が無数の黒い蟲に成つて湧い
て飛ばうも知れぬ。

渠は頭を掴んで、納屋に刃器を求めに引返したのである。――

筵を探ると、山枋がバタリと倒れた。

此の枋は、鑄刀のやうに處々光つた。が、刃があるのでは決してない。凡そ此の山枋に限

らず、古箒も、石臼も、納戸の煤の中に棲むものは、蠹く其の性が金銀珠玉である如く、くすばり返りつゝも靜に輝いた。屋根、壁の隙間から、漏

れなく一つ／＼影がさすのである。月は天心にあつた。

渠は、やがて一挺の斧を得た。が、取ると、ぼろりと落さうとして慌てゝ取直した。恚る

時、其の柄が朽つると同時に、我が皺める手足と、頤に垂るゝ白い山羊鬚を見るであらう、と憂慮したのである。

暮を打つ仙人は其處には居ない。

斧を取直すと、決然として納屋を出た。

出^でしなに、殆^{ほとん}ど無^む意識^{いしき}に眞^ま向^{かう}に翳^{かざ}して空^{くう}を切^きつた。

風^{かぜ}の、こゝばかり吹^ふくが如^{ごと}く、ぶん／＼と絲^{いと}を繰^くる音^{おと}が絶^たえず我^わが居^あ處^{ところ}を繞^{めぐ}つて響^{ひび}いて、納^な屋^やは早^はや屋根^{やね}ぐるみ、白^{しろ}く蜘蛛^{くも}の圍^ゐに巻^ま詰^{まつ}められたやうに思^{おも}はれたからである。

「何を、何を。」

渠^{かれ}は縦^{じゅう}横^{わう}に斧^{をの}を掉^ふつた。

就^な中^{かん}巢^づの濃^こきかたまりを、月^はを扱^{しご}いて切^きると、搦^{から}んで、する／＼と這^は出^{ひだ}す千^ち筋^{すぢ}の太^{ふと}い絲^{いと}に連^つれて、車^{くるま}は壁^{かべ}の面^{おも}を廻^まり廻^まり大^{おほ}きく成^なり、蜘蛛^{くも}は八^は方^{ほう}へ足^{あし}を踏^ふ開^{ひら}いた。斧^{をの}の手^てをしかと凌^{しの}ぐと見^みえつゝ、ふはりに乗^のつて、巢^すの上^{うへ}へ手^て足^{あし}を開^{ひら}いて、ずるりと腹^{はら}這^はひ、ふは／＼と宙^{ちゆう}に寄^よつたのは媪^{おひな}である。

白^{しろ}髪^がを捌^さいて、齒^はを剥^むく處^{ところ}を、

「あッ。」

思^{おも}はず退^{しざ}り状^{ばい}に八^は夕^{せき}と切^きつた。首^{くび}はつけもとからピタリと落^おちた。

同時に皆消えた。
月は玲瓏として居る。

時に唯一つ、地に落ちたまゝ、尚ほ消えない其の
白髪しらがの首くびの、次第しだいに豆粒まめつぶの如ごとく小さく成なり行ゆくのを、
身震みぶるひをしつゝも瞳ひとみをためると、眞黒まつくろな頭かしらに、血ちのあ
との紅べに、一點てんを留とどめて、二筋すぢの髯ひげが、きり／＼と鋭すまど
く、然しかも鷹揚おつやうに、輪わを卷まいて動うごく。

地軸ちぢくに突込つきこむばかり、斧きのの背せを返かへして犇ひしと打うつて、
「斑猫はんめう。」

パツと、刃器はものを棄すつるとゝもに、蹠よろ／＼と退しざつて吻ほっ
と息いきした。

此この幻怪げんくわいなる出来事できごとは、しかしながら、嘗かつて定め
られた正本しやうほんの一節せつで、我われは木偶でくの如ごとく操あやつられたやう
に思おもはれて、忽たちまち些さの不可思議ふかしぎをも感かんじなく成なつた。

トン。

トン

あれから、あれから

時ときはおくれた。

「 待つ。―― 待つ。―― お

楊やうさんが―― お楊やうさんが。――

跣はだし足あしで、はた／＼と月下げつがを走はしる。―― 蹙あしおと音おとは、

怪鳥けてうの羽搏はぶたくが如ごとく響ひびいたのである。

巡禮。お楊より

七十一

お楊——雪邑の令室は、低き巖角、石の砧に、
露を敷いて、葉も莖も避けながら、むらがり生ふる
白菊なれば、花の中に包まれて、端然として、姿を
見せた。

清水の流は、裳に近く、月に十三絃の白銀の調を
掛けて、玉盤に光を湛へつゝ、麗人の影を奏でゝ流
るゝ。

お楊の容は、さながら滿地の白菊を唯大なる輪に
して、其の一輪の蕊であつた。

かよわき肩に、よう支ふる、品よき圓鬘にも擬ふ、
房やかなる黒髪を櫛卷なる、眉の匂はほのめきなが
ら、袖を置く手もすなりと、膝もなやかに、さ
しうつむいて居たのである。

「お母さん。」

「はい。」

胸を打つて、あとの聲が續かなかつた。呼吸をのんで、

「姉さん。」

「えゝ、禮ちゃん。」

ついで出すべき言もなく、

「奥さん。」

と言つた

「あゝもう、禮吉さん、」

とばかりあつて、肩、黒髪も、やゝ斜に、

「貴方　奥さまは。」

「女房は持ちました。」

「御一所に。」

「否。」

「東京に、」

「否、」

「それでは。」

「女房は此處に居ります。」

―― 否――

私わたしと一所しよに、こゝに、私わたしの心こころと、
私わたしの身からだ體たいと一所しよに居あると言いふ事ことなんです。――
お楊やうさん――失禮しつれいですが、お楊やうさん、私わたしは女房にようぼう
を持もちました。しかし女房にようぼうは世よの一切さいではありませ
ん、女房にようぼうのほかにも、日ひも、月つきも世界せかいもない事ことはない
のです。現げんに、こゝに月つきの光ひかりがありま
す。白菊しらぎくが咲さ
いて居あて、清しみづ水みづが流ながれて、清しみづ水みづには其その薰かをりがありま
す、其その上うへに月つきの光ひかりがありま
す、其その上うへに、

渠かれは凝ぢつと視みた。

「其その上うへに、貴女あなたがおいでなさいま
す、事じつ實つです
もの、お楊やうさん、女房にようぼうのほかに、貴女あなたをお慕したひ申まを
すのは、女房にようぼうと二人ふたりして、月つきを見みますのも同おなじです。
身みも心こころも私わたしと一所しよですから、こゝで、貴女あなたに言いひま
すこと、申まをしますことは、女房にようぼうも聞きいて居あります、
いや／＼、聞きいて居あるより、一所しよに話はなし、一所しよに申まを
し、一所しよに言いつて居ありますも同おなじ事ことです

禮吉れいきちは言いふことも、露つゆに、葉はに、置おく手ての場ば所しよも、

しどろに成つた。が、僅に氣を沈めて、改めて、
「貴女お加減は？」
とやゝ落着いた。

「最う、やがて二月に成りませう

お月様は今夜はじめて、

帯の合せめ、やゝ伸びて、少し衣紋を正したが、

「漸と、あの顔を上げまして、照され

ながら見ましたよ。ですけれども 禮吉さ

貴方に見られますのは、私

は恥い。

と肩のふるへを、おくれ毛に幽に傳へて、

うつむいた顔を上げた。上げたのは禮吉に背けたの

である。背けた片頬の雪なすを、削るが如き月の影

かな。

仰いで、二十年の昔の面影の、微に瘦せたと見る

ばかり、年紀も端麗さもかはりはなかつた。

菊を透せば、菊に隔り、葉をさしのぞけば、葉に

隔る。

やあ、餘り是では、かばかりの美しさは、霧が嫉

んで呑むであらう。

目を下に伏せた時、低くついた我膝近く、跣足の雪の素足があつて、慎ましく深き襪はづれに、しつとりとかゝる■に、僅に片足の其の爪さきの、密と漏れつゝ、裳に反つたおや指が白く幽に震へたのを視た。

「あれ

」

「否、否、お楊さん、

生命を掛けて申

します、私は生れました時から約束のやうに、貴女を、貴女を戀ひ、こがれ、慕ふんですー雨も降り、風も吹き、霧も、靄もありますから、晴曇は知らないこと、大海の潮と一所に、片時も、此の世の中に、否、私に、貴方と云ふ月の影の離れた事はありません。毎夜のやうに夢を見ます、夢さへ夜の夢ばかりです。ーそれだけまでに、貴女を慕ひ、貴女にこがれ、貴女を戀ひはしますけれど、しかし、決して、誓つて、そんな氣で、心で、いま鬪つたものではありません。餘りに、貴女

の足が、
足がお冷たさうです、懐中につ
けて暖めて差上げたいと存じました。
う
つまり失禮をしましたのです。」

月にめかたのあるやうに、其の重さに堪へやらず、
風なきに菊の枝のしなふばかり、腰掛けた巖もしな
やかに、ツと崩折れて、

「まあ、あんな事を、」
と、たしなめるやうに云つて、ふと微笑むかとする
れば、はら／＼と落涙した。

涙は取る手に熱かつた。

「母さんは、貴方の母さんは、此の山奥で、貴方
をお抱きなすつた時、どんなお話をなさいました。」

禮吉は、月に命ぜらるゝ如くに言つた。

「海道は波高し。」

「山道は路巖し。」

「山道は路巖し。」

「まして北陸道は雪深かんなるものをや、

「白き頂が禮吉の肩にかゝつた。

「いざ／＼伊勢路にかゝらむ。」

「禮吉さん。」

「お母様を念じて下さい。觀音様を、鬼子母神様を念じて下さい。」

「巡禮がしたくなりました。」

「私が貴方の手をひいて、」

「あゝ、お楊さん。」

途端である。

背後から、眞黒な影が小山の如く蔽ひかゝると、
ものをも言はず、一棍の山朶が禮吉を一撃した。

其は甚次郎であつた。――

此方は殆ど本能の力で、ハツと躲した頭は、のめつて、僅に前へ避けたばかりで、首筋を掛けた背骨を縦に、氷の裂けるが如き打撲をうけた。

唯、項は折れて、頭が離れたと思ふ渠の首は、しかし首ばかり、最期の一念を籠めて、お楊の胸に縋つた。が首には縋るべき兩手がない。

現に直覺した其の首は口で縋つた。離れまいとして食入つた唇は、柔かい白い胸に届いて、いまは世に思置くこともあらずと思ふと同時に、我が頭は、頭に赤く羽黒くして髯ある毒蟲に殆ど其のまゝであるかに迷つた。

僅に、袖を漏れた、二の腕に羽の留つたのでさへ、此の麗色を汚し、爛らしたのである。

齒と唇はお楊を殺さう。

耳はもがいて、摺つて離れようとする首筋の、しかし確とお楊に抱きしめらるゝと感じた時、お楊の黒髪が颯と亂れた。

忽ち暗く成つて何も見えない。

日も知らず、時も辨へず、冥々たる霧の裡に、駒
が黒い。――其の上に渠は騎して、美しき神の
如きお楊の姿が、悄然として其の前を行くのを視た。

幽に水の音を聞いて、下に千仞の斷崖を臨んで、
二股尾を過ぎる、と心着いた時、眞蒼な淵の上に、
二つ舞った柴の束が、見る／＼一つ沈むと、一つは
ふは／＼と軽く浮いて、風に乗つて、ふつと来て、
我が手に抱かれた。濡柴は蓑に似て、其の蓑に、優
しい女の顔があつた。

其の顔は露野であつた。

露野は禮吉を慕つて、あとを追つた。

町を離れた人なきあたりで、凌辱を加へようとした
大郷子等一類と、かの姫を守る隠亡等と格闘した。

其の修羅道は、身を以つて脱れて、單身白菊谷にあ
こがれたが、あはれ、二股尾の悪路にして、多人數
の土方のために捕へられて、露野は身を淵に投げて、
眞日中に消えたのであつた。

禮吉が再び意識した時、病院の臥床に横はつて、
其處で――妻のお橘を見た。

大郷子等が、うよ／＼と集つて居る――見舞
をす、と稱へて、且つ嘲り、且つなぶりに來て居た
のである。

渠等に対して、病者の身の楯に成つて、激しく目
を見据ゑて居たお光の顔は蒼白かつた。

が、お橘は臉を活氣に染めて、勇ましく言つた。
「確乎なさいよ。骨は私が拾ひますから。」
お橘は當時、喧嘩のために傷ついたと思つたので
あつた。

さて、名もなき詩人には、藍子には、寧ろ本懐で
あつたであらう。戀を刻んだ、白骨の彫刻ものと成
つて、お橘の袖に抱かれた。

渠の父母と、露野のとを合せて、四人の骨を守る
のに、お橘ばかりでは、其の胸に、重さに堪へまい。

お光は、一年の暇を取つて、ともに東海道を抱いて上つた。

上野に通ずる北陸線は、秋の霖雨のために、途中故障があつたからである。東雲であつた。

汽車が箱根を越すと、雪の富士は頂を薄りと桃色に、紫、濃紫に裾を曳いて、霧のいまだ暗い裾野の田家には、早朝の燈が映つた。

「目をお覺しなさいな。」

と、お橘が袖で包んだ白いものに言つた。

「箱根を越しましたよ。」

お光が其の時、帯の數珠を取つて、手にかけて、目を閉ぢた。

熟と此を視ると、颯と色をかへて、四邊を忍ばず、お橘は、包むべき手巾の隙もなく、はじめて、ハツと泣いた。

――此の生れたまゝの江戸兒は、田舎でなんぞ

死んだものは、箱根を越しやあ、誰だつて目が覺めるやうに蘇生ると信じて、それまでは涙一滴落さなかつたのであつた。

葬式の日、お楊から包が届いた。丈にも、疊にも餘るべき黒髪に、名香を巻込めて、――

音信が添つて居た。

いま一度、斑猫に咬まれ申したく、さ候へば又白菊谷にて、お目にかゝられ候ことゝそののみ念じ。

麻川様

楊より

御奥

【完】